

中国江蘇省南京市余村における潘氏祠堂の  
文化的特質の再認識に基づく地域活性化

2025 年 2 月

千葉大学大学院 融合理工学府

創成工学専攻 デザインコース

李 敏



(千葉大学審査学位論文)

中国江蘇省南京市余村における潘氏祠堂の  
文化的特質の再認識に基づく地域活性化

2025年2月

千葉大学大学院 融合理工学府

創成工学専攻 デザインコース

李 敏



## 要 旨

中国においては、1960年代前後の社会状況の変化や今日の急速な経済発展などを主な要因として、生活文化の大きな変容・消失が余儀なくされている。近年では、ようやく、伝統的な文化資源の見直しに基づく地域振興策を模索する動きが生じつつある。

本研究は、中国江蘇省南京市の近郊の余村に残された潘氏一族の祠堂である「潘氏祠堂」を取り上げ、文献調査・現地調査に基づき、同祠堂のハード・ソフト両面における文化的特質を明確化するとともに、得られた知見に基づき、当該地域における今後の内発的な地域活性化に向けた指針を導出することを目的としたものである。

序章では、潘氏祠堂に関わる生活文化の課題を考察し、研究背景と目的、先行研究、対象地域、研究方法および論文構成を示した。

第二章では、潘氏祠堂の建造当初の内部構成や使用された材、装飾文様などを再現し、その空間特質を記録・分析した。

第三章では、日常生活と非日常生活における潘氏祠堂の使い方を明らかにし、空間演出がどのようになされていたかを把握した。

第四章では、潘氏祠堂の建造過程と儀式の記録を通じて、当時の地域の各種資源の利用方法とその技術を記録した。

第五章では、「潘氏祠規」を取り上げ、宗族文化における規則の内容を分析し、その文化的特質を明確化した。

終章では、上記で明らかにした知見に基づき、当該地域における地理的特徴、資源概況、歴史、人口規模、文化特色や伝統技術などを統合的に考察し、当該地域における今後の内発的な地域活性化に向けた指針を導出した。

## Summary

In China, significant transformations and even losses in living culture have been inevitable, driven by social changes around the 1960s and today's rapid economic development. Recently, efforts are emerging to explore regional revitalization policies based on the reassessment of traditional cultural resources. This study focuses on the "Pan Clan Ancestral Hall" preserved in She Village, located near Nanjing in Jiangsu Province, China. Through literature review and field research, it aims to clarify both tangible and intangible cultural characteristics of this ancestral hall and to derive guidelines for endogenous regional revitalization based on the insights gained.

In the introduction, the study discusses issues related to the living culture surrounding the Pan Clan Ancestral Hall and presents the research background and objectives, prior studies, research area, methodology, and structure of the paper.

Chapter Two reconstructs the original interior structure, materials used, and decorative patterns of the Pan Clan Ancestral Hall and analyzes its spatial characteristics.

Chapter Three examines the hall's usage in both daily and non-daily contexts, identifying how spatial production was achieved.

Chapter Four documents the construction process and rituals associated with the hall, recording local resource utilization and techniques of that period. Chapter Five analyzes the contents of the "Pan Clan Code" to clarify the rules within clan culture and its cultural characteristics.

In the concluding chapter, based on the findings above, the study integrates an analysis of the area's geographical features, resource status, history, population scale, cultural characteristics, and traditional techniques, deriving guidelines for future endogenous regional revitalization in She Village.

## 目次

序章	1
1. 研究背景	2
1.1. 社会的背景	2
1.2. 中国南京市余村の潘氏祠堂の概要	2
1.3. 中国南京市余村ならびに潘氏祠堂の課題	3
2. 研究目的	4
3. 研究方法	4
4. 先行研究	6
4.1. 南京市祠堂に関する研究の状況	6
4.2. 先行文献の総括	6
4.3. 本研究の位置づけ	7
5. 研究地域の概況	7
5.1. 余村の自然地理的特徴と資源概況	7
5.2. 余村の歴史と人口規模	8
5.3. 余村の文化特色と伝統技術	9
6. 論文構成	12
7. 他地域調査	13
注および参考文献	18
図の出典	18
第二章：潘氏祠堂の建造当初の構造とその空間特質	19
1. はじめに	20
1.1. 研究背景と目的	20
1.2. 研究方法	20
1.3. 先行研究	21
2. 余村の概要	21
2.1. 余村の地理と資源	21
2.2. 余村の歴史と人口規模	23
3. 潘氏祠堂の概要	23
3.1. 潘氏の家系	23
3.2. 潘氏祠堂の歴史	23
4. 潘氏祠堂の空間形態	24
4.1. 潘氏祠堂の内部空間の構成要素	24
4.2. 潘氏祠堂を構成する材とその分析	30
4.3. 潘氏祠堂の装飾文様とその意味	33
5. 潘氏祠堂の空間特質	35
5.1. 水平方向ならびに鉛直方向の空間秩序	35
5.2. 「陰陽交替」の空間配置	35
5.3. 材料の空間特質	35
5.4. 文様の空間特質	35
6. おわりに	35
注および参考文献	37

図の出典	38
<b>第三章：潘氏祠堂の使い方に見る空間演出</b>	<b>39</b>
1. はじめに	40
1.1. 研究背景と目的	40
1.2. 研究方法	40
1.3. 先行研究	41
2. 潘氏祠堂の使用主体：潘氏宗族	41
3. 潘氏祠堂の日常生活における使用	43
3.1. 教育の「場」としての祠堂	43
3.2. 議論の「場」としての祠堂	44
3.3. 納税の「場」としての祠堂	44
3.4. 福祉の「場」としての祠堂	45
3.5. 賞罰を与える「場」としての祠堂	45
3.6. 自らを律する「場」としての祠堂	46
4. 潘氏祠堂の非日常生活における使い方	46
4.1. 祭祀の「場」としての祠堂	46
4.1.1. 祭祀対象	46
4.1.2. 祭祀時間	47
4.1.3. 祭祀供物と器具	47
4.1.4. 祭祀の担い手	48
4.1.5. 祭祀のプロセス	50
4.2. 人生儀礼の「場」としての祠堂	53
4.2.1. 出産儀式	53
4.2.2. 結婚儀式	54
4.2.3. 葬儀	55
5. 潘氏祠堂にみる空間演出とその特質	55
5.1. 多機能を備えた中心空間	55
5.2. 「三礼の秩序」の空間	56
5.3. 人生儀礼などにおける所作を共有する媒体としての空間	56
5.4. 日常生活と非日常生活における経路の差異	56
5.5. 人と祖先が共有する空間	56
6. おわりに	57
注および参考文献	58
図の出典	59
<b>第四章：潘氏祠堂の建造過程と儀式に見る文化的特質</b>	<b>61</b>
1. はじめに	62
1.1. 研究背景と目的	62
1.2. 研究方法	62
1.3. 先行研究	62
2. 建造の全工程	63
2.1. 選地	63
2.2. 用材計画	64

2.3. 材料と置場の準備	65
2.4. 地盤の施工	66
2.5. 骨組みたて	66
2.6. 壁づくり	68
2.7. 屋根葺き	68
2.8. 室内工事	69
2.8.1. 空間仕切り壁の構築	69
2.8.2. 方磚の敷設	69
2.8.3. 壁面と天井板の装飾	69
2.8.4. 門窓の設置	69
2.8.5. 祭祀用品の装飾	69
2.8.6. 家具の配置	70
3. 建造の儀式	70
3.1. 動土儀式	70
3.2. 上梁儀式	70
3.3. 謝土儀式	71
4. 建造時期と費用	71
5. 建造過程と儀式にみる特質	72
5.1. 図面のない建造方式と師弟制による技術の継承	72
5.2. 地域材料の活用と工夫	72
5.3. 建造過程における分担と協力	72
5.4. 自然との調和	73
5.5. 祖先と神との共存を重視した祠堂建造の儀式	73
6. おわりに	73
注および参考文献	74
図の出典	75
<b>第五章：潘氏祠規にみる宗族関係とその特質</b>	<b>77</b>
1. はじめに	78
1.1. 研究背景と目的	78
1.2. 潘氏祠堂その祠規	79
2. 研究方法	79
3. 先行研究	79
4. 潘氏祠規の概要	79
4.1. 潘氏祠規の内容	79
4.2. 潘氏祠規の編纂経緯	80
5. 潘氏祠規にみる宗族関係	80
5.1. 潘氏祠規にみる宗族における人と人との関係	81
5.2. 潘氏祠規にみる宗族における人と祖先との関係	84
5.3. 潘氏祠規にみる宗族における人と社会との関係	85
5.4. 潘氏祠規にみる宗族における人と器物との関係	86
6. 潘氏祠規にみる宗族関係の特質	86
6.1. 自律の特質	86
6.2. 共助の特質	86

6.3. 共治の特質	87
7. おわりに	87
注および参考文献	88
図の出典	88
<b>終章</b>	89
1. 各章で得られた知見	90
1.1. 序章で得られた知見	90
1.2. 建造過程と儀式にみる特質	90
1.3. 使い方にみる空間演出	90
1.4. 建造過程と儀式にみる文化的特質	90
1.5. 宗族関係とその特質	91
1.6. 終章で得られた知見	91
2. 潘氏祠堂の文化的特質の考察	91
2.1. 時間と空間の秩序を基盤とした潘氏祠堂の文化的特質	92
2.2. 共生・共有・共享の理念を体現する潘氏祠堂の文化的特質	92
2.3. 地域資源と地方文化を体現する潘氏祠堂の文化的特質	93
3. 潘氏祠堂の文化的特質の再認識に基づく内発的地域づくりの指針の導出	94
4. 潘氏祠堂の文化的特質の再認識に基づく内発的な提案	94
4.1. 現在までに実施した提案	95
4.2. 現在までに実施した提案の検討	96
4.3. これからの提案	97
5. 潘氏祠堂の文化的特質の再認識に基づく内発的地域発展の展望	100
注および参考文献	102
図の出典	102
<b>謝辞</b>	103

## 序章

## 1. 研究背景

### 1.1. 社会的背景

20 世紀後半から、世界的に科学技術が急速に進歩し、人びとの生活様式に多大な変化をもたらしてきた。特に 21 世紀以降、近代化の進展は先進国だけでなく、発展途上国においても加速している。このような変革は、物質文明の急速な発展を促進したが、その一方で伝統的な文化遺産に対して深刻な影響を及ぼしている。多くの民族や地域における独自の文化的特徴は、近代化の波に押され次第に失われつつあり、これが人類文明の多様性の衰退の一因となっている。これに関連して、現代社会においては、とりわけ若い世代の伝統文化に対する認識や参加意識が低下している。この現象は、多くの伝統的な儀式、手工芸、歴史的建造物が忘れ去られ、伝統文化が周縁化される危機を引き起こしている。さらに、グローバル化の進展の中で、伝統文化はしばしば時代遅れや後進的なものと見なされ、その衰退はさらに加速している。また、多くの地域では人口減少や高齢化といった社会問題が存在しており、地域の持続は厳しい課題に直面している。伝統文化や集団的記憶に依存する地域は、社会構造の変化に伴い、活力を失うリスクが高い。そのため、伝統文化の再評価と保護、特に人びとの生活様式や文化的伝承の再認識は非常に重要である。本研究は単に歴史的建造物の保存を目的とするだけでなく、現代化とグローバル化の圧力の中で文化の多様性を保持しながら、地域の持続可能な発展をいかに促進するかという課題に対する取り組んだものである。

近年ではようやく、伝統的な文化資源の見直しに基づく地域振興を模索する動きが生じつつある。このような地域振興は単に文化の復興を目指すだけでなく、経済の発展も重視している。この政策の背景のもと、多くの研究者や地方政府が、文化遺産の保護と経済の発展をどのように結びつけるかを模索している。4000 年以上の文明史を持つ中国においても、歴史的建造物の保護と伝承は大きな課題となっている。中国の歴史は、多くの王朝の交替や外部勢力の侵入を経て、多様で豊かな文化的景観を形成してきた。しかし、1960 年代の社会的変革は、こうした文化遺産に壊滅的な打撃を与え、多くの宗教的建造物、宗教的芸術品、そして無形文化遺産は深刻な破壊を受けた。それにもかかわらず、多くの地域では人びとが個々の記憶や集団の努力によって、祖先から受け継がれた文化を保とうと努めてきた。そのような中で、1978 年の改革開放以降の急速な経済発展は、再び伝統的な文化や生活様式に大きな挑戦をもたらし、特に農村での有形文化遺産の保護が急務となっている。

### 1.2. 南京市余村の潘氏祠堂の概要



図 1-1 潘氏祠堂の写真



図 1-2 潘氏民居の写真

本研究で取り上げた祠堂とは、中国において、宗族の祖先や社会に多大な貢献をし

た人物を祭祀するための建造物である。「祠」の意味は『詩経・小雅天保』[注1]によると、「禴祠烝嘗、于公先王(先公先王に対して、春夏秋冬の季節ごとの祭祀を行う)」。漢民族の毛亨は「春日祠、夏日禴、秋日嘗、冬日烝(春は祠と称し、夏は禴と称し、秋は嘗と称し、冬は烝と称する)」と言った。それで分かるように、祠の本義は春の祭りである。後に転じて祭祀を意味するように変化した。「堂」とは尚に従い土に従うものであり、「尚」には「高」の意味が含まれている。その本義は殿堂であり、一般の家屋よりも高く、豊年を祈願して神を祀るために用いられる。堂は祠の中央に位置し、最も重要な場所であり、祖先の神位を祀るための所である。

本研究で取り上げる潘氏祠堂(図1-1)は、中国南京市に位置する歴史的な建造物で、当該地域の有力者であった潘氏一族の宗祠として建てられたものである。潘氏は今から約400年前、戦乱を避け河南省から当該地域へ移住してきた人びとである。なかでも、豪商・潘仁(号恒才)が1644年から1662年にかけて潘氏民居(図1-2)を建造し、敷地面積は5000㎡にも及ぶ。また、潘氏十世の子孫である潘崇涇(号郷泉)が、父親の遺志を実現するために提案し、1921年から1924年にかけて潘氏祠堂を建てた。この祠堂の面積は約380㎡で、安徽省の伝統的な建築様式である徽派建築[注2]の影響を受けており、南京周辺地域の特徴的な青い煉瓦「青磚」が使用されている。この建築は南京地域の文化と歴史を体現しており、余村に残る唯一の祠堂として、地域住民にとって重要な文化的アイデンティティを象徴する存在となっている。

さらに、潘氏祠堂は建築形態や空間構成に伝統礼文化が反映されており、宗族文化の象徴としての役割も果たしている。そのため、建築学的にも極めて重要な歴史的建造物と位置付けられている。重要な徽派建築としては、2006年に南京市の文化遺産として登録されている。

### 1.3. 余村ならびに潘氏祠堂の課題



図1-3 1988年、余村の行政機関の事務所となった潘氏祠堂の様相



図1-4 南京市文化遺産としての碑文



図1-5 修復が完了した潘氏祠堂の姿

中国においては、1966年に始まった社会状況の変化によって、全国各地の数多くの

古建造物が破壊され、それに伴い、多くの伝統行事・儀礼が消失した。潘氏祠堂も例外ではなく、当時、同祠堂は小学校として転用され建物こそ残されたものの、堂内の文物は全て焼却された。また、1988年からは村の行政機関の事務所として徴用され(図1-3)、その後の経済発展に伴い祠堂としての存在は顧みられることなく損壊が続いた。また、2006年には南京市の有形文化財保護単位に指定されている(図1-4)。2017年には、国の文化遺産保護政策により、建造物は修繕がなされたが(図1-5)、その使用方法やそれに伴う空間特質については十分に理解されているとは言い難い。

## 2. 研究目的

本研究は、「潘氏祠堂」を取り上げ、文献調査・現地調査に基づき、同祠堂のハード・ソフト両面における文化的特質を明確化するとともに、得られた知見に基づき、当該地域における今後の内発的な地域活性化に向けた指針を導出することを目的としたものである。

具体的な目的は以下の三点である。

### 1) 潘氏祠堂のハード・ソフト両面の明確化

潘氏祠堂のハード面(空間構造、材料、文様)およびソフト面(日常と非日常の使い方)を具体的に分析し、その特質を明確にした。

### 2) 潘氏祠堂が持つ文化的特質の再認識と地域活性化策の提案

上記の調査結果に基づき、潘氏祠堂が持つ文化的特質を再認識し、持続的に活用するための具体的な地域振興策を提案する。

### 3) 研究成果の地域社会への還元

本研究の成果を地域社会に還元し、潘氏祠堂の文化的特質を広く認知してもらうための活動を行う。

## 3. 研究方法

本研究を実現するための研究方法を示す。本研究は、文献調査、現地調査、聞き取り調査および考察の4つのステップに基づいて進めた。

### (1) 文献調査

関連文献に基づき、余村の歴史、自然地理環境、人口構成、生活文化、風俗習慣を調査し、同時に潘氏祠堂の歴史的背景や建造物の特徴にも注目した。主な参考資料は以下の通りである。

①『江寧県誌』[注3]: 余村における江寧区の歴史の変遷を記録している。

②『潘氏宗譜』[注4]: 潘氏宗族の歴史、伝記、系図を詳細に記載し、潘氏祠堂の変遷を研究するための重要な宗族背景資料を提供する。

③『余氏宗譜』[注5]: 余氏の宗族史や伝記、家系図を記録した文献である。

④『余村誌』[注6]: 余村の歴史、文化、社会情報をまとめ、潘氏祠堂が当地社会において果たす役割と重要性を深く探討している。

また、南京の各級行政機関、民俗博物館、大学、地方図書館、民俗資料館に保存されている民俗誌、地方誌、歴史文献を調査し、その中から祠堂に関する文献を整理した。

### (2) 現地調査

2017年9月から2024年10月までの間に、余村で10回以上、合計400日以上での現地調査を実施した。この調査では、潘恒才氏の末裔に対する聞き取り調査を行い、余村における伝統的な祭りや行事、日常生活の様子を観察し、地域文化の実態を把握し

た。

潘氏祠堂に関する調査は以下の通り実施した。

- ・調査期間：2017年9月～2024年10月
- ・調査回数：計10回、合計約450日間
- ・調査日程：第1回調査(2017年9月4日～9月20日)、第2回調査(2017年12月1日～12月28日)、第3回調査(2018年8月4日～8月28日)、第4回調査(2019年3月8日～3月28日)、第5回調査(2019年3月6日～3月29日)、第6回調査(2019年9月5日～9月29日)、第7回調査(2021年4月1日～2022年9月29日)、第8回調査(2023年10月1日～10月28日)、第9回調査(2024年4月3日～5月7日)、第10回調査(2024年10月2日～10月7日)

以下では、その中の三回の調査について具体的に説明する。

#### ①第1回調査(2017年9月4日～9月20日)

- ・目的：余村の基礎的な生活様態と潘氏祠堂の現状を把握すること。
- ・調査内容：余村において村の環境記録を実施し、住民へのインタビューを通じて潘氏祠堂の歴史に関する基礎情報を収集した。潘氏祠堂の空間的構造を観察し、村の責任者である王長貴氏に対して祠堂の文化的意義についてインタビューを実施した。さらに、潘氏祠堂周辺の住民を対象に、祠堂の利用方法や日常生活との関わりについての聞き取り調査を行った。

#### ②第7回調査(2021年5月8日～6月18日)

- ・目的：潘氏祠堂の修復状況の確認及び『余村誌』の編集。
- ・調査内容：潘氏祠堂の修復箇所を詳細に観察し、記録を行った。修復に関わった村民へのインタビューを通じて、修復前後の差異を明確にした。『余村誌』の編纂に関する座談会を実施し、必要な情報を収集した。

#### ③第10回調査(2024年10月3日～10月6日)

- ・目的：最終データの収集及び研究結果の確認。
- ・調査内容：余村全体の生活様態の変化と潘氏祠堂の現在の使用状況を確認した。主要な聞き取り対象者との再インタビューを行い、これまでのデータと研究仮説の最終確認を実施した。

さらに、「南京市博物館」や「南京市資料館」において、歴史的資料や関連文献の収集を行い、潘氏祠堂に関する記録や展示物を通じて、物理的および文化的な側面を調査した。特に、民俗資料や写真、書簡などを通じて、余村と潘氏祠堂にまつわる歴史的背景や変遷を明らかにすることを目指した。

#### (3) 聞き取り調査

潘氏祠堂および余村に関する情報を収集するため、地域住民約70名を対象に聞き取り調査を実施した。この調査は、以下の3つのステップで進めた。ステップ1では、祠堂の建造物に関する計測や古文献の確認を行い、基礎資料の収集を進めた。ステップ2では、主に高齢者から祠堂の変遷や儀式の方法に関する情報を収集し、伝統的な文化や実践についての知見を深めた。ステップ3では、収集した情報を基に図面を作成し、インフォーマントの確認を得ながら、祠堂の構造復元作業を進めた。

#### (4) 考察 潘氏祠堂の文化的特質の明確化

(1)～(4)の調査結果に基づき、当該地域における潘氏祠堂の利用方法とそこで見られる生活文化を概観し、その今日的価値を明らかにした。また、文化的特質の再確認・再認識を通じて、内発的地域振興に資する具体的な利活用方策を導出した。

## 4. 先行研究

本研究では、潘氏祠堂に関する文献を調査・分析し、先行研究に関して以下の知見を得た。現在、南京市余村の潘氏祠堂に特化した書籍や論文は管見の限り存在しなかった。しかし、中国の祠堂に関する研究は、建築学、民俗学、人類学など多くの分野で行われている。したがって、筆者は「潘氏祠堂」「南京祠堂」「徽派祠堂」といったキーワードを使用し、書籍、博士論文、修士論文、学術論文、ウェブリソースを検討した。その結果、祠堂の建築やその文化に関連する貴重な資料を得ることができた。

### 4.1. 南京市祠堂に関する研究の状況

中国の祠堂は、大きく官祠、名祠、民間祠堂の三つに分類される。現存する南京市の祠堂に関する研究は、官祠に集中している。たとえば、陳寧駿の『南京官祠建築』[注7]や『淹沒在南京都市中的祠堂建築』[注8]では、曾公祠などの官祠が主に議論されている。官祠は、地方官員や国家が設立し、歴史上の著名人や官員、帝王を祀るためのものであるのに対し、民間の祠堂は主に宗族内の祖先を祀るための私的な施設である。潘氏祠堂は地方の農村に存在する民間祠堂であり、徽派建築様式を主に取り入れ、南京の地方文化と融合している。この融合は、特に明清時代において、地域文化と徽派文化との邂逅の中で、潘氏祠堂が独自の構造と文化的機能を形成したことが顕著である。なお、潘氏祠堂は南京市に現存する唯一の徽派建築の祠堂であり、その意味でも復元の意義は高い。

### 4.2. 先行文献の総括

既存の文献を分析すると、祠堂に関する研究は主に次の三つの側面に集中している。第一に、中国の各派祠堂の建築構造、配置、装飾様式に関する研究で、特に地域ごとの建築の特徴に焦点を当てたものが多い。たとえば、張小平の著書『徽州古祠堂』[注9]では、安徽省にある古い祠堂の歴史とその外形的な特徴が紹介されており、この地域特有の祠堂文化が詳しく描かれている。また、張傑の『閩海祠堂建築空間解析』[注10]は福建省の祠堂建築空間や彫刻の特徴を探り、頼迪斯の『潮汕祠堂建築文化探析』[注11]は広東省の祠堂のレイアウトや形式について論じている。第二に、祠堂が宗族機能と社会的役割において果たす役割に関する研究である。祠堂は単なる建造物ではなく、宗族活動の中心的な場所でもある。多くの研究は、祠堂が宗族の象徴や社会的機能の表現として果たす役割、そして宗族信仰や祭祀活動、宗族管理におけるその役割について検討している。たとえば、王静の著書『祠堂中的宗親神主』[注12]は、祠堂が宗族信仰において果たす役割を詳述しており、特に宗族信仰の継承における祠堂の中心的な地位に焦点を当てている。李天綱の『江南民間祭祀探源』[注13]は、祠堂祭祀の起源を主題し、朴元熈の『明清徽州宗族史研究：歙県方氏の個案研究』[注14]は、徽州宗族の組織拡大現象を歙県方氏の事例を通じて考察している。第三に、祠堂が地方社会構造において果たす地位と影響に関する研究である。研究者たちは、祠堂が地方社会における文化的中心、権力の象徴、そして地方の政治・経済に関わる機能を果たしていることを分析し、その地方社会への大きな影響について論じている。たとえば、張炎興の著書『祠堂与教堂：韋伯命題下的浙江模式研究』[注15]では、マックス・ウェーバーによる命題を一般化して、中西文化モデルを祠堂と教堂のモデルに分類し、浙江省の政府と民間祠堂がいかに調和して機能しているかを検討した。この研究は、浙商精神の再建や浙江省の社会経済の発展に貢献している。さらに、陳瑞の『明清時代的徽州宗族祠堂的控制機能』[注16]は、社会的コントロールの視点から徽

州宗族祠堂を研究し、地方における祠堂の地位を深く考察している。

これらの研究は、南京市余村の潘氏祠堂の文化的特質を理解するための参考にはなるが、これらの研究の多くは他の地域の祠堂に焦点を当てており、南京地域の民間祠堂については十分な分析がなされていない。そのため、これらの文献は本研究の背景情報を提供するものの、南京市余村の潘氏祠堂の具体的な状況とは必ずしも一致していない。

### 4.3. 本研究の位置づけ

既存の先行研究を参考にしながら、本研究は南京市余村の潘氏祠堂に関する研究の空白を埋めることを目的としている。すなわち、先行研究は、徽派祠堂を分析するにあたっての一般的な枠組みを提供しているが、南京余村にある潘氏祠堂という特定の事例についての詳細な研究は今後進めていく必要がある。したがって、本研究は祠堂の建築形式にとどまらず、地方文献とフィールド調査を組み合わせ、宗族社会における祠堂の実際の使用方法や文化的特質についても包括的に研究対象としている。特に、祠堂の日常的な使用と祭祀活動の詳細な分析を通じて、潘氏祠堂が地方文化の伝承と宗族認識の強化において果たす独自の役割を明らかにした。

## 5. 研究地域の概況

### 5.1. 余村の自然地理的特徴と資源概況

余村は南京市東山街道の北東部に位置し(図 1-6)、地理座標は北緯 31° 58' 48"、東経 118° 55' 21"である。同地域は東に青龍山、南に天印山、北に横山、西に黄龍山を控えており、総面積は 16.46 km<sup>2</sup>である。そのうち、村の占地面积、耕地面積、水域面積がそれぞれ一定の割合を占める。

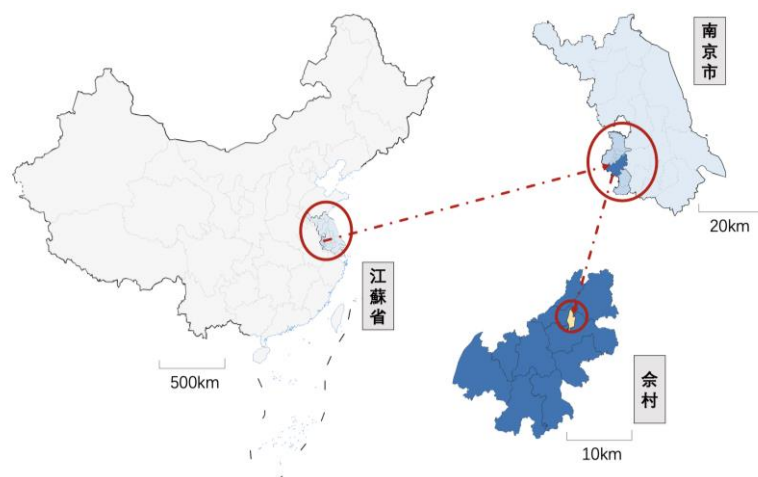


図 1-6 余村の位置

余村地域の両側には山々が連なり、起伏に富んだ地形が広がっている。大小 31 の山頂があり、最高峰は標高 275m の小茅山である。『江寧県志』の記載によると、余村の山々は寧鎮山脈の南端に属し、その形成は約 2 億年前から 1.5 億年前に遡るとされている。山地には豊かな植生が広がり、林間には様々な鳥獣が見られ、その景観はまるで桃源郷のようである(図 1-7)。また、この地域には豊富な金属および非金属鉱物資源が埋蔵されている。20 世紀初頭から 21 世紀初頭にかけて、黄龍山脈の西部にある 8 つの採石場では石灰石などの建築材料が採掘されていた。余村の石灰製造技術は

中国全土で知られ、代々受け継がれてきたものであり、村内の建造物は地元で生産された石灰石を主に使用しており、地域資源と密接に結びついた独自の建造様式を形成している。



図 1-7 潘氏祠堂の風景図

余村には多くの丘陵地が存在し、土壌の種類は主に黄土、黄白土、岩灰土などで構成されている。これらの土壌は、余村の民居や潘氏祠堂の建造において重要な建材資源となっている。

気候面では、余村は北亜熱帯季節風気候に属し、湿潤な気候が特徴である。年平均気温は15.7℃であり、四季が明確で、無霜期間は約225日間に及ぶ。年降水量は1072.9ミリメートルであり、年間日照時間は約1655時間に達する。四季の気候的特徴としては、春は寒暖の変化が激しく、夏は暑くて多雨、秋は空が高く澄み、冬は寒冷で乾燥している。

## 5.2. 余村の歴史と人口規模

余村は600年以上の歴史を有し、その名称の由来には二つの説が存在する。一つは、明代初期(1370年頃)、余家の祖先が戦火を避け、河南省開封府から南京上元県鳳城郷青龍山に移住し村をつくったことに由来するというものであり、これは『余氏宗譜』に記されている。もう一つの説は、余村の伝説に由来している。明朝初期、余村は龍村と呼ばれていたが、明王朝の洪武帝時代に余村と改称された。当時、龍村には貧しい家族である王大宝一家が住んでおり、ある日、王大宝の妻が男の子を出産したが、その赤子は生まれてからずっと泣き続けていた。この時、道士の普済が現れ、「この子は皇帝になる運命を持っている」と予言したという。また、家の裏にある竹林には千軍万馬が隠れており、これは天帝によって用意された軍隊であるとされていた。噂が広まり、洪武帝の耳にも入った。洪武帝は激怒し、軍師の劉伯温を派遣して調査を行わせた。劉伯温は、噂がただ噂であることを確認し、無実の村人を傷つけない方法を考えた。彼はまず「竹林を伐採し」、軍隊の隠れ場所を失わせ、次に「九本の田畔を切断し」、青い龍の骨を断ち切ることを決定した。さらに「山から岩を採掘して燃やし」、龍

脈を破壊し、村の武器を集めて燃やすことにした。最後に、村の名称を「余村」と改めるよう村人に指示した。劉伯温は皇帝に報告し、洪武帝は彼の提案を受け入れた。村人たちは劉伯温に感謝の意を表するため、文昌閣という寺院を建て、地域住民が集まって焼香を行うようになった。こうして、余村の名は定着し、近隣からも多くの人びとが訪れるようになった。

いずれにしても、余村に初めて住み始めたのは余氏一族の祖先である。後に余氏の別家の祖先が戦乱を避けて安徽省大通地域から、また孫氏の祖先が河南省濮陽地域から余村に移住してきた。さらに明末頃には、潘氏の祖先が河南省歸德府中州地域から余村に移住し、その後、李家、陳家、王家の祖先も次々と余村に移り住んだ。これにより、余氏、孫氏、潘氏、陳氏はそれぞれ宗祠を建て、祖先を祀るためや社火活動に参加するための基盤を築いた。各家の宗祠は、余家社、孫家社、王家社、潘家社、李家社、小社(孫氏)、七甲社と称されるようになり、『潘氏宗譜』の「余村記」には「山環四圍村有七社發脉源遠(訳文: 山に囲まれた村には七つの社があり その発展の系譜は悠久で深遠である)」と記録されている。

元末明初、余村には余氏や潘氏などの宗族が落ち着いたが、戦乱、災害、病気などにより人口の増加は緩やかだった。新中国成立後は村民が休養生息し、人口は急速に増加した。しかし、長い歴史の中で人口の詳細なデータは不明であり、1980年までしか遡ることができない。1980年の時点で、余村の戸数は455戸、総人口は1782人(男性887人、女性895人)であった。文盲、半文盲、学齢前の子どもは302人、小学校は588人、中学校は694人、高校は178人、専門学校以上は20人であった。2018年には戸数が602戸、総人口が2246人(男性1118人、女性1128人)に達し、文盲、半文盲、学齢前の子どもは360人、小学校は668人、中学校は850人、高校は298人、専門学校以上は70人となった。

余村は山区に位置し、地理的には偏った場所にある。最初に落ち着いた村民はすべて漢族であったが、20世紀90年代には経済的に困難な少数の若者が四川、雲南、貴州の貧しい地域から来た女性と結婚し、子どもをもうけるようになった。2018年の戸籍統計によれば、余村の総人口2246人のうち、漢族は2223人、少数民族は23人であった。少数民族の内訳は、苗族8人、彝族9人、回族6人であり、漢族が全人口の98.97%を占め、少数民族は1.03%である。

2007年には余村の土地区分調整が行われ、上述の七社が4つの自然村と17の住民グループに統合された。なお、2018年の潘氏の人口は総人口の5%未満であった。

近年、都市化の進展に伴い、潘氏の人口割合は総人口の5%以下に減少した。この変化は、多くの潘氏の子孫がより良い発展の機会を求めて大都市に移住したことを反映しており、余村の文化遺産に挑戦をもたらしている。これにより、潘氏の文化遺産に対する注目と保護が一層必要であり、その重要性を地域の中で保持することが求められている。

### 5.3. 余村の文化特色と伝統技術

余村には、当該地域で「七古」と称される古い文化遺跡が七つ残されているため、地域の人びとは「金陵古風一番村」[注17]と呼び誇ってきた。七古とは、古祠堂、古宅、古窯、古木、古花、古井戸、古鉄のことである。

特に「古祠堂」は、地域の歴史的・文化的特質を象徴する存在であり、かつて当該地域には余家、孫家、潘家、陳家の4軒があったが、現存しているのは潘氏祠堂のみである。この祠堂は、潘氏一族の祖先を祀るための重要な場であると同時に、地域にお

ける精神的な支柱としての役割も果たしている。潘氏祠堂を通じて、地元の人びとは祖先の教えや伝統を受け継ぎ、文化的なつながりを深めることができる。さらに、潘氏祠堂は1983年に江寧区の文化財保護単位に指定された。

「古宅」とは、『余村誌』の記録によると、明末清初の時期から中華民国までに建造されたことが考証できる古い民居であり、現在では15軒が存在する。そのうち、今日まで残されているのは一部の潘氏民居と一部の余氏民居である。潘氏民居は余村の九龍広場の隣に位置し、潘氏祠堂の西側にある。この民居は1644年に建設が始まり、17年の歳月をかけて完成した。現在から約400年前のものであり、巨商である潘恒才が資金を提供して建てたものである。敷地面積は5000m<sup>2</sup>、建物面積は約2605m<sup>2</sup>である。民居は戦乱や火災を経て、損傷が激しく、現在残っているのは60室余である。民居は典型的な徽派建築スタイルと南京の特色を持ち、北向きに建てられ、3つの中庭に分かれている。それぞれの民居は三進で、東西両側に数間の偏房があり、「九十九間半」[注18]と呼ばれている。

民居の全体的な配置は厳密であり、各民居は三進の通路式高壁深院である。各進には門楼があり、門楼に石の彫刻が施されている。一進の門楼の門罩上方には「八仙過海」が彫刻されており、下方には八仙の宝器が刻まれている。他の2つの門楼の門罩には、人物、花卉、禽獣などの精美な図柄が装飾されており、「天錫純嘏」(図1-8)や「福祿申之」(図1-9)といった吉祥の言葉があしらわれている。



図1-8 「天錫純嘏」ということばがあしらわれた石の彫刻 図1-9 「福祿申之」

各進には7室があり、大広間、客間、寝室、書斎、台所、雑屋などが設けられている。後進は木造の閣楼で、手すり付きの階段が設置されており、上階へと上ることができる。上階には複道の廊下が巡らされており、曲がりくねって互いに繋がっていて、まるで迷宮のようである。この民居は、南京地区に現存する徽派建築の民居であり、長い年月の風雨や侵食に耐え、朽ち果てることはあっても、建造物の主体は今なお残っている。潘氏民居は1983年に江寧県の有形文化財保護単位に指定され、2006年には南京市の有形文化財保護単位に指定された。

「古窯」とは、石灰を生成するための古い窯のことである(図1-10)。余村における石灰製造技術は、数百年にわたって伝承されてきた無形文化遺産である。中華民国の『首都誌』[注19]には、「青龍山産石材郡人競采為碑礎或煨以取灰(訳文：青龍山で石材を産出し郡人は競ってこれを碑礎や石灰を取るために煉化した)」と記載されている。洪武帝の時期には青龍山で石灰岩が盛んに産出されていたことが分かっている。

特に、石灰窯の運営は代々潘氏宗族によって管理されており、潘氏宗族は石灰製造を通じて地域経済に大きな影響を与えてきた。潘氏宗族は、石灰窯の管理だけでなく、地域社会においても重要な役割を果たしており、これが潘氏祠堂を村全体の精神的支

柱として位置づける要因の一つである。



図 1-10 古窯

石灰製造は建窯、装窯、焼成、出灰の4つの主要な工程に分かれている。まず、窯の建造である建窯には技術的な注意が必要で、風通しが良く、原料や燃料の運搬が容易な場所を選び、耐熱性の高い砂石を使用して高さ約10mの円錐形の窯を築く。窯の下部には、燃料投入口となる窯門を設置し、外壁と内壁の間には粘土を詰めることで気密性を確保する。

装窯工程では、石灰石を下部から上部に向かって順に積み重ね、燃料の山柴が均一に燃焼するよう工夫が施されている。特に、下部には大きな石、中部には中程度の石、上部には小さな石や砕石を使い、熱が効率よく循環するよう設計される。これにより、石灰石は高温で均一に焼かれる準備が整う。

焼成の過程は8～9日間に及び、窯内では連続して山柴を燃やし続ける必要がある。特に重要なのは「看火」と呼ばれる技術で、これは窯内の石灰石が十分に焼けたかどうかを石の色で判断するものである。完全に熟した石灰石は、炉内で赤く光り、その瞬間が焼成の完了を意味する。

最後の工程では、冷却後に窯門を開け、逆さに積まれた石を崩して高品質の石灰を取り出す。この石灰は南京をはじめ広く販売され、余村の経済と文化に影響を与えた。

「古木」とは、牛家山にある柏木(図 1-11)[注 20]であり、潘氏の祖先代々の墓地に植えられたものである。現在、これらの木の樹齢は300年を超え、いずれも高さは10m以上、直径は約1mである。潘氏祠堂内には、樹齢約200年の柏木が2本ある。潘氏祠堂の東側の道には、直径約1mの柏木が30本以上存在したが、現在は消失している。潘氏宗族の伝統において、柏木は祠堂内部や墓地周辺に植えられ、重要な自然要素として位置付けられているだけでなく、重要な梁柱の制作にも使用されている。この常緑の柏木は、宗族精神の継承を象徴しており、祠堂が地域社会において文化のおよび精神的支柱としての地位を持つことと相まって、家族の歴史と文化の密接な関係を反映している。

「古花」とは、潘氏住宅の中庭の東側に位置し、学名は「枯れ枝牡丹」である(図 1-12)。樹齢は250年以上で、高さは1m余りである。これは潘氏の祖先が家屋を増築した際に植えたもので、この枯れ枝の牡丹は「特別、奇妙、不思議」な花として知られており、最も珍しく美しい花である。

「古井戸」とは、余村の余氏住宅の西側にあり、清代に発掘された井戸である(図 1-13)。青石井の井戸口には井戸輪があり、外側は八角形、内側は円形で、内径は 35cm、高さは 58cm、深さは 340cm である。井戸の水は澄みきっており、かつて村に水道がない時期には、潘氏宗族を含む村民のほとんどが飲料水や生活用水としてこの井戸に頼っていた。この井戸は重要な水源であり、日常生活において多くの人びとが集まり、取水を通じて交流する場であり、潘氏宗族と地域社会との結びつきを深める役割を果たしていた。

また、古井戸と同様に、「古鉄」も地域文化の一部として、潘氏宗族の生活や歴史を物語る重要な遺産である。古鉄とは生鉄糖のことであり、池塘の中には生鉄の小山があり、その形状は牛に似ている。旧時代、形状が蓮の花のようなため(図 1-14)、村の人びとはこれを神聖なものとし、ろうそくを灯し、香を焚いて平安や子孫繁栄を祈願していた。そのため、池塘は遠近に名を馳せ、俗称「生鉄塘」と呼ばれるようになった。「生鉄塘」の成立年代については明確な記録がない。しかし、確かに潘氏女性たちが交流する場でもあり、彼女たちはここで情報を交換し、親しい関係を築いていたのである。



図 1-11 柏木



図 1-12 枯れ枝牡丹



図 1-13 井戸口



図 1-14 古鉄

## 6. 論文構成

本論文の構成は以下の通りである。

### (1) 序章

序章では、潘氏祠堂に関わる生活文化の課題を考察し、研究背景と目的、先行研究、対象地域、研究方法および論文構成を示した。さらに、他の地域調査も行った。

### (2) 第二章 建造当初の潘氏祠堂の構造と空間特質

第二章では、中国江蘇省南京市余村に位置する潘氏祠堂の建造当初の内部空間に焦

点を当て、その構成要素や使用された材料、装飾文様を再現し記録した。さらに、これらの要素を通じて、建造当時の構造と空間の特質を明らかにすることを目的とした。

### (3) 第三章 日常と非日常の潘氏祠堂の「使い方」にみる空間演出

第三章では、潘氏祠堂の日常および非日常における使用方法を再現し、どのようにして空間演出がなされてきたか、そしてその結果として祠堂がどのように人びとに「意味ある空間」として認識されてきたのかを解明することを目指した。また、その空間演出が持つ具体的な特質についても明らかにした。

### (4) 第四章 潘氏祠堂の建造過程と儀式にみる文化的特質

第四章では、潘氏祠堂の建造過程とその際に行われた儀式の詳細を記録し、それらに内包された文化的特質を明らかにした。これにより、当該地域における資源と技術の利用方法の再認識に加え、宗族の役割分担や地域内の関係形成についての洞察を提供し、地域文化の形成過程に対する理解を深めることを目指した。

### (5) 第五章 潘氏祠規にみる宗族関係とその特質

第五章では、潘氏祠堂と密接に関連する「潘氏祠規」を取り上げ、宗族の規則が明文化された背景とその特質を分析した。宗族社会の消滅とともに失われつつある宗族関係を明らかにし、これを通じて潘氏祠堂の文化的特質を再認識し、消えゆく宗族文化の維持と伝承の重要性を明確にすることを目的とした。

### (6) 終章 潘氏祠堂の文化的特質の顕現と利活用

終章では、上記で明らかにした知見に基づき、当該地域における地理的特徴、資源概況、歴史、人口規模、文化特色や伝統技術などを統合的に考察し、当該地域における今後の内発的な地域活性化に向けた指針を導出した。

## 7. 他地域調査

余村の潘氏祠堂だけではなく、四川省、安徽省、浙江省、雲南省などの祠堂についても現地調査を行った。筆者は余村での調査に加えて、四川省の武侯祠(図 1-15)、江蘇省南京市の朱氏祠堂(図 1-16)、安徽省の羅東淑祠(図 1-17)、浙江省の倉聖祠(図 1-18)、さらに雲南省の嚴氏祠堂(図 1-19)を含む全国各地の著名な祠堂を訪問した。これらの現地調査を通じて、各地の祠堂の文化的内包をより深く理解し、地域ごとの違いを分析した。

以下に、余村以外の各地域での代表的な調査の内容を示す。

#### ① 四川省武侯祠に関する調査

- ・実施期間：2017年12月24日
- ・調査内容：武侯祠の建築構造、空間配置、および歴史的背景を調査した。また、祠堂の内部空間がどのように歴史的役割を反映しているかを検討し、観光地としての現代的な利用方法との関係を分析した。さらに、祠堂内外における植栽や空間などの環境要素が訪問者の体験に与える影響について観察を行った。
- ・調査結果：武侯祠は、中国で君と臣の同一場所に祀る祠廟であり、武侯祠、漢昭烈廟、惠陵の三つから構成される。これらは一般的に「武侯祠」と総称され、伝統的な祖先祭祀のための祠堂とは異なる特徴を持つ。武侯祠は成漢の李雄(303~334年在位)によって建てられ、当初は成都少城に位置していた。武侯祠の建造物は、前殿と後殿で構成され、前方には劉備殿[注 21]、後方には諸葛亮殿[注 22]があり、前高後低の構造を持つ。また、敷地面積は15万㎡に及び、その広大さと歴史的価値から、1961年3月4日に中華人民共和国国務院によって第一批全国重点文物保护单位に指定された。



図 1-15 四川省武侯祠

② 江蘇省南京市朱氏祠堂に関する調査

- ・実施期間：2018年8月10日、2023年10月7日
- ・調査内容：朱氏祠堂を二回訪問し、初回では建築様式と周辺住民への聞き取り調査を通じて、祠堂の歴史を記録した。第二回では、祠堂の過去の日常使用と非日常使用の状況について、さらに詳細な調査を実施した。
- ・調査結果：朱氏祠堂は、南北の通進深が 21.3m、東西の長さが 18.3m である。当初は二進構造を有していたが、現在では南側の一進五間のみが残存し、第二進の建物は焼失していることが確認された。村民への聞き取り調査によると、朱氏祠堂は朱氏一族が祖先を供奉するための施設であり、日常生活においては使用されず、祭祀の場として機能していた。



図 1-16 江蘇省南京市朱氏祠堂

③ 安徽省羅東淑祠

- ・実施期間：2023年9月26日～9月27日

- ・調査内容：羅東舒祠の建造物としての特徴および構造を詳細に分析し、空間構成と機能を記録した。祭祀儀礼の実施方法や空間利用の特徴を観察することで、祠堂の文化的役割と地域社会における位置づけを明らかにした。また、祠堂内外の装飾や木材の使用状況を調査し、建造文化とその伝統的継承の現状を把握した。
- ・調査結果：羅東舒祠は、安徽省黄山市徽州区呈坎鎮呈坎村に位置する、明代中後期に建設された煉瓦と木材を用いた建造物である。総占地面积は3300㎡に及び、羅氏一族が先祖である羅東舒先生を供養するために建立した宗族祠堂である。羅東舒祠は坐西朝東の四進構造を有し、主要な構成要素として照壁[注23]、碑亭[注24]、儀門、享堂、寢堂、南側の女祠、北側の厨房などが挙げられる。特に中心部分の享堂は縦深21.6m、開口25.8m、棟高13.6mという大規模な建造物で、柱や梁には金絲楠木や銀杏などの高級な木材が用いられており、その耐久性と防虫性が特徴である。また、南側の女祠(則内)は女性祖先の靈位を安置するために設けられた小規模な建築である。羅東舒祠では、祖先の靈位が安置される後寢大殿を中心に、祭祀が行われてきたが、日常生活においては使用されず、祭祀や特別な行事の場として機能していた。さらに、祠堂の祭祀儀礼は曲阜孔子廟の礼儀を模倣して行われており、徽州祠堂の中でも特異な存在として知られている。祠堂の敷地内には400年以上の歴史を持つ銀桂が植えられており、その枝葉が茂る姿は家族の繁栄と富貴を象徴している。羅東舒祠の建築構造や儀礼は、宗族文化を反映するとともに、地域社会における文化的アイデンティティの形成に寄与していると考えられる。



図1-17 安徽省羅東淑祠

#### ④ 浙江省倉聖祠

- ・実施期間：2023年9月19日～9月21日
- ・調査内容：主に祠堂の種類と物語などについて調査した。また、地域住民が現在どのように祠堂を活用しているかについても詳細に観察した。
- ・調査結果：倉聖祠は浙江省嘉興南湖風景区の小瀛洲に位置し、全国でも非常に特色のある「字聖」倉頡を記念する祠堂の一つである。伝承によれば、漢字は倉頡によって創造されたとされ、彼は「字聖」として崇められている。清の光緒年間に、嘉興の民間

組織である「惜字会」が反故紙を大切にすることを広めるために資金を募り、この倉聖祠を建立した。祠堂内には倉頡の塑像が安置されており、地元の文人たちは定期的にここを訪れ、崇敬の念をもって祭拜を行っていたという。「惜字会」の影響は広範囲に及び、数多くの「惜字箒」が製作され、学校や官署、公共の場所に配布された。これらは反故紙を収集するためのもので、文字を敬い大切にすることを啓発する役割を果たしていた。集められた反故紙は天寧寺に運ばれ、「化」と呼ばれる方法で処理された(燃やすことを指すが、「焼く」とは表現しない)。この文化的な風習は、嘉興に特有の社会的記憶として深く根付いている。



图 1-18 浙江省倉聖祠



图 1-19 雲南省嚴氏祠堂

・⑤ 雲南省嚴氏祠堂

- ・実施期間：2024年4月12日～4月16日
- ・調査内容：祠堂内の木主[注25]の制作方法や使用される材料について聞き取り調査を行った。さらに、彫刻の図案や色彩の違いについても調査を行った。
- ・調査結果：木主の制作においては、地域特有の木材が用いられており、その選定基準は耐久性や加工のしやすさに基づいていた。調査の結果、主に樟木や楠木が使用され、これらの木材が防虫性と耐久性に優れているためだという。また、木主の表面には精巧な彫刻が施されており、図案には龍や鳳凰などの伝統的なモチーフが描かれている。この彫刻は、家族の繁栄や子孫繁栄の願いを象徴しており、地域ごとに異なる特徴が見られる。さらに、木主の彩色については、朱色や金色を基調とし、これらの色彩が祠堂内の荘厳な雰囲気を高めていることが分かった。

## 注および参考文献

- 1) 理雅各訳：《詩經》卷3、上海三聯書店出版社、2014
- 2) 安徽省の伝統的な様式を指す。独自のスタイルを有しており、中国の伝統的な建築の代表の一つである。
- 3) 中国江蘇省江寧県の歴史、地理、文化、風俗などを記録した地方志である。編纂時期や内容は版によって異なる。
- 4) 潘崇涇編：潘氏宗譜、出版元不明、1924年秋。潘崇涇氏が主導して編纂した余村の潘氏宗族の系譜である。筆者は現地調査において全4巻を発見し、それらを現代文に翻訳し本研究において参照した。
- 5) 『余氏宗譜』は余村の余氏の宗族史や伝記、家系図を記録した文献である。出版者、出版年月、出版元は不明である。
- 6) 蘇子懿、李敏他：余村誌、南京出版社、2021
- 7) 陳寧駿：南京的官祠建築、尋根、第6期、2007
- 8) 陳寧駿：淹沒在南京都市中的祠堂、江蘇地方誌、第3期、2007
- 9) 張小平：徽州古祠堂、遼寧人民出版社、2002
- 10) 張傑：移民文化視野下閩海祠堂建築空間解析、東南大学出版社、2012. 11
- 11) 賴迪斯：潮汕祠堂建築文化探析、設計芸術、第6期、2019
- 12) 王静：祠堂中的宗親神主、重慶出版社、2008
- 13) 李天綱：金澤江南民間祭祀探源、生活・読書・新知三聯書店出版社、2017
- 14) 朴元熇：明清徽州宗族史研究：歙県方氏の個案研究、中国社会科学出版社、2009. 12
- 15) 張炎興：祠堂与教堂：韋伯命題下の浙江模式研究、中国社会科学出版社、2012. 12
- 16) 陳瑞：明清時期徽州族譜的控制機能、安徽大学学报、第1期、2007
- 17) 中国の「金陵」とは南京の古名であり、「南京の中でも伝統的な雰囲気をも最も継承している村」という意味である。
- 18) 祠堂の規模や広さを象徴的に表現した言葉で、実際の間数ではなく、非常に大きいことを示している。
- 19) 首都誌：南京出版社、2013. 9
- 20) 学名：Platycladus orientalis/日本名：コノテガシワ
- 21) 劉備(161～223年)は、中国三国時代の蜀漢の初代皇帝で、字は玄德。
- 22) 諸葛亮(181～234年)は、中国三国時代の蜀漢の丞相であり、字は孔明。天才的な軍師として知られる。
- 23) 照壁は、中国伝統建築に見られる壁の一種で、建物の正面や入口近くに設置されることが多い。外部からの視線を遮り、邪気の侵入を防ぐ役割を果たすとされる。
- 24) 記念碑や石碑を保護するために設けられた小型の建物。
- 25) 中国の祖先祭祀において祖先の魂が宿るとされ、日本では位牌に相当する祭具である。

## 図の出典

- 1) 図1-1：2021年4月9日、筆者撮影
- 2) 図1-2：2019年7月29日、筆者撮影
- 3) 図1-3、図1-4、図1-5、図1-7、図1-8、図1-9：張明氏撮影
- 4) 図1-6：筆者が作成
- 5) 図1-10、図1-15、図1-16、図1-17、図1-18、図1-19：筆者が調査の際に撮影
- 6) 図1-11、図1-12：2021年4月7日、筆者撮影
- 7) 図1-13：2017年9月20日、筆者撮影
- 8) 図1-14：2022年4月20日、筆者撮影

## 第二章：潘氏祠堂の建造当初の構造とその空間特質

## 1. はじめに

### 1.1. 研究背景と目的

本研究で取り上げた「祠堂」とは、中国において、宗族[注1]の祖先や社会に多大な貢献をした人物を祭祀するための建造物である。西周時代においては、周王や諸侯らの祖先祭祀などの国家行事を行う建造物であったが、明代になり、朝廷が社会秩序の維持における宗族と祠堂の役割を重視し、また、明王朝の嘉靖帝[注2]が「許民間皆得聯宗立廟」(訳文：民間においては宗族を設立し祠堂を設けることを許す)の詔書を発布したことより、民間の祠堂が合法的地位を得て急速に広まった。つまり、民間の祠堂は、いわば、官府から民間へ一種のトップダウンによって普及した儀礼建造物であり、その形態・空間には中国における伝統の礼の文化が如実に反映されているといえる。

しかしながら、中国においては、1960年代前後の社会状況の変化によって、こうした全土の各地の数多くの古建造物が破壊され、また、それに伴い、多くの伝統行事・儀礼が消亡した。

このことは、中国江蘇省南京市余村に位置する潘氏祠堂(図2-1)[注3]にあっても例外ではない。1921-1924年にかけて建造された同祠堂は、1960年代中頃より学校に転用され、それゆえに、建造物自体は破壊こそ免れたものの、堂内の古書や文物などはほぼ全てが焼却され残されていない。また、1988年からは村の行政機関の事務所として徴用されたが、その後の経済発展に伴い祠堂としての存在は顧みられることなくすでに長い年月が経過している。2017年には、国の文化遺産保護政策により潘氏祠堂は南京市文化遺産に指定され修繕がなされたものの、堂内の各空間の配置や使い方、それに伴って形成されてきた空間特質については調査・研究はなされておらず、また、修繕に関する記録もほぼ残されていないことから、潘氏祠堂の建造当初の様相は、当該地域の人びとの記憶から急速に失われつつある。今日、祠堂の建造当初の役割を明確化しつつ復元し、得られた情報を共有することによって、文化遺産として正しく継承することが喫緊の課題である。なお、潘氏祠堂は南京市に現存する唯一の徽派建築[注4]の祠堂であり、その意味でも復元の意義は高い。

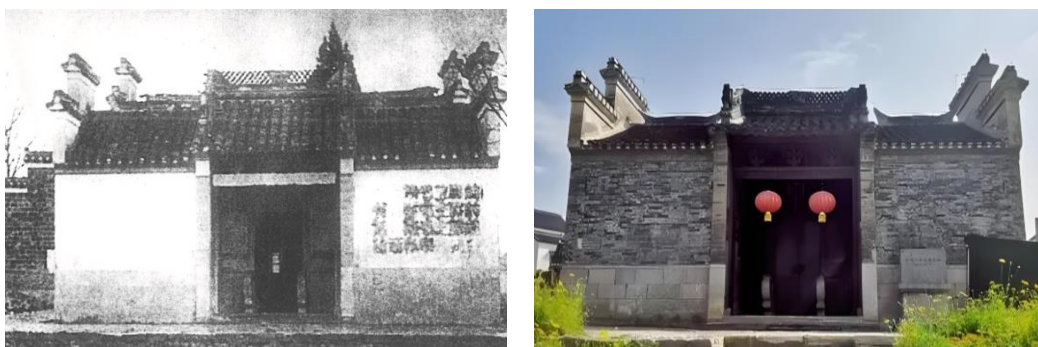


図2-1 潘氏祠堂の正面 左：修復前(1960年代) 右：修復後(2023年);屋根, 壁, 門などに差異が確認される

本章は、文献調査ならびに現地調査に基づき、中国江蘇省南京市余村における潘氏祠堂の建造当初の内部空間の構成要素、構成する材、装飾文様を再現し記録するとともに、その構造と空間特質を明らかにすることを目的としたものである。

### 1.2. 研究方法

本章における研究方法は下記の通りである。

(1) 文献調査 『潘氏宗譜』(図 2-2)[注 5]や『余村誌』などの文献に基づき、潘氏祠堂の歴史的な変遷を把握した。なお、前者は潘氏の宗族史や伝記、家系図を記録した文献、後者は、余村に関する歴史、文化、社会などの情報をまとめた地方誌である。同時に、南京の行政機関、民俗博物館、大学、地方図書館に所蔵されている民俗誌、地方誌、歴史文献などを調べ、祠堂に関する内容を整理した。



図 2-2 『潘氏宗譜』

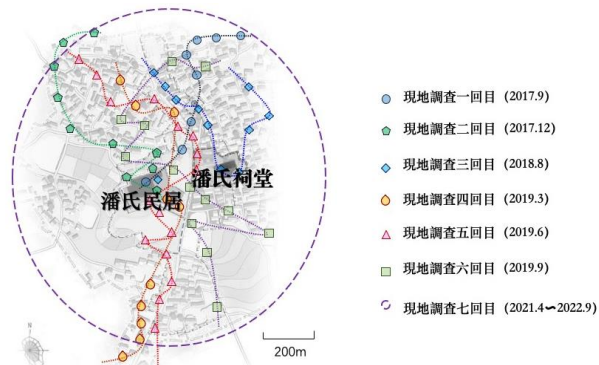


図 2-3 現地調査図

(2) 現地調査 2017年9月から2022年9月にかけての現地調査(図 2-3)に基づき、残された建造物を計測するとともに、古文書を参照しながら潘氏の古老から祠堂の変遷や具体的な寸法を把握した。得られた情報に基づき図面を作成し、現地インフォーマントへ確認しつつ潘氏祠堂の構造を復元した。また、村の古老が語る民話を音声記録し、潘氏の子孫から宗族の歴史や祠堂の経緯、内部配置について重点的に聞き取りを行った(表 2-1)。

(3) 建造当初の構造と空間特質の明確化 (1)～(2)に基づき、潘氏祠堂の建造当初の構造とその空間特質を明らかにした。

### 1.3. 先行研究

近年、中国政府の「郷村振興」政策[注 6]により、余村における地域研究は数多くなされるようになってきている。しかしながら、これまで、潘氏祠堂に関する研究は全くなされていない。一方、全国的にみると、祠堂についての研究は多くの成果が上げられている。たとえば、張葉茜が著した『中国・徽州地方の祠堂建築に関する研究：歙県を中心とする祠堂建築の分類と分布』[注 7]においては、歙県における祠堂建築が、古来の地縁的な地方信仰に起源をもつ「祠廟」、祖先祭祀のための墓祭式の「墓祠」、廟祭式の「宗祠」の大きく3つに分類されることなどを明らかにしている。張小平の著書『徽州古祠堂』[注 8]では、徽州地方の古い祠堂の歴史とその特徴が紹介され、この地域特有の祠堂文化が詳細に描かれている。また、吾妻重二が著した『木主考—朱子学まで』[注 9]では、祠堂内の「木主」[注 10]の形式に焦点を当て、過去に祠堂に安置されてきた木主の多様な形状や寸法について詳細に記録がなされている。しかしながら、余村の潘氏祠堂の形態の記録、特に建造当初の内部の空間配置の再現に関する研究はこれまでなされてこなかった。

## 2. 余村の概要

### 2.1. 余村の地理と資源

余村は南京市の東北部に位置し、総面積は 16.46 km<sup>2</sup>である。『潘氏宗譜』の「序」には、古くから自然環境に恵まれ、風光明媚な地域として知られてきたことが記されて

いる。当該地域は起伏に富んでおり、山と谷が縦横に走っている。地形的には、北東が高く南西が低く、余村は風水の観点からも恵まれた位置にある(図 2-4)。

表 2-1 聞き取り調査対象者(年齢は 2024 年 2 月 10 日時点)

調査対象	年齢	性別	世代・経歴など	調査内容
潘杏芳氏	95	女	潘氏十二世の子孫, 余村生まれ, 余村在住	潘氏宗族歴史, 祠堂の建造の経緯, 月門の意味, 潘氏と余氏の関係, 潘氏祠堂の特徴
潘惟墀氏	79	男	潘氏十三世の子孫, 元・唐基小学校校長	潘氏祠堂の概況, 潘氏家系図, 潘氏宗譜, 祠堂内部空間, 潘氏祠堂の特徴, 彫刻文様の意味
潘惟岱氏	74	男	潘氏十三世の子孫, 元・上坊中学校校長	潘氏家系図, 祠堂内部と外部空間, 潘氏木主と棺の位置, 堂号, 建築材料, 彫刻文様の意味
潘元慶氏	70	男	潘氏十三世の子孫, 余村にて雑貨店を経営	潘氏宗譜, 潘氏の商売の物語, 祠堂内部と外部空間, 堂号, 建築材料, 彫刻文様の意味
潘徳淦氏	70	男	潘氏十四世の子孫, 余村にて歴史の先生	潘氏教育, 潘氏宗族歴史, 潘氏宗譜, 祠堂内部空間, 潘氏家系図, 建築材料, 彫刻文様の意味
潘徳軍氏	44	男	潘氏十四世の子孫, 会社社長	潘氏の商売の物語, 潘氏の商売の理念, 潘氏祠堂の木彫の意味
蘇子懿氏	60	男	余村の余氏の婿, 『余村誌』の総編集者	余村の地理と資源, 余村の歴史と人口規模, 余氏の歴史
黄秋森氏	61	男	『余村誌』の編集者, 元上峰小学校校長	余村地域における調査内容, 余村の文化, 潘氏祠堂の外部空間
李義牛氏	61	男	余村在住, 大工, 父親に弟子入りした	余村の名称の由来, 建築材料, 潘氏祠堂の木彫の意味
余徳永氏	54	男	祖先代々余村在住, 大工	余村の歴史, 余氏と潘氏の木主の概況, 潘氏祠堂図面の確認, 建築材料



図 2-4 余村の風景(左: 潘氏民居 右: 潘氏祠堂)

余村の気候は温暖で、降水量が多く、四季がはっきりしており、米、麦、豆、果物、野菜、茶などの農作物に加え、木、花などの生産も盛んである。さらに、当該地域は、特に非金属鉱物を含んだ黄土が豊富である。青龍山の石灰石はセメントの生産、鉄鋼

の精練の主原料となっており、潘氏祠堂を含む余村の民居建造資材のほとんどが地元で生産、販売されたものが用いられている。また、余村での石灰の製造技術は極めて高く、中国各地からの需要に応えていた。

## 2.2. 余村の歴史と人口規模

当該地域の人びとは、余村を「金陵古風一番村」[注 11]と呼び誇ってきた。余村は600年以上の歴史を有する。その名称の由来には二つの説がある。『余氏宗譜』[注 12]によると、明代初期(1370年頃)、余家の祖先が戦火を避け、河南省開封府から南京上元県鳳城郷青龍山に移住し村をつくり上げたことから、最初の入居者としての余氏の名前にちなんで名付けられたというものであり、これが一つである。もう一つは、『潘氏宗譜』の「余村記」に「吾郷余村即古龍村也」(訳文：わが郷の余村は古くは龍村である)との記述にあるように、余村は古くは「龍村」と呼ばれていたが、「龍」は皇帝のみが使用できた文字であったため、明の洪武帝の命令により「龍」を「余」に替え[注 13]、以後、余村と呼ばれるようになったというものである。いずれにしても、最初に余村に住み始めたのは余氏一族の祖先であるとされている。また、『潘氏宗譜』には、「余村潘氏者中州望族也世居歸徳府明季之末李闖構難中原塗炭惟大江以南堪称楽土其先世有名仁者携家避乱来此」(訳文：余村の潘氏は中州の望族であり 祖先代々歸徳府に住んできた 明末に李自成の乱により中原地域は苦境に陥り 長江以南の地域のみが楽園になった 潘氏祖先の中で潘仁という者が難を逃れ 家族を連れてここに移住した)と記されている。明時代の末に起こった李自成の乱[注 14]を避け、潘氏の祖先が河南省歸徳府中州地域から余村に移住した。

なお、2018年の余村の人口は2246人(男性：1118人、女性：1128人)、総世帯数は602世帯で、そのうち、潘氏の人数は総人口の5%未満である。

## 3. 潘氏祠堂の概要

### 3.1. 潘氏の家系

潘氏祠堂の建造物の説明に入る前に、まずは、潘氏の家系について触れておきたい。

潘氏の歴史は上述したように、潘仁が河南省歸徳府から余村に移住した約400年前に遡る。彼は5人の息子をもうけ、余村における潘氏は繁栄した。七世の潘世献になると、皇帝より官職を得て、5人の息子の家族を5房[注 15]に分けた。その長男である潘大升およびその子孫が「大房」、次男の潘大麟およびその子孫が「二房」、三男の潘大鵬およびその子孫が「三房」、四男の潘大椿およびその子孫が「四房」、五男の潘大章およびその子孫が「五房」である。

### 3.2. 潘氏祠堂の歴史

『余村誌』によると、かつて当該地域には、余氏、孫氏、潘氏、陳氏の4軒の祠堂があったが、現存するのは潘氏祠堂のみである。潘氏祠堂は、潘氏十世の子孫である潘崇涇が、父親の潘学璜の遺志を実現するために提案し、1921年から1924年にかけて潘氏の人びとと共に作り上げたものである。『潘氏宗譜』によれば、祠堂の建造時の分担は次の通りである。潘崇涇と潘崇湘が総責任者であり、潘崇淮が財務を管理し、潘正桐、潘正楹、潘正棋、潘正樵、潘道炘、潘道煊の6人が監督を担当した。建造費用は約12000銀元であり、その内訳は三房の崇涇が約5000銀元、三房の正樵が約4800銀元、三房の崇淮が約300銀元、四房の崇湘が約600銀元を出資した。

中華民国時代[注 16]にあつては、潘氏祠堂では毎年定期的に宗族内の6回の祭祀が

開催されていた[注 17]。しかしながら、上述したように、中華人民共和国成立後は、潘氏祠堂は別の用途の建造物として用いられるようになり、以降、祭祀は一切行われていない。

#### 4. 潘氏祠堂の空間形態

潘氏祠堂は同村のほぼ中央に置かれ、住宅群である潘氏民居の東側に隣接し、南向きに建てられている。潘氏民居は、1644 年から 1662 年にかけて始祖の潘仁(号恒才)によって建てられたものである。その敷地面積は 5000m<sup>2</sup>にも及ぶ。筆者が復元した建造当初の潘氏祠堂の平面図、上面図、正面図、および断面図は、図 2-5 に示した通りである。建造当初においては大工が魯班尺[注 18]を用いたが、本章では、すべてmmで図面を作成した。一部を尺とmmで表 2-2 に記した。これらに基づきその構造を検討していきたい。潘氏祠堂の奥行は 24760mm、幅は 16450mm である。潘氏祠堂の様式は、当該地域で、「三進」と呼ばれるつくりである。「進」とは、南から北に向かって連なる建物内部の空間配置を指し、一進が「門堂」、二進が「享堂」、三進が「寢堂」と称される(図 2-6)。

表 2-2 寸法 (1 尺≈29.8mm)

建築配置	寸法	奥行き	幅	高
門堂	尺	20	35	22
	mm	5980	10520	6415
享堂	尺	23	35	25
	mm	6850	10520	7465
寢堂	尺	25	35	26
	mm	7350	10520	7655
儀門	尺	—	5	8
	mm	—	1540	2350
側門	尺	—	3	6
	mm	—	930	1900

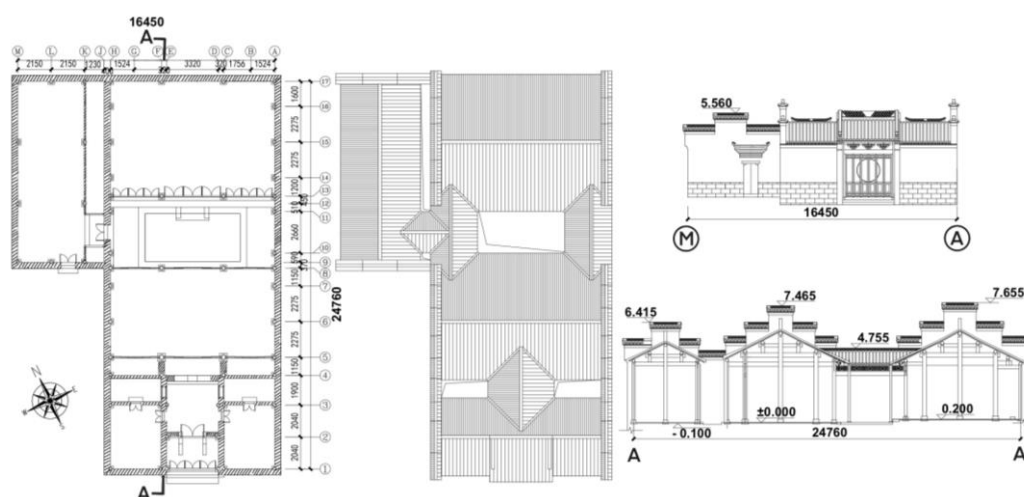


図 2-5 再現した潘氏祠堂の図面(左：平面図 中：上面図 右上：正面図 右下：A-A 断面図)

##### 4.1. 潘氏祠堂の内部空間の構成要素

潘氏祠堂の内部空間は、門堂や享堂、寢堂、天井、側廊などで主要な空間が形成され、それらは「本堂」とも称される。また、補助的な空間として「廂房」がある。

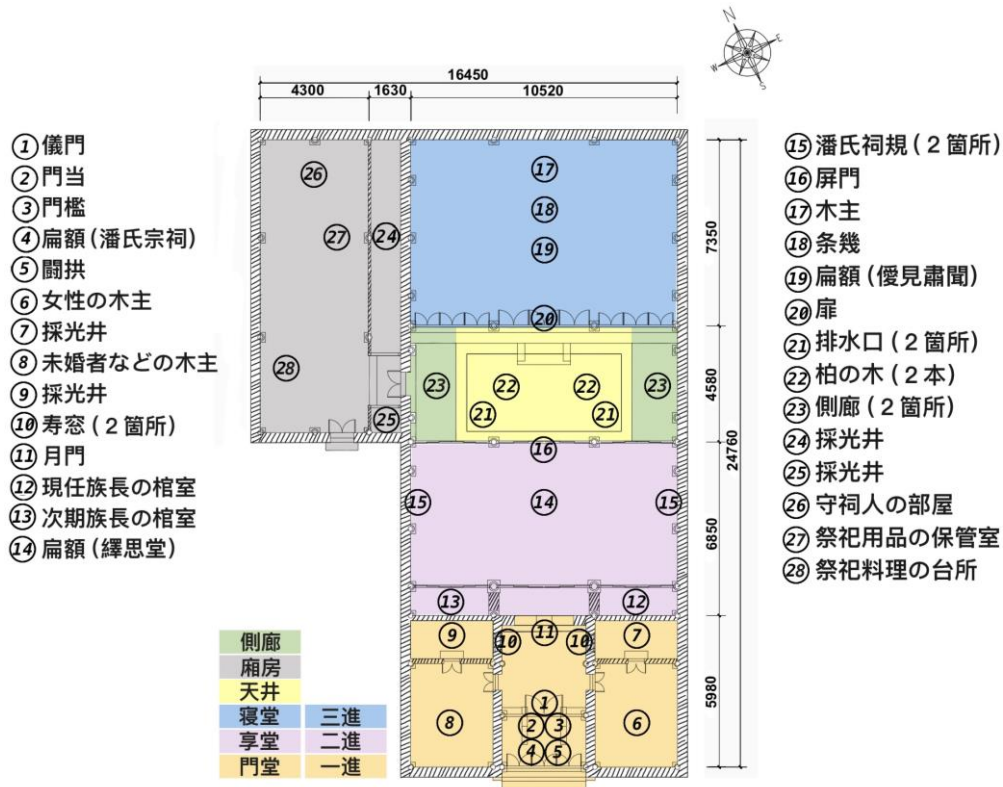


図 2-6 潘氏祠堂の内部分析図

それぞれの空間について概観していきたい。

1) 門堂 門堂は祠堂本体に入る最初の空間であり、「一進」とも呼ばれ、平面形状は長方形である。奥行 5980mm、幅 10520mm、門堂の高さは 6415mm である。祠堂の正門は「儀門」(図 2-6-①)とも称される。儀門は、黒漆塗りの木製で[注 19]、高さ 2350mm、幅 1540mm、「十文字扉錠」を使用し、内側から人が開閉する仕組みとなっている。この儀門は正門の外側にある 2 つの「門当」で固定されている。

門当(図 2-6-②)は「抱鼓石」とも呼ばれ、長さ 936mm、高さ 580mm の門当石と半径 355mm の石鼓で構成されている。太鼓の音が、雷のように響き渡ることから、人びとはそれが魔除けに効果があると信じたため、潘氏の門当の形を鼓にしたのだという。門当石の表面に彫られた文様は「蓮華祥雲」(図 2-7)といわれ、「泥より出でて泥に染まらない蓮の花のように純粹で優雅な家風」を寓意している。蓮は瑞雲に囲まれており、それは潘氏宗族に瑞祥をもたらす願いを表している。

二つの門当の間に「門檻」(図 2-6-③)がある。これは、いわば敷居のことであり、門当はこれによって繋がっている。門檻は、黒漆塗りの木製で(図 2-8)[注 19]、その高さは 360mm で、かつて余村にあった他の祠堂の門檻よりも約 100mm 高かった。これは潘氏宗族が当該地域における地位を示すものであったのだという(李義牛氏)。門檻の高さが門当の高さよりも約 220mm 低いことは、将来、さらに高位の士大夫[注 20]が輩出された場合に、上昇する空間を空けてあるためだという(潘徳淦氏)。このように門檻には、「常に向上を目指す」という潘氏のモットーが表れている。

儀門の上には「潘氏宗祠」と刻まれた扁額が掲げられていた(図 2-6-④、図 2-9)。扁額上の「潘」の文字は現代字とは異なっているが、これは、潘氏の繁栄を象徴する「水、米、田」の文字から構成されたものだという(潘惟岱氏)。門堂は宗族以外の人びとも繋がる場所であり、特に、正面のファサードは、まさに宗族の顔として大切に飾らな

なければならない部分である。扁額を支えているものが「戸対」である。これは「門簪」[注21]とも称され、古代の女性のかんざしに似た形で、長さ約 29mm の四つの木製品である(潘杏芳氏)。門簪には気高い君子の品性と風格を象徴する「梅、蘭、竹、菊」の文様が彫刻されている。



図 2-7 門当の蓮華の文様



図 2-8 門檻(右は分析図)

戸対の前の梁には「鬪拱」(図 2-6-⑤、図 2-10) [注 22] が三つ採用されている。その梁には「衣錦還郷」(訳文：故郷に錦を飾る)という物語の木彫が施されており、その内容は、主人公の男性が科挙のために家を出て、試験に合格し、中央の官界に進出し、その後、錦繡衣冠を着て家郷に帰り、祠堂で参拝したという物語である(潘徳軍氏)。なぜならば、華麗な服を着て故郷に帰るということは高い地位を得たということであり、それは、宗族にとって名誉をもたらすこととされたためである。これは潘氏宗族が士大夫としての地位向上と名誉拡大を望んでいたことを反映している。



図 2-9 再現(CG)した扁額と戸対



図 2-10 鬪拱

北に向かって、正門の右側の空間は女性の木主を祀る場所である(図 2-6-⑥)。ここには、潘氏始祖の潘仁の妻を中心として、数多くの木主が並べられていた(潘惟岱氏)。配置順は決められているが、これは男性の木主と同様であり、詳細は後述する。奥の空間は太陽の光を入れるための採光井(図 2-6-⑦)で、防火、雨水の蓄積の機能もある。正門の左側の空間(図 2-6-⑧)には、未婚者、夭逝者などの木主が配置され(潘惟墀氏)、奥の空間は右側の空間(図 2-6-⑨)と完全に対称である。また、門堂の奥には「寿窓」があり、高さ 1205mm、幅 800mm の地産の石で造られていた(図 2-6-⑩、図 2-11)。

門堂の最奥部には「月門」があり(図 2-6-⑪、図 2-12)、その直径は 1440 mm である。月門は、その形状が中国においては女性らしさ、静けさ、美しさの象徴とされる十五夜の満月に由来して名付けられたという(潘杏芳氏)。伝統的な中国文化では、太陽は陽性を、月は陰性を象徴する。また、陽性が男性を表すのに対し、陰性は女性を表す。

門堂は陰空間とみなされ、ここには女性の祖先の木主が置かれていた。月門は通常、江南庭園[注 23]の屋外の建築要素によく使われるが、潘氏はそれを祠堂の屋内に導入し、門堂と次項で取り上げる「享堂」とを繋ぐ役割を与えた。これは、陰空間(祖先の世界)から陽空間(世俗の世界)への移行を象徴している。



図 2-11 寿窓



図 2-12 月門

2) 享堂 享堂は祠堂の儀門から数えて 2 番目の空間であり、「二進」とも呼ばれる。奥行は 6850mm、幅 10520mm、享堂の高さは 7465mm である。「享堂」という名称は、その機能と用途に由来し、族人と祖先が「共享」する。すなわち、共に享受するための空間を意味する。享堂は祭祀のための第二の空間として利用された。また、祭祀活動以外においては、宗族の議事堂や教育や処罰のための場所として利用された。

享堂に入ると、まず目に入るのが在位の族長の棺室である。北に向かって、右側のスペースは棺を保管するための空間である。ここには、潘氏祠堂を建造した族長の潘崇涇の棺が置かれていた(図 2-6-⑫)。図 2-6-⑫と図 2-6-⑬は完全に対称であり、図 2-6-⑬は、次期族長の潘崇湘の棺が置かれていた(潘惟岱氏)。族長の棺を祠堂に保管することは、一般的な族人が民居に置くことと比較すると、族長の権威を示している。



図 2-13 「繹思堂」と書かれた扁額

享堂内には、高い位置に金色の文字で「繹思堂」(図 2-6-⑭、図 2-13)と書かれた扁額が掲出されている。それは「子孫が代々永久に孝道を守り 祖先の恩恵を末永く追慕する」ことを意味する。なお、『潘氏宗譜』によれば、繹思堂とは、潘氏祠堂の「堂号」である。堂号は、宗族や家系の誇りやアイデンティティを示す重要な要素であるが、中国の各地域の潘氏祠堂が同じ祖先から派生したものであることを識別する重要な名

称となる。

また、『潘氏宗譜』によれば、享堂の壁には十二則の「潘氏祠規」が掲げられていた(図 2-6-⑮)。「潘氏祠規」は、祠堂に密接に関連した宗族の人びとの間での約束事が明文化されたものである。東側の壁には、第一則「重教誨」(訳文：教育と教訓を重んじること)、第三則「清祠宇」(訳文：祠堂を静粛に保つこと)、第五則「択分長」(訳文：リーダーを選ぶこと)、第七則「慎聯姻」(訳文：結婚相手およびその家族を慎重に選ぶこと)、第九則「遠匪邪」(訳文：邪悪から遠ざかること)、第十一則「恵孤貧」(訳文：孤児や困窮している者の面倒をみること)とあった。西側の壁には、第二則「敬祭祀」(訳文：祖先を敬い祭祀を行うこと)、第四則「敦倫常」(訳文：倫常に従うこと)、第六則「急課租」(訳文：課税はすぐ払うこと)、第八則「謹術業」(訳文：職業を慎重に選ぶこと)、第十則「息争訟」(訳文：紛争を鎮めること)、第十二則「惜器物」(訳文：器物を大切にすること)とあった。享堂で議論を行う際には、椅子が置かれ、族長が中央に座り、各房の房長が大房から五房の順に並んだ(潘惟岱氏)。

享堂は祭祀の際に多くの人を収容するため、広い空間をつくらなければならない。それゆえ、北側は天井に向けて開放されているものの、必要に応じて、寝堂が直接みえないように、取り外しができる白い「屏門」(図 2-6-⑯)が設置されたという(潘惟墀氏)。屏門には潘氏の「枯れ枝牡丹」が彫刻されていた(潘惟岱氏)。これは、潘氏民居の中庭の東側に現存する牡丹(図 2-14)を造形化したもので、樹齢は 250 年以上で、高さは 1m 余りである。潘氏の 4 房の祖先が民居を増築した際に植えたもので、「特別、奇妙、不思議」な花として知られている。「特別」とは、決まって穀雨の前後 3 日以内に開花し、その時、全株が満開になるという。「奇妙」とは、主幹が人生の変遷を経てやつれたように見え、乾いた薪のように朽ちているが、花を支えている葉は青々と茂っていて、緑が生い茂っていることである。「不思議」とは、その花びらは、平年は花卉が 12 枚であるが、閏年には花卉が 13 枚となるといわれていることである。



図 2-14 枯れ枝牡丹

3) 寝堂 寝堂は、祠堂の最奥部に位置し、祠堂全体で最も重要な空間であり、陰空間とみなされ、ここには男性の木主を安置した。その奥行は 7350mm、幅 10520mm、寝堂の高さは 7655mm で、高さは門堂と享堂よりも高く、祖先への敬意を表す高貴な空間である。ここには、寝堂の木主が置かれていた(図 2-6-⑰)。また、『潘氏宗譜』によれば、潘氏宗族の木主の配置は「昭穆制度」[注 24]に従っており、これは、木主を北に置いて南を向いた視点から左右の秩序を定めたものである。寝堂の中央には正龕[注 25]が設けられ、潘仁の木主の下前方には、潘世猷、潘大鵬、潘学璜の三人の木主が並

んだ。彼らは生前に潘氏宗族に名誉をもたらしたため、中央に配置された。始祖の左側に付属の祭壇を設け、二世、四世、六世および八世が祀られた。始祖の右側に付属の祭壇を設け、三世、五世、七世および九世が祀られた。それぞれの列において、長幼の順に配置された。

木主の前には長さ3m、幅1.5mほどの長方形の「条幾」(図2-6-⑱)[注26]が3脚並んでおり(余徳永氏)、通常は香炉や燭台、季節の果物などが置かれ、祭祀時は、条幾の上はすべて供物で埋めつくされたという。その手前が拝礼を行う場所である。なお、拝礼の際には、拝礼用の敷き物が置かれ、宗族の人びとは、そこに跪いて祈りを捧げた(潘惟堉氏)。

寢堂の梁には鶴と馬をテーマにした彫刻があった。梁には「優見肅聞」と書かれた扁額(図2-6-⑲)がかけられていたが、その意味は「慎重に観察し 謙虚に聞くこと」である(潘惟岱氏)。また、柱には対聯が掛けられていた。その内容は「木有本水有流須知祖父貽謀遠 田可耕書可讀但願兒孫享業長」(訳文：高い木にはその大本となる根があり長い川の流れにはその発する源がある そのように我々は祖先が子孫のために深く考えを巡らしてきたことを知るべきである 農業をやりたければ農業をやればよい 学問をしたければ学問に励むがよい 但し何れにせよ子孫がその生業を長く享受できることを望む)であった。

寢堂と次項で取り上げる天井との間には木製の仕切り扉が設置されており(図2-6-⑳)、扉の下部には、花瓶が彫刻されていた。また、仕切り扉の上部には木製の窓があり、そこから太陽の光が寢堂に差し込んでも、室内の光は柔らかく、静かで神秘的で薄暗く感じられるよう空間が演出されている。

4)天井 天井とは、祠堂の中庭に当たる屋根のない空間である。周りを堂や側廊で囲まれており、上空から俯瞰すると四角い井戸のようにみえることから名付けられた(図2-15)。その奥行は4580mm、幅は10520mmである。天井は享堂と寢堂の間の過渡的空間であり、祭祀の際には、族人が寢堂から天井で隔てられた享堂に立ったが、それは神秘的な祭祀の雰囲気醸成に寄与した。

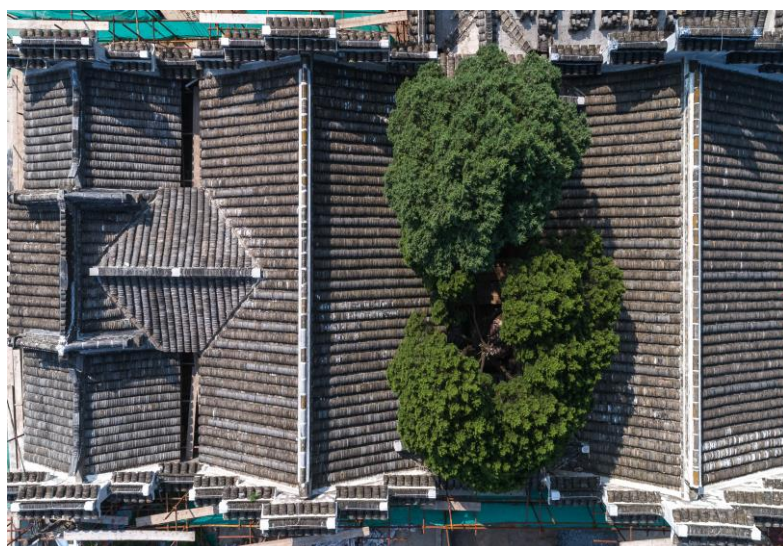


図2-15 天井

さらに、南京は高温多湿な気候であり、天井は祠堂内の空気を循環させ、換気という実用的な機能も果たしている。同時に、建物の屋根に降った雨水を集め排水溝に流すことから、雨水による建物の浸食を避けるためもある。天井の設置は、「天人合一」

を追求する潘氏一族の思想を示唆しており、天井は天と地と人と祖先の四者を結び付ける空間でもある。天井の瓦(図 2-16)には、下向きの「覆瓦」と軒平瓦には下端が舌状に垂れる「滴水」がある。これらには、中国の代表的な神話の一つである「八仙過海」の神器や銅銭の彫刻が施されている。高い位置にある瓦に付されていることから、雨水や風が瓦の隙間から侵入することを防ぐとともに、潘氏にとっては、これらの八仙、財や福などが天から降りてくる願いの表れである。天井の排水口(図 2-6-㉑)は、古代の銅銭(図 2-17)の文様につくられており(潘元慶氏)、これは、天井の瓦から流れてくる水が財を象徴し、「財不外流」(訳文:財は外に漏らさず)との考えによるものである。このように、天井は、天や祖先を畏敬するとともに、財と福を集める意味が込められている。また、天井には、樹齢 200 年ほどの柏木[注 27]が 2 本ある(図 2-6-㉒)。いずれも祠堂が建設される前から同じ場所に存在していたもので、潘氏宗族にとっては、いわば神木である。潘氏宗族の人びとにとって、柏木は極めて重要であり、潘氏宗族の木主や棺、さらには、扉や一部の梁柱などに柏木が使われた(潘惟堉氏)。



図 2-16 覆瓦と滴水



図 2-17 天井の排水口

5)側廊 側廊(図 2-6-㉓)は、天井の両側にあり、享堂と寢堂を繋げている。祭祀の際は、族人の主要な通路スペースとなる。屋根の形がアーチ状になっており、その連なりが空間にリズムを与え、かつ、厳粛な雰囲気醸し出す。享堂から寢堂までの床は徐々に高くなっており、側廊は前から奥に向かって地面が徐々に高さを増やすことから、潘氏ではこのような形は「歩歩高昇」[注 28]を意味していると理解されている。

6)廂房 廂房は潘氏祠堂の主要な空間ではなく、したがって、構造的には本堂とは同じ壁を共有していない。寢堂の西側に祠堂の壁に平行して採光井(図 2-6-㉔、図 2-6-㉕)がある。廂房の奥行は 11930mm、幅は 4300mm、高さは 5560mm である。また、宗祠の守祠人の部屋(図 2-6-㉖)は、儀礼の際に用いるテーブルや椅子、祭祀用品などの保管室(図 2-6-㉗)であるとともに祭祀のための料理を準備するための台所(図 2-6-㉘)などの機能がある(潘惟岱氏)。廂房は補助的な空間であるため、装飾は比較的シンプルである。高さも、本堂 3 軒の高さよりやや低く、本堂 3 軒の中心的な地位を引き立てている。廂房の側門は儀門より低くなっており、その高さは約 1900mm、幅は約 930mm である。日常生活では、廂房の側門は宗族が祠堂に出入りする際の重要な出入口であった。

#### 4. 2. 潘氏祠堂を構成する材とその分析

潘氏祠堂は、白壁、灰瓦、青煉瓦、馬頭壁[注 29]、木・石の彫刻など徽派建築の特

徴を有する。

表 2-3 潘氏祠堂を構成する材質と産地

空間	主な材質と産地	梁の本数材質	梁の寸法 (mm)	柱の本数材質	柱の寸法 (mm)	壁の仕様	床煉瓦の仕様
門堂	木材(沙木：余村) 石材(青石板材, 青条石, 花崗岩, 石灰石：余村) 青煉瓦(板磚, 方磚：余村；望磚：安徽省)	月梁 2本 沙木穿梁 8本 沙木	月梁 240×200 明間前穿梁 240×120 明間後穿梁 340×180 次間三架穿梁 200×100 次間五架穿梁 220×100	前檐柱 6本 沙木 中柱 6本 沙木 後檐柱 6本 沙木	前檐柱直径 200 中柱直径 200 後檐柱直径 200	壁の上部：「板磚」(280×50×20 mm) 壁の下部：「滾磚」(700×300×150 mm) 煉瓦を積み上げ	方磚 (330×330×60 mm)
享堂	木材(沙木：余村) 石材(青石板材, 青条石, 花崗岩, 石灰石：余村) 青煉瓦(板磚, 方磚：余村；望磚：安徽省)	大梁 4本 沙木穿梁 14本 沙木	明間三架梁 300×150 明間五架梁 380×200 次間三架穿梁 200×100 次間五架穿梁 280×140 次間七架穿梁 300×200	前檐柱 4本 沙木 前金柱 4本 沙木 中柱 2本 沙木 後金柱 4本 沙木 後檐柱 6本 沙木	前檐柱直径 220 前金柱直径 280 中柱直径 220 後金柱直径 280 後檐柱直径 220	壁の上部：「板磚」(280×50×20 mm) 壁の下部：「滾磚」(700×300×150 mm) 空洞にして煉瓦を積み上げ	方磚 (400×400×80 mm)
寢堂	木材(沙木, 柏木：余村) 石材(青石板材, 青条石, 花崗岩, 石灰石：余村) 青煉瓦(板磚, 方磚：余村；望磚：安徽省)	大梁 4本 柏木穿梁 14本 沙木	明間三架梁 300×150 明間五架梁 520×200 次間三架穿梁 200×100 次間五架穿梁 280×140 次間七架穿梁 520×200	前檐柱 4本 沙木 前金柱 4本 柏木 中柱 2本 沙木 後金柱 4本 柏木 後檐柱 6本 沙木	前檐柱直径 240 前金柱直径 300 中柱直径 240 後金柱直径 300 後檐柱直径 240	壁の上部：「板磚」(280×50×20 mm) 壁の下部：「滾磚」(700×300×150 mm) 煉瓦を積み上げ	方磚 (330×330×60 mm)

次に、筆者は聞き取り調査に基づき潘氏祠堂の当初構造について材料の観点から表 2-3 をまとめた。それぞれ説明していきたい。潘氏祠堂の主な材料は木材(沙木[注30]、柏木)、石材(青石板材、青条石、花崗岩、石灰石)、青煉瓦(板磚、滾磚、方磚、望磚)[注31]である。その他に、黄土もよく利用されており、煉瓦や床の基礎などの重要な材料である。

まず、門堂について分析すると、門堂は「一明二次」の三間の構造を採用している。堂の中で中央の部分を明間といい、左右の部分を次間という。門堂の明間は

240mm×200mm の「月梁」(図 2-18)の造形を採用しており、湾曲した月梁は月門と呼応している。この意匠は、門堂が女性の木主を安置するという機能と調和し、全体に静謐な雰囲気醸し出すことに寄与していた。

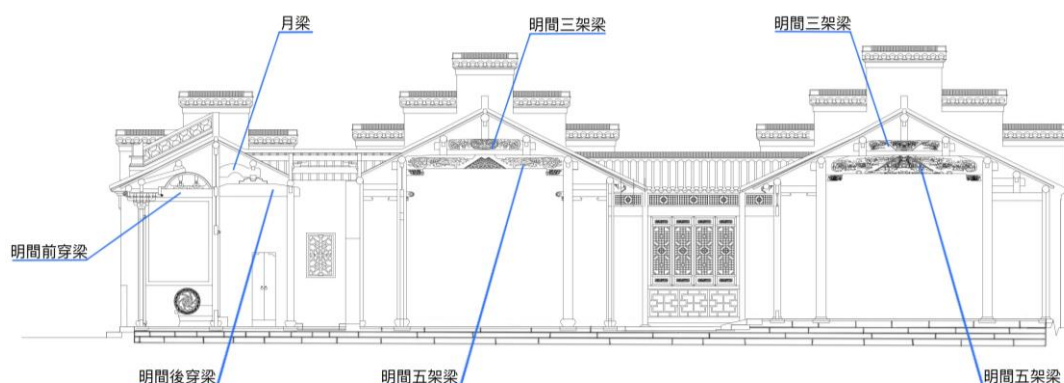


図 2-18 再現した梁の構造解析図(明間)

次に、次間は 200mm×100mm の三架穿梁と 220mm×100mm 五架穿梁[注 32]で支えられている(図 2-19)。次間の柱はすべて余村産の沙木が使用されており、計 18 本である。これらの前檐柱、中柱、および後檐柱[注 33]の直径はいずれも 200mm である。

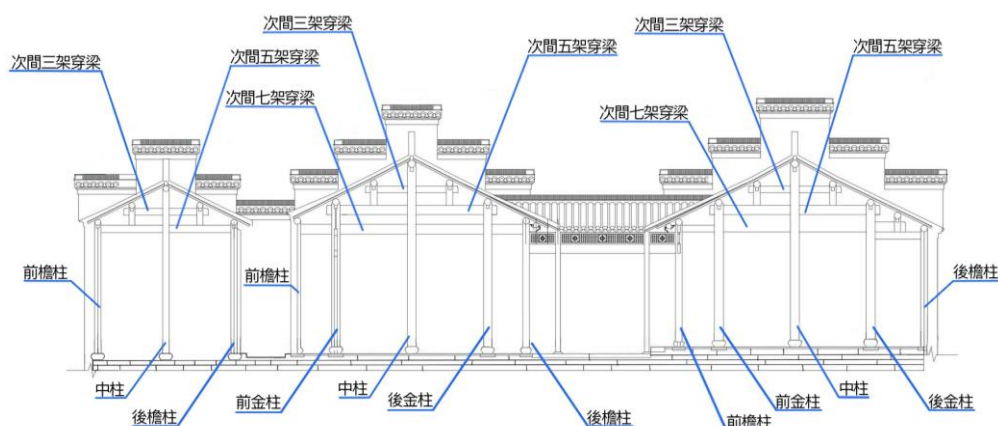


図 2-19 再現した梁と柱の構造解析図(次間)

門堂の壁は、南京の梅雨の時期の防湿対策として、二種類の異なる煉瓦が組み合わせられていた。壁の上部は、長さ 280mm、幅 50mm、厚さ 20mm の「板磚」を積み上げてつくられていた。壁の下部は長さ 700mm、幅 300mm、厚さ 150mm の「滾磚」という青煉瓦でつくられていた。この滾磚は高い耐水性と防水性を兼ね備えている。煉瓦同士の間隙には、余村産の消石灰を水で溶かし、細かな藁やもち米などを混ぜ合わせた材料が使われた。日本建築の漆喰に相当するこの材料は煉瓦の固定に使用されるだけでなく、苔の発生を抑えや風化などを防ぐために壁の表面にも使用された。

丈夫な地面をつくるために、当該地域の黄土と生石灰を混ぜ合わせた材料が使われた。床の煉瓦は 330mm×330mm×60mm の規格の方磚が水平に敷き詰められている。門堂、享堂、寢堂の床の高さは異なっており、黄土を段々に積み上げ、各堂の間には階段一段分ほどの段差があり、寢堂の床が最も高い(潘惟岱氏)。階段の材料は当該地域の「青条石」である。この青条石は比較的硬い石材であり、防水性と防滑性の両者が考慮されている。

享堂を構成する部材の主な材質は門堂と同じであるが、享堂の空間は門堂に比べて

大きく、梁と柱の数量もそれに応じて異なっている。月梁は廃され、大梁[注 34]が2本追加されている。穿梁の数量は14本で、門堂よりも8本多い。梁の構造は、門堂の三架梁、五架梁に七架梁が追加されている。柱は太く、かつ、金柱[注 35]が追加されている。中柱の直径は220mmとより太い材が使われている。壁の材質に大きな変化はないが、享堂の壁の内部構造は空洞である。床面は門堂の床磚よりも大きく、400mm×400mm×80mmの方磚である。享堂は門堂よりも面積は広く、材料の使用量の面でも門堂を凌いでいた。

最後に、寝堂について分析すると、寝堂の空間は門堂、享堂よりもさらに大きく、梁と柱の材質と数量もそれに応じて増加している。材質としては、門堂と享堂には使われていない柏木が用いられている。大梁と穿梁の数量は享堂と同じであるが、明間の五架梁と次間の七架穿梁は太く、520mm×200mmである。柱に関しては、金柱は全て柏木が用いられている。直径も300mmである。さらに、金柱の柏木は、麻で包まれた後、黒漆で塗装されていた(潘惟墀氏)。麻は丈夫だけでなく防虫効果も高いため、柱の保護にふさわしい素材であるとともに、麻には神聖性があり、悪霊や邪霊を退散させる効果があるとされる。同様に、前述した棺の下にも、数本の麻縄が置かれていたという。壁は門堂と同様に、青煉瓦で構築され、床は330mm×330mm×60mmの規格の方磚が水平に敷き詰められている。

廂房は建造当初には面積や高さが確定されておらず、現場の材料の残量に基づいて最終的な寸法が決定されたという。また、廂房の床は黄土で敷かれており、方磚は使われていなかった。本堂と比較すると極めて質素な造りだった。

#### 4.3. 潘氏祠堂の装飾文様とその意味

潘氏祠堂の彫刻は精巧で、それらの装飾文様にはいずれも意味が込められている。筆者は聞き取り調査に基づき、潘氏祠堂の装飾文様を表2-4、図2-20にまとめた。

表2-4 潘氏祠堂の装飾文様のまとめ

空間	文様の種類				
	図形/文字	植物	動物	人物	器物
門堂	福字 寿字 祥雲紋(b) 柿蒂紋(d)	転角蓮(a) 蓮の実(f) 梅蘭竹菊(e) 葡萄	蝙蝠(g) 猿(c)	福星 戯劇人物	八仙神器の蓮(h) 福袋
享堂	疊山紋 回紋 祥雲紋 銅錢紋 水波紋 双喜紋	牡丹(i) 向日葵(l) 銅錢木(k) 海棠 金木犀 水仙	鹿 魚 虎 獅	禄星	八仙神器の瓢箪(j) 金宝 銅錢
寝堂	疊山紋(s) 卷葉紋(r) 祥雲紋 扇型紋 藤草紋 万字紋 寿紋 同心紋	桃の花(m) 松の木 蔓草(a) 靈芝(p) 槐の木 柏木 銀杏	亀 龍 鳳 鵠(o) 馬(n) 鶴 麒麟 孔雀	寿星	八仙神器の如意 花瓶 文房四宝

彫刻は主に本堂の梁に集中しており、文様は図形、文字、動物、植物、人物、器物を主体としていた。以下に、具体的な例を挙げながら、その意味を説明する。

まず、門堂からみると、14種類の文様が確認された。主に蓮花と蝙蝠をモチーフとしていた。蓮花は八仙の神器[注36]の一つであり、女性の純潔を象徴し、同時に蓮の実是多子多孫を意味する。蝙蝠の文様は、蝠の中国語の発音は「福」と同様であり、福が来ることを祈る意味が込められている。

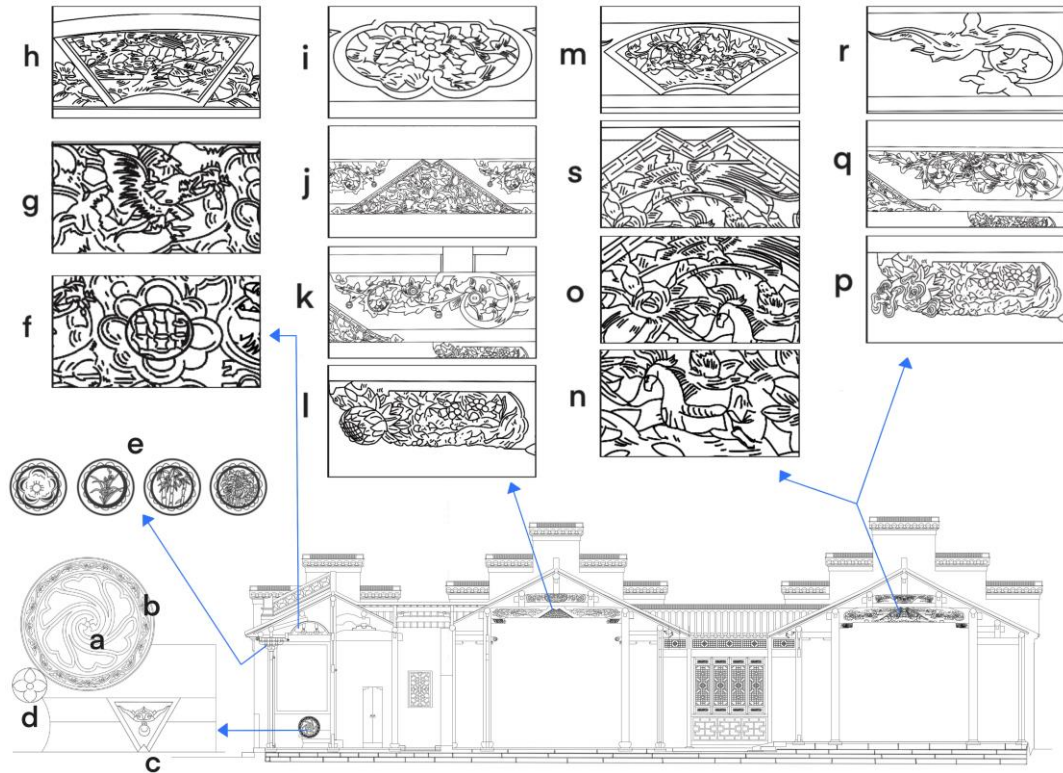


図 2-20 再現した潘氏祠堂の装飾文様(表 4 中のアルファベットに対応)

次に、享堂をみると、20種類の文様が確認された。主に牡丹、瓢箪と銅銭をモチーフとしていた。牡丹は前述したように、潘氏にとって「特別、奇妙、不思議」な花として知られており、富貴の象徴である。また、瓢箪は八仙の神器の一つであり、中国語の発音は「禄」と同様であり、出世の意味もある。さらに、古代の銅銭の文様が施されており、これは財気が高まることを象徴する。

最後に、寝堂をみると、27種類の文様が確認され、最も豪華に装飾された空間であり、木主が置かれる祭壇には、龍や鳳、麒麟、亀、鶴などの聖獣の彫刻が飾られ、これらは瑞祥や長寿を象徴する。梁には馬や鶴などの動物が集中しており、「馬上報喜」(訳文：馬上に喜びをもたらす)という意味がある。さらに、八仙の神器である「如意」の模様が多用される。全てが順調であるという意味がある。

その他にも、門堂の門当の文様からみると、aは「転角蓮華」で、蓮華は純潔で優雅な家風を象徴するが、同時に女性の純潔も表している。さらに、転角蓮華は円満の意味もある。bは祥雲紋で、瑞雲は幸福をもたらす願いを表している。cは猿の文様である。猿の中国語の発音は「侯」と同様であり、「背背封侯」(訳文：子孫は諸侯になる)という意味も含まれており、潘氏宗族には侯将はなかったが、より高い役職に就く願いを表している。また、多産である猿は、宗族の繁栄を象徴している。加えて、猿獣の図案を門当に配置することは、邪気を払う効果があるとされた。柿蒂紋(d)は柿の柄部を特徴とする文様であり、建造物の堅牢さや持続性を象徴するが、柿と「事」の中国語の発音が同じであることから、「事事如意」(訳文：全てのことが順調に進む)という意味がある。eは戸対の文様で、それぞれ梅蘭竹菊である。当該地域では、これらの4

つの植物の姿には気品があり高潔であるといわれ、「四君子」と呼ばれている。

潘氏祠堂のあらゆる装飾文様は、潘氏の人びとによって巧みに工夫され、空間に応じて異なる文様が配置されていた。

## 5. 潘氏祠堂の空間特質

以上を踏まえ、潘氏祠堂の空間特質は下記の通りである。

### 5.1. 水平方向ならびに鉛直方向の空間秩序

潘氏祠堂には水平方向ならびに鉛直方向の空間秩序が存在していた。門堂の床が最も低く、享堂の床は門堂より高い位置にあった。寢堂は、主な木主を納める空間として、祠堂の最も目につかない最奥部に位置しており、かつ、床は享堂よりも高く、祠堂全体の最も高い位置に達している。門堂、享堂、寢堂の屋根の高さも、床の高低差に準拠しており、門堂の屋根が最も低く、寢堂の方が高い。「前が下で、奥が上」という空間秩序が演出されていた。

### 5.2. 「陰陽交替」の空間配置

潘氏祠堂には「陰陽交替」の空間配置が存在していた。最前の門堂は陰空間とみなされ、ここには女性の祖先の木主や女性を象徴する文様などが置かれていた。中央の享堂は陽空間とみなされ、族人の日常生活の活動空間としても使用された。天井は上部が開放されていて光が差し込み、享堂は鮮やかで明るい雰囲気演出されていた。また、最奥の寢堂は陰空間とみなされ、ここには男性の祖先の木主が置かれていた。このように、祠堂内には「陰から陽へ」「陽から陰へ」といった「陰陽交替」の空間配置が形成されていた。

### 5.3. 材料の空間特質

門堂、享堂、寢堂のそれぞれに使用される材料は奥に行くほど使用される量が増加し、その材質も高くなっていることが分かった。材料は実際の用途に適した材料が用いられ、たとえば、門堂と寢堂にはどちらも木主が置かれており、日常生活では使用されることはなかったが、享堂は日常的に使用されてきた。潘氏祠堂の建造当初、享堂は日常的に使用され、また、祭祀の際には多くの人びとが集まったため、耐荷重性能が高い方磚が使用された。また、壁の内部は空洞であり、中に吸音材を詰めることで祖先の静けさを保ち、さらに重要な書類、銃器、金などを非常時のために保管するための隠し場所としても利用された。

### 5.4. 文様の空間特質

門堂、享堂、寢堂のそれぞれに使用される文様が建物奥に行くほど多くなることが分かった。また、文様に共通してみられるのが中国古代の八仙の神器であり、これらは、「八仙過海」という物語に登場する八人の仙人が持つ道具で、それぞれが神通力を発揮すると考えられてきた。加えて、文様は空間に応じて異なったものが配されており、門堂には多子多孫と招福が、享堂には出世や財と富貴が、寢堂には吉祥と長寿の願いが反映されていた。このように、建造物には地域の動物や植物などにちなんだ縁起の良い文様が施され、道德・倫理観等を一族で共有する役目を果たしていた。

## 6. おわりに

本章では、潘氏祠堂の建造当初の内部空間の構成要素、構成する材、および装飾文様を再現し記録するとともに、同祠堂の空間特質を明らかにした。

調査・考察の結果、以下の知見が得られた。

- (1) 潘氏祠堂には水平方向ならびに鉛直方向の空間秩序が存在していた。門堂、享堂、寢堂は奥に行くほど高位であり、それに伴い床面や屋根などが高くなっていた。
- (2) 潘氏祠堂では、門堂、享堂、寢堂の順に「陰から陽へ、陽から陰へ」と変化する「陰陽交替」の空間配置が存在していた。
- (3) 潘氏祠堂では、奥に行くほど材料の使用量が多く質も高くなり、実際の用途に適した材料が用いられていた。
- (4) 享堂は、耐荷重性能が高い床材が使われるとともに、吸音性能の高い空洞壁にされるなど用途に則した構造となっていた。
- (5) 潘氏祠堂では、奥に行くほど文様が多く、また、空間に応じて異なる意味を持つ文様が配置された。

このように、潘氏祠堂は、実際の要求を満たすとともに、潘氏宗族の人びとが守るべき道徳・倫理観や自然環境との共生の価値観が表出し、それらを宗族で共有し後世に伝える役目を果たしてきたといえよう。このように、祠堂という建造物は、単に物質的存在にとどまらず、潘氏の人びとが建物の使用に参与し、演出することによってはじめて成立するものである。総じて、当該地域の人びとが祠堂の空間を多様な方法で活用し、人びと自身が建物に意味を与えることで祠堂の文化的特質が構築されてきたのである。

次章においては、潘氏祠堂の理解の上で、日常/非日常の「使い方」による空間演出がなされることで、潘氏祠堂が、意味ある空間として地域の人びとに活用・認識されてきた姿をより明確に描き出したい。

## 注および参考文献

- 1) 宗族とは、血縁関係を密接に結びつけ、父系家族を血統として、家族・氏族など宗族関係間の社会構造体制を示し、一定の権力を有する一種の民間社会組織である。
- 2) 明朝第12世皇帝(在位1521～1566年)、名朱厚熜、廟号世宗、年号嘉靖帝
- 3) 図1(左)：蘇子懿、李敏他：余村誌、南京出版社、2021
- 4) 安徽省の伝統的な様式を指す。独自のスタイルを有しており、中国の伝統的な建築の代表の一つである。
- 5) 潘崇涇編：潘氏宗譜、出版元不明、1924年秋。潘崇涇氏が主導して編纂した余村の潘氏宗族の系譜である。筆者は現地調査において全4巻を発見し、それらを現代文に翻訳し本研究において参照した。
- 6) 郷村振興：2017年に中国の中央政府が党の第19回大会報告で提案した地域振興戦略である。
- 7) 張葉茜：中国・徽州地方の祠堂建築に関する研究—歙県を中心とする祠堂建築の分類と分布、日本建築学会計画系論文集、pp. 527-537、2017
- 8) 張小平：徽州古祠堂、遼寧人民出版社、2002
- 9) 吾妻重二：木主について、アジア文化の思想と儀礼、福井文雅博士古稀記念論文集、春秋社、pp. 143-162、2005
- 10) 木主：中国の祖先祭祀において祖先の魂が宿るとされ、日本では位牌に相当する祭具である。
- 11) 中国の「金陵」とは南京の古名であり、「南京の中でも伝統的な雰囲気をも最も継承している村」という意味である。
- 12) 『余氏宗譜』は余村の余氏の宗族史や伝記、家系図を記録した文献である。出版者、出版年月、出版元は不明である。
- 13) 「龍」と「蛇」は形が似ているが、中国におけるそれぞれの印象はまったく異なる。「蛇」という言葉は雅あるとはみなされず、漢語の同音である「余」に変更されたという(潘惟墀氏)。
- 14) 李自成の乱は、17世紀の中国明末清初に、李自成率いる農民反乱軍が明朝を倒し、中国の支配者として即位した史実である。
- 15) 息子の直系の家族を指す。たとえば、大房とは長男の直系の家族である。
- 16) 「中華民国時代」は、1912年に孫文が建国を宣言した時から1949年までの期間を指す。
- 17) 「春祭」「土地祭」「清明祭」「夏祭」「秋祭」と「冬祭」である。
- 18) 中国の伝統的な建築用計測工具であり、建築の寸法を測るために使用されてきた。
- 19) 儀門と門檻は、かつては黒漆塗りであったが、現在は赤漆塗りである。
- 20) 科挙によって官の資格を得た人。官職にある人。役人。
- 21) 中国伝統建築において、門の上部に装飾的に取り付けられる部材である。
- 22) 中国古代の伝統的な木造建築において屋根を支えるために柱の上部に設ける部材の一群である。
- 23) 中国の江南地域に特有の伝統的な庭園である。
- 24) 中国古代の宗法制度で、木主の左右の世代次の配列を指す。
- 25) 正龕：祭祀のためにつくられた台座のことで、祖先を祀るために使われる。台座の上に、祖先の木主が安置される。
- 26) 当該地域の言葉で、祭祀の机である。

- 27) 学名 : *Platycladus orientalis*/日本名 : コノテガシワ
- 28) 中国の諺で、歩むごとに高みに至るという意味がある。
- 29) 壁の上部は馬の頭部の形をしている。馬頭壁の主な機能は、隣家からの延焼を防ぐことである。
- 30) 学名 : *Cunninghamia lanceolata*/日本名 : コウヨウザン
- 31) 板磚は平らな形状の煉瓦であり、滾磚は厚みのある長方形の煉瓦、方磚は正方形の煉瓦、望磚は屋根に敷く長方形の煉瓦である。
- 32) 当該地域には、穿斗式梁架と抬梁式梁架の二種類がある。穿斗式梁架は中央に柱があり、柱は地面から屋根まで延び、梁と交差している。これらの梁は「穿梁」と呼ばれる。また、三架穿梁は三本の柱を支える梁、五架穿梁は五本の柱を支える梁、七架穿梁は七本の柱を支える梁を指す。
- 33) 檐柱は平面の最も外側にある軒下の柱であり、中柱は妻面から離れた位置に立つ基壇面から棟木まで伸びる柱である。
- 34) 中央部の柱が地面に届かないものを抬梁式梁架とよび、この梁は大梁ともいう。
- 35) 建造物の棟木の柱を除いて、檐柱より内側の柱である。
- 36) 「八仙過海」の物語に登場する八人の仙人が持つ道具である。

#### 図の出典

- 1) 図 2-1(右) : 2023 年 10 月 7 日、李偉氏撮影
- 2) 図 2-2 : 2018 年 8 月 8 日、筆者撮影
- 3) 図 2-5、図 2-12、図 2-13、図 2-16 : 張明氏撮影
- 4) 図 2-8 : 2019 年 9 月 17 日、筆者撮影
- 5) 図 2-11、図 2-15、図 2-17 : 2022 年 4 月 10 日、筆者撮影
- 6) 図 2-14、図 2-18 : 2021 年 10 月 7 日、筆者撮影
- 7) 上記を除く全ての図については、筆者が撮影・作成

### 第三章：潘氏祠堂の「使い方」にみる空間演出

## 1. はじめに

### 1.1. 研究背景と目的

本章は、中国江蘇省南京市余村に位置する潘氏一族の祖先を祭祀するための建造物である「潘氏祠堂」(図 3-1)を取り上げた調査・研究の第 2 報である。潘氏祠堂は、同村の有力者であった潘氏一族の祠堂として建てられたものである。

中国においては、1960 年代前後の社会状況の変化によって、長らくこうした歴史的な建造物が看過される傾向にある。また、1978 年の改革開放[注 1]以降、中国は飛躍的な経済発展を実現し、人びとは物質的・経済的な豊かさを獲得したものの、今日、多くの伝統的生活文化が急速に消失しつつある。こうした状況は、本研究で取り上げた「潘氏祠堂」にあっても例外ではない。この歴史的建造物は長らく祠堂としての利用はなされておらず、今日、その再確認・再認識が喫緊の課題となっている。

筆者は、前章において、同祠堂の建造当初の構造、材料と装飾文様を調査・記録し、潘氏祠堂が同氏一族の秩序を構築するとともにそれを維持するために寄与してきたことを明確化した。本章では、潘氏祠堂の日常/非日常の「使い方」を再現し、いかにして空間演出がなされることで、同祠堂が意味ある空間として人びとに認識されてきたか、また、その空間演出とはいかなるものかを明確化することを目的とした。



図 3-1 潘氏祠堂 (2019 年 10 月 7 日, 筆者ら撮影)

### 1.2. 研究方法

本章における研究方法は下記の通りである。

(1) 文献調査 宗族生活、祠堂において行われる祭祀などに関する文献を調査し、潘氏宗族の変遷と祭祀方法について概略を把握した。また、『潘氏宗譜』[注 2]、『余村誌』[注 3]などの資料を参照し、南京市余村の潘氏祠堂の日常生活と非日常生活における使い方を把握し記録した。

(2) 現地調査 2017 年 9 月から 2024 年 5 月にかけて、現地において聞き取り調査を行った。また、2022 年 11 月から 2024 年 7 月にかけて、オンラインによる追加調査を行った。対象は、潘氏の子孫を含む約 70 名の地元住民で、長年居住する年長者に重点を置いた。潘氏祠堂の日常生活と非日常生活における使い方について聞き取り調査を行い(表 3-1)、祭祀・儀式の詳細に加え、祠堂の出入り方法、清掃頻度、祭祀動線などを記録した。

(3) 祠堂の日常/非日常の「使い方」 (1)～(2)に基づき、潘氏宗族の家系図を明確

化するとともに、当該地域における潘氏祠堂の日常生活と非日常生活における使い方を把握し、空間演出を明らかにした。

表 3-1 聞き取り調査対象者(年齢は 2024 年 2 月 10 日時点)

調査対象	年齢	性別	世代・経歴など	調査内容
潘道煥氏	98	男	潘氏十二世, 余村育ち	賞罰, 祭祀, 葬儀, 禁忌
潘杏芳氏	95	女	潘氏十二世, 余村在住	出産, 結婚, 祭祀, 禁忌
潘惟培氏	79	男	潘氏十三世, 余村在住	教育, 納税, 福祉, 禁忌
潘惟墀氏	79	男	潘氏十三世, 余村育ち	祭祀器具, 葬儀, 禁忌
潘惟岱氏	74	男	潘氏十三世, 余村在住	教育, 議論, 葬儀, 禁忌
潘元慶氏	70	男	潘氏十三世, 余村在住	商売の教育, 結婚
潘徳淦氏	70	男	潘氏十四世, 余村育ち	教育, 福祉, 祭祀, 禁忌
李小香氏	71	女	潘元慶氏の妻, 余村在住	出産, 結婚, 禁忌
李仁發氏	79	男	余村生まれ, 余村在住	潘氏宗族の歴史

### 1. 3. 先行研究

前章に記したように、本研究の対象地域である余村の潘氏祠堂に関する学術的な論文は皆無である。全国的にみると、祠堂の祭祀に関する研究は行われており、たとえば、白松強の論文『中国における農村祭祀の復興の取り組みと変容：河北省武安市固義村の李氏祠堂を事例として』[注 4]は、中国の河北省武安市固義村の李氏祠堂を取り上げて、農村祭祀の復興の取り組みおよび変容過程や要因を述べたものである。また、馮爾康が著し小林義廣が訳した『中国の宗族と祖先祭祀』[注 5]は、宗族の発展と変遷の各段階について説明し、祠堂での祖先祭祀や教育活動、一族の経済・政治生活、そして宗族の家系図の編纂状況を記録したものである。宗族についての代表的な研究論文としては、趙華富の『徽州宗族研究』[注 6]があるが、これは、徽州宗族の特徴や変遷について探究したものである。しかしながら、祠堂にみる空間演出を、祠堂で繰り広げられてきた日常/非日常の「使い方」の観点から明らかにした研究は存在しない。

本章における調査・研究では、上述した先行研究を参考にしつつ、余村の潘氏祠堂の活用の実態、特に潘氏宗族が具体的にどのように祠堂を使用してきたかに焦点を当て掘り下げた。

## 2. 潘氏祠堂の使用主体：潘氏宗族

潘氏祠堂の内部の空間配置は図 3-2 に示した通りである。この祠堂の使用主体は潘氏宗族であるため、本章においては、まずは潘氏宗族について概観していきたい。

余村における潘氏宗族は潘姓をもつ家族である。前稿[注 7]に述べた通り、潘氏宗族は、古くは、中原地域の望族であり、余村における歴史は約 400 年前の明代後期に遡る。当時、中国の中原地域は戦乱のため苦境に陥っており、「長江以南のみが楽園」といわれた時代である。潘仁なる人物が、家族を連れて河南歸徳府から南京の余村地域に移住したのはその頃のことである。これが、当該地域における潘氏宗族の歴史の始まりである。筆者は、『潘氏宗譜』ならびに聞き取り調査に基づき、余村における潘氏宗族の家系図を整理した。それを図 3-3 に示す。同図をみると、その後、彼は妻の孫氏との間に 5 人の男子をもうけ、それぞれ、長男が潘龍、次男が潘鸞、三男が潘鳳、四男が潘虎、そして五男が潘紀である。この 5 人の息子が当該地域における潘氏一族の初期の構成であり、以降、潘氏は当該地域において繁栄した。

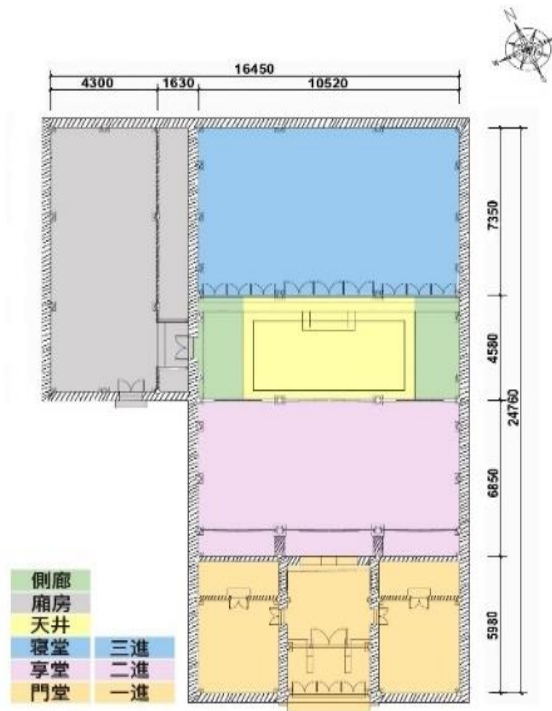


図 3-2 潘氏祠堂内部の空間配置

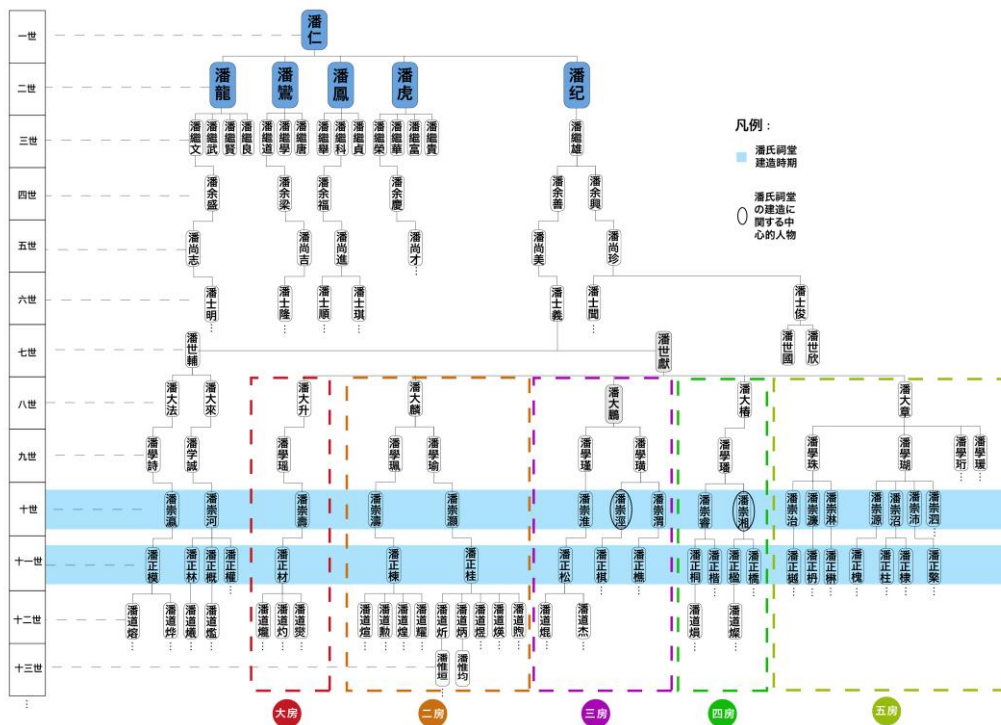


図 3-3 潘氏宗族の家系図(部分)：『潘氏宗譜』ならびに現地調査に基づき作成したもの

『潘氏宗譜』によれば、各世代で傑出した人材が輩出されたが、とりわけ、潘氏の八世である潘大鵬は、咸豊末年(1860年頃)、余村で起こった農民一揆に勇敢に立ち向い、身命を投げ打って国のために殉じたため、清朝朝廷から潘大鵬とその父親である潘世猷に地方政治・行政の指導者である「奉政大夫」[注8]の最高官位が贈られ、妻にも「宜人」[注9]の称号が与えられた。いかに大きな貢献をしたかがうかがえる。その

後、潘世猷の5人の息子は分家し、長男である潘大升およびその子孫が大房、次男の潘大麟およびその子孫が二房、三男の潘大鵬およびその子孫が三房、四男の潘大椿およびその子孫が四房、五男の潘大章およびその子孫が五房である[注 10]。

かつて、余村の潘氏は雑貨店や漬物店を営み、家を興し、富を築き、湖北省武漢市漢口区[注 11]にて商店街をつくり上げた。薄利と誠実な経営の原則をひたすら貫き、その名が全国に知られるようになった(潘惟岱氏)。なかでも、当該地域において最もよく知られているのは、潘氏宗族十世の潘崇涇である。潘氏の他の多くの男性と同様、故郷を離れて商売していたが、晩年に故郷の南京市余村に戻った。潘崇涇はその後、余村において、道を敷き、橋を建設し、毎年の大晦日には大量の米を用意し、潘氏の一族であるかどうかを問わず、困窮した村人を支援した。彼が死去した日には、道端の物乞いらさえも見送りに来たという(李仁發氏)。潘崇涇は篤志家で、当該地域で高い評判と名声を確立した。そのひたむきな努力と積極性があったからこそ、1920年代には潘氏宗族は村で最も尊敬を集めるようになったのである。

このように、潘氏宗族は長い歴史を持ち、豊かな家族の伝統や文化が受け継がれている。国に貢献した八世の潘大鵬から篤志家の十世の潘崇涇まで、潘氏の人びとはその忠誠心、勇気、善行によって、当該地域の人びとからの尊敬を集め、地域社会を牽引する役割を担ってきたといえよう。

こうしたいわば「優れた地域づくり」は、潘氏祠堂の使い方にも如実に反映されているに違いない。次に、そういった当該地域における潘氏祠堂の使い方を具体的に再現していきたい。

### 3. 潘氏祠堂の日常生活における使用

祠堂は居住するための建造物ではなく、それゆえに、日常生活における利用はなされないのが通例である。しかしながら、当該地域の潘氏祠堂においては、日常生活においてもさまざまな用途に使用された。このことは、同祠堂の大きな特徴の一つである。本章[注 12]においては、日常生活における潘氏祠堂の利用を概観していきたい。

#### 3.1. 教育の「場」としての祠堂

「潘氏祠規」[注 13]には、第一則に「重教誨」(訳文：教育と教訓を重んじること)と記されており、潘氏宗族は何よりも教育を重視してきたことがうかがえる。なお、潘氏祠規とは、宗族の人びとの間での約束事が明文化されたもので、かつては、祠堂内の享堂の壁に掲出されていた。また、寝堂には「木有本水有流須知祖父貽謀遠 田可耕書可讀但願兒孫享業長」(訳文：高い木にはその大本となる根があり 長い川の流れにはその発する源がある そのように我々は祖先が子孫のために深く考えを巡らして来たことを知るべきである 農業をやりたければ農業をやればよい 学問をしたければ学問に励むがよい 但し何れにせよ子孫がその生業を長く享受できることを望む)と書かれた「楹聯」(図 3-4)が掲げられており、これにより潘氏の子孫は常に祖先が読書、すなわち「学」を重視してきたことを心に刻んでいた。たとえば、潘氏宗族は十世の潘崇濂を招いて、享堂で潘氏の子孫に教育を行った(潘惟墀氏)。これは祠堂を通じて潘氏宗族が教育資源を提供し、子孫の学業成就に配慮してきたことを示している。

潘氏宗族の教育は儒学教育、職業教育の二つの側面から実施されていたという。その時代において、職業教育を行うことは革新的であった。潘氏宗族の房長たちはそれぞれの業界での名士で、たとえば、大房と二房は教育、三房と五房とは商売、四房は石灰製造を主業とした。また、余村に留まった潘氏の四房の子孫は、早朝から石灰窯

で懸命に働き、石灰の製造方法などさまざまな専門技術を学んだ(潘惟培氏)。同祠堂は、単なる儀礼的な場にとどまらず、宗族の有する各業界の知識と技術を次世代に伝える教育の拠点として機能していた。族長と房長は宗族の指導者であると同時に、業界の知識や経験、技術を次世代に伝えることで潘氏宗族の各分野の力を継承していく責任をも担っていた。



図 3-4 寝堂に掲げられた楹聯(2024年2月23日, 潘惟岱氏撮影)

### 3.2. 議論の「場」としての祠堂

宗族の権益と安定を維持するためには、宗族内のコミュニケーションが極めて重要である。潘氏宗族の重要な議論は、この祠堂において行われた。その際、族長と房長は廂房の側門から享堂に入った。享堂内には椅子が置かれ、族長が中央に座り、各房の長が大房から五房の順に並んだ(潘惟岱氏)。祠堂内では、民居におけるそれとは異なり、指導層の選出や宗族内の大きな紛争、宗族以外の人びととの争いなど、宗族の重要な事項に関して議論がなされた。同時に、各房長は重要な事項の議論が終了すると、祖先と族長に最近の房の状況や次の重要な予定などを報告した。また、族人は、大小に関わらず、全ての問題に対して族長に祠堂で公正な判断を求めることができた。これは「潘氏祠規」の第十則で述べられており、「族中如有大小不平之事亦宜投鳴宗長會同族中公議」(訳文：宗族内のさまざまな不公平な出来事については 族長に連絡しその立ち合いの下で 祠堂で族人と協議して解決すべきだ)と書いてある。このことから、祠堂が族人にとって最も公正な場所と認識されていたことがうかがえる。

### 3.3. 納税の「場」としての祠堂

「潘氏祠規」の第六則には、「國課早完久垂家訓祠租清付方順人情」(訳文：国の税金は早めに支払いを完了させるべきであり その点については家訓で強調されている 同様に祠堂に必要な祠租も宗族の人びとは清算しなければならない これが人情に合致する行動である)とあり、国税を納付すべきことが強調されている。このことは、族人は祠租を支払うべきであるとの考えにつながる。祠租は、宗族財産の一部として同

宗族の運営に使用された。一般的には、族長が命令を下し各房に徴税を促し、会計係が「登簿」[注 14]を持って各房を回り税金を徴収したが、何らかの理由で都合が悪かったり、人と会うことが難しい場合は、祠堂の廂房で特定の日時を選んで、宗族の人びとからの祠租の受け入れを待ったという。

### 3.4. 福祉の「場」としての祠堂

潘氏宗族は族人の福祉にも力を入れていた。「潘氏祠規」の第一則には、「公祠設義校以兼收」(訳文:祠堂においては子どもたちに教育を施すために無償の私塾を設立する)と述べられている。潘崇涇が族長を務めていた間、祠堂には、福祉資金の受け取り場所である「報本堂」が設立された。また、『潘氏宗譜』の「計開條款十則」(表 3-2)を制定し、結婚に関して支援を行った。困窮する者への受給の規則も細かく記述しており、支援の内容を明確化することにより、論争を減らし、効果的に救済を行い、潘氏宗族の運営の円滑化を図った。

表 3-2 計開條款十則(会計条項十則)

番号	原文	訳文
1	族中貧而婚娶資不足者助洋参拾元娶養媳者助洋拾伍元	困窮家庭で息子に嫁をめとる際に 婚資が不足している場合 援助金銀元 15 元
2	族中貧而嫁女奩資不足者助洋拾伍元	困窮家庭で娘を嫁に行かせる際に 嫁荷に不足している場合 援助金銀元 15 元
3	族中貧而喪費不足者助洋参拾元	困窮家庭で葬式を挙げる際に 予算が足りない場合 援助金銀元 30 元
4	族中貧而停柩日久無力下殯者助葬費洋拾伍元	困窮家庭で棺桶が長く放置され 葬斂の予算が厳しい場合 援助金銀元 15 元
5	族中貧而守節撫孤者按年酌給	困窮家庭でありながら貞節を守り幼児を育てる女性には 援助金を 1 年おきに事情を鑑みて提供する
6	族中貧而好學從師無力者膏火費酌給	困窮家庭でありながら篤学の者で 学費を出す予算が厳しい場合 事情を鑑みて援助する
7	族中貧而孤孀及年老無子衣食不周者按年給	困窮家庭で子どものいない未亡人には衣食の予算が足りない場合 毎年に援助する
8	族中貧而遇饑饉之年日食不敷者按人數給	困窮家庭で饑饉にて日常の食の供給が厳しい場合 人数に合わせて援助する
9	族中貧而有婚喪等事須自報明以領此款	困窮家庭で冠婚葬祭などの行事を行う用がある場合 上記の支援金を貰うためには自ら申し立てなければならない
10	族中貧而矢志不願領此款者聽之	困窮しながらも志を捨てず 援助を拒む者は その意志を尊重する

### 3.5. 賞罰を与える「場」としての祠堂

優れた成果を挙げた者には報奨を与え、宗族の原則に違反した者には明確な罰を与えることで、宗族の安定と繁栄を確保した。このため、祠堂は賞罰を与える場、いわば法廷の機能も有していた。「潘氏祠規」には、「責罰」(訳文:責めることと罰すること)、「不得入祠」(訳文:祠堂への出入りを禁止する/死後 祠堂に祭祀されることを禁ずる)、「送官」(訳文:官庁に送ること)の三つのレベルを含む処罰制度が設けられていた。責罰には経済的な罰則のみならず、「跪罰」(訳文:正座でひざまずかせる罰)、「杖罰」(訳文:棒打ちの罰)などの罰則手段も含まれていた。経済的な罰則の徴収した罰金の多くは、宗族の運営に必要な費用に使用された。また、「跪罰」と「杖罰」のいずれになるかは族長と房長が決定した。過ちの程度に応じて、跪罰の時間は一時間から一晩に及ぶこともあった。杖罰は三十回から五十回程度であった。刑の執行は、晴れた日

には天井で行い、雨の日には享堂で行った(潘道煥氏)。「不得入祠」の罰については、族人にとって死後に祠堂で安息することが宗族の望む終焉とされていたが、この罰則は、宗族から排除され、死後に魂が帰る場所がないことを意味し、厳しい戒めとなった。「送官」は宗族内で解決できない最も深刻なレベルの罰、そうした問題は、村長に委ねられた(潘徳滄氏)。

### 3.6. 自らを律する「場」としての祠堂

潘氏祠堂は、宗族の人びとにとっては特別な存在であり、この空間に足を踏み入れるすべての人が、緊張感を持って、まるで自らを律するかのような気持ちになったものだという。潘氏祠堂には、他にも、以下のような多数の規律・禁忌が存在した(潘惟墀氏)。

毎朝、清掃を行わなければならない。清掃も外から内へと明確な順序があり、最後に清掃するのは寝堂である。木主[注 15]を拭く順序を守る必要があり、木主は始祖潘仁から埃を払い始めなければならない。

毎月一日と十五日には必ず線香を三本燃やし、供物を供える。一般に、供物には季節に応じた果物や花などを選ぶ。

祠堂の範囲内で言い争いをしてはならない。

祠堂へは清潔な衣服で赴かなければならない。

祠堂内に配置された木主を勝手に移動してはいけない。

祠堂内に雑物を堆積してはいけない。

日常生活においては、祠堂へは儀門を通じて出入りしてはならず、廂房から側門を通じて出入りする。

このように、当該地域における潘氏祠堂は日常的に利用されるものの、その使い方には明確な約束事があり、それは同空間の維持と潘氏一族の円滑な運営に関するものに限られていたことがわかる。

それでは、次に、非日常の使い方を確認していきたい。

## 4. 潘氏祠堂の非日常生活における使い方

潘氏祠堂における非日常生活には「祭祀」と「人生儀礼」があった。それぞれについて、事例を取り上げつつ概観する。

### 4.1. 祭祀の「場」としての祠堂

#### 4.1.1. 祭祀対象

潘氏祠堂における祭祀の直接的な対象は、始祖潘仁以降の祖先の木主である(潘惟墀氏)。木主は、人が死去した後に直系の三代以内の家族が同村の「邪工」[注 16]に制作を依頼し、死者の一周忌に族長が寝堂の正龕[注 17]に特定の順序で特定の場所に置く、いわゆる「進主」の儀式によって安置された(潘道煥氏)。木主の配列は昭穆制度[注 18]に従っており、寝堂(図 3-5)には男性の木主が置かれ、寝堂北側の中央の壁には、季孫[注 19]の肖像画(図 3-6)が掲げられていた。寝堂の中央には正龕が設けられ、始祖の潘仁の木主が祀られ、潘氏祠堂の潘仁の木主の下前方には、潘世猷、潘大鵬、潘学璜の三人の木主が並んだ。始祖の左側に付属の祭壇を設け、二世、四世、六世および八世が祀られた。始祖の右側に付属の祭壇を設け、三世、五世、七世および九世が祀られた(潘道煥氏)。祠堂の寝堂の空間には限りがあるため、祖先の木主のすべてを納めることはできない。身寄りのない人、早世した男女や子ども、子のない妾などの

木主は別の場所に安置された(潘惟墀氏)。

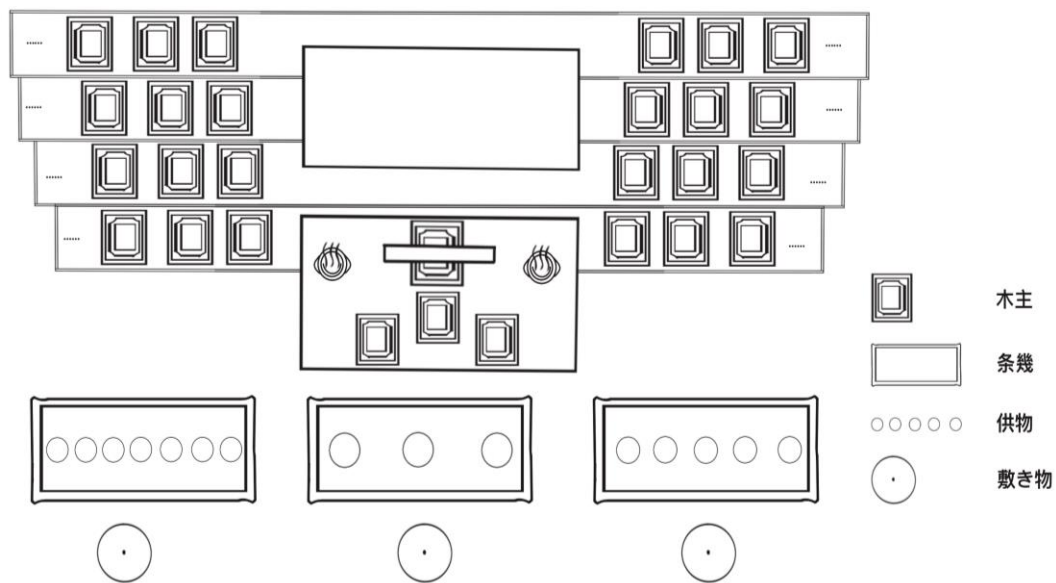


図 3-5 寝堂最奥に位置する正龕の配置 (1925 年頃)



図 3-6 季孫の肖像画;寝堂に掲げられたもの (2023 年 9 月 27 日, 筆者ら撮影)

このように、木主の配置には明確な空間秩序が存在している。祖先からみると、中央列、左列、右列に分かれており、かつ、この順序で高位から低位に配列された。上下でも階層関係があり、上が高位であった。

#### 4. 1. 2. 祭祀時間

潘氏宗族の祭祀は二種類に分けられる。一つは「大祭」、つまり重大な祭祀である。それらには、「春祭」(立春)および「秋祭」(豊年祭、旧暦の 10 月 10 日)の二つがある。もう一つは「常祭」で、大祭以外の「土地祭」(旧暦の 2 月 10 日)、「清明祭」、「夏祭」(中元、旧暦の 7 月 15 日)ならびに「冬祭」(冬至)があった[注 20]。

#### 4. 1. 3. 祭祀供物と器具

祭祀で用いられる供物と器具にも厳しい約束事があった。『潘氏宗譜』の「祭祀祝文」

には、「潔性黍盛醴齊…蘋蘩雖具」(訳文：祭祀者は新鮮な家畜 穀物 酒 野菜などを丁寧に用意し…神前に捧げる)と記載されている。潘氏の宗族の大祭の供物には、三牲(豚、牛、羊)、五穀(稲、麦、黍、豆、粟)、七碗(酒、茶、魚、鶏、野菜、果物、餅)が含まれていた(潘道煥氏)。

また、季節に合わせて日常の料理も変えられた。春祭にはあっさりした味付けの料理が中心となり、夏祭には暑さを払う冷菜を中心として、スイカも供えられた。秋祭には収穫の時期であるがゆえに種類が豊富で、必ず新鮮な果物を祖先に捧げ、その庇護に感謝した。冬祭には、屠殺したばかりの新鮮な豚、牛、羊の肉を捧げた(潘徳淦氏)。このように、潘氏の人びとは、祭祀の供物に関して、「天の時」、つまり季節に応じて精細に定めており、潘氏の人びとが自然との調和を重視してきたことがうかがえる。また、豊富な供物を通じて、祖先への恭敬の念を表したのである。祭祀は、まさに、当時の社会の「礼」の体現でもあった。

また、供物に使用される陶磁器具は、潘氏が祭祀のために、江西省景德鎮に特注したものが用いられた。それらの表面には魚の模様が描かれ、裏面には「潘氏宗祠」という文字が刻まれていた(図 3-7)。魚の模様が選ばれたのは、中国語で「魚」と「余」が同音であり、「年年有魚」、つまり「年年有余」(訳文：年々余裕がある)の願いを表したためである(潘惟墀氏)。これらの陶磁器具は宗族の共有物であり、全てが祠堂内に大切に保管されていた(潘元慶氏)。

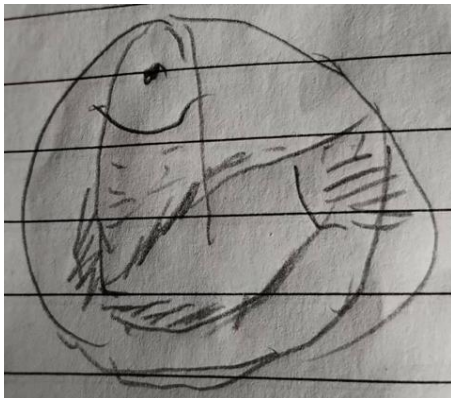


図 3-7 潘惟墀氏が幼いころに祭祀に参加した際の陶磁器具の文様  
(絵：潘惟墀氏)



図 3-8 祭祀に使用された盥  
(2019年9月29日, 余村にて筆者ら撮影)

筆者は、2019年の現地調査の際、祭祀に使用されたという銅製の盥(図 3-8)を発見した。当該地域の人びとは、「金盥洗手」と称し、この盥で手を洗えば過去のすべての悪いことから決別できるといわれており、供物を捧げる前にこの金盆で両手を清潔・清浄にすることが求められたという。図 3-9 は潘氏の人びとに「鑄鉄獸面香炉」と呼ばれる明代に出土した祭器である。その表面には獐猛な獣の模様があり、邪気を払う役割を果たしたという。図 3-10 は祭祀時に使用された銅製の燭台である。2匹の龍が玉と戯れる様子が彫刻されている。この図案は吉祥やめでたい意味以外にも、「互いに尊敬し、譲り合うべきである」という意味を含んでいるという。

これらの器具をみると、潘氏が祭祀の器具に対して材質や彫刻の図案を重視してきたことがうかがえる。潘氏の人びとは祖先にできる限り最上のものを提供するために、あらゆる方法を尽くしてさまざまな資源を活用したのであった。これには潘氏の人びとの祭祀への誠意が示されている。

#### 4.1.4. 祭祀の担い手



図 3-9 鑄鉄獣面香炉

(2019年10月5日, 余村にて筆者ら撮影)



図 3-10 祭祀に使用された燭台

(2019年10月7日, 余村にて筆者ら撮影)

潘氏祠堂における主な祭祀の担い手は、宗族の「指導者」と「執事」であった(潘道煥氏)。

指導者とは族長と房長を指し、通常は士族階級や才徳を兼ね備えた者から構成され、宗族内での地位は最も高く、宗族の日常業務や資産、歳時の祭祀などを担当した。執事は、祠堂の維持、規則の協議、祭祀の実施、紛争の調停など、具体的な宗族事務を担った、宗族内で一定の発言権を持ち、一般の族人よりも高い地位にあった。

祭祀はいわば分業で執行された。一族の18歳以上の男性は全員が祠堂に入り、儀式に参加した。16歳以上の女性は全員が民居で祭祀活動のさまざまな準備をした(潘杏芳氏)。族長は主導的な役割を果たし、儀式を知らせ、祝文を朗読し、拝礼を主催する責任を負った。それぞれの房の長は、積極的に祭祀活動の準備の手配を行うなど、族長を補佐する責任があった。祭祀当日、房長は主に儀式の後に族長を補佐し、祖先に捧げられた祭祀の肉と酒を宗族の人びとに分配する仕事も担当した。執事は祭祀のいずれかの部分を担当し、それぞれの職務を果たした。潘氏宗族では、執事の方業は比較的明確であり、下記の職務が含まれていた(潘道煥氏)。

- 1) 通贊 儀式が円滑に進行するように、祭祀の全プロセスを指導し指示する。普段は担当者2名。
- 2) 引贊 祭祀儀式の順序を指導し、祖先拝礼時のエチケット違反を是正し、祭祀儀式の厳粛さと神聖さを確保する。普段は担当者4名。
- 3) 司器 祭祀の道具を管理し、祭祀前に手を清める金盥を準備し、祭祀道具が清潔で妥当に使用されるよう管理する。普段は担当者2名。
- 4) 司饌 供物の受け取りの担当で、主に10歳程度の少年2名と青少年2名での仕事で、普段は担当者4名。
- 5) 司年 祭祀当日の早朝、潘氏祠堂付近で銅鑼を三回鳴らし、宗族の人びとに清潔な服を着て祠堂へ移動するよう呼びかける。普段は担当者1名。
- 6) 司楽 銅鑼、太鼓、楽器の伴奏者で、普段は担当者4名。

上記のような組織構造と分業は、祭祀活動をより整然かつ厳粛なものにし、祭祀活動がスムーズに進行し、誤りなく実行されることを担保した。

祭祀の際は、主祭の族長は最前列の中央に立ち、その後ろに付き添いのそれぞれの房長、そして、房長の後ろに執事が居り、残りの参拝者は世代・長幼の序列に従って享堂に並んだ(図3-11)。これらの人員配置をみると、寝堂から享堂、ないし門堂に至るまでレベルが徐々に低くなり、祠堂の空間秩序が強調された。

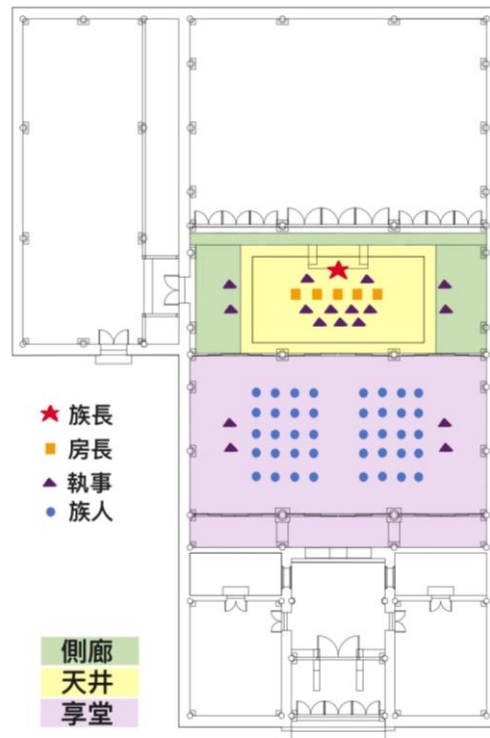


図 3-11 「大祭」における人員配置 (1925 年頃)

#### 4.1.5. 祭祀のプロセス

祠堂の核心的な活動である祭祀は、複雑な一連の儀式化された行動を通じて祖先への畏敬の念を表すものであり、その儀式化は宗族祭祀文化の特徴の一つである。

『潘氏宗譜』の「祭祀儀注」に記されている大祭と常祭のプロセスは以下の通りである。なお、祭祀の儀式は、祠堂における族長と族人の動線に反映されている。大祭には 59、常祭には 29 の手順がある。それぞれについて概観する。

大祭は春祭、常祭は清明節をもって、具体的に説明する。

##### (A) 大祭の例

大祭の事例として 1925 年の「春祭」を取り上げる。

「春祭」は「立春」の日に行われた。立春は万物の始まりを示し、太陽暦の 2 月 4 日である。立春には、始祖潘仁を中心とした祖先を祀る祭祀が行われ、それは潘氏一族にとって最も重要な儀式の一つであった。

大祭を行う三日前には、族長である潘崇涇は廂房の側門から入り、祖先の木主の前に跪き三回拝んでから、祖先に次のように祈る。「今年的春祭于三日後举行 万物復蘇 望祖先保佑」(訳文：今年の春祭は 3 日後に行われる 万物が蘇る春に当たり 祖先の加護を願う)と伝え、三回拝礼してから祠堂を出る。そして、五つの房の房長に三日後に春祭が行われることを知らせる。祠堂を出た時点から、族長は 3 日間肉食を避けなければならない。

祭祀当日の族長の動線は以下の通りである(図 3-12)。①先頭に立って、祠堂の儀門の右寄りから右の足を踏み入れる。②享堂から天井へ入る。③右手、左手の順で手を清める。④木主に一回拝礼する。⑤管弦楽が鳴り始めると、族長は天井内で四回拝礼する。⑥香台の前に跪く。⑦右手で線香を取る。⑧それらを三回頭上に上げて拝礼する。⑨左手で香炉に線香を差し込む。⑩一回拝礼して天井に戻る。⑪再び天井から

寝堂に右の足を踏み入れる。⑫天と地と祖先に酒を三回捧げる。⑬続いて米飯を捧げる。⑭献立てを捧げる。⑮汁物を捧げる。⑯天井で三回拝礼する。⑰管弦楽が止まると、祝文を読み始める。⑱銅鑼と太鼓が鳴り始めると、祝文を火鉢で燃やす。⑲祠堂の儀門の左寄りから出る。

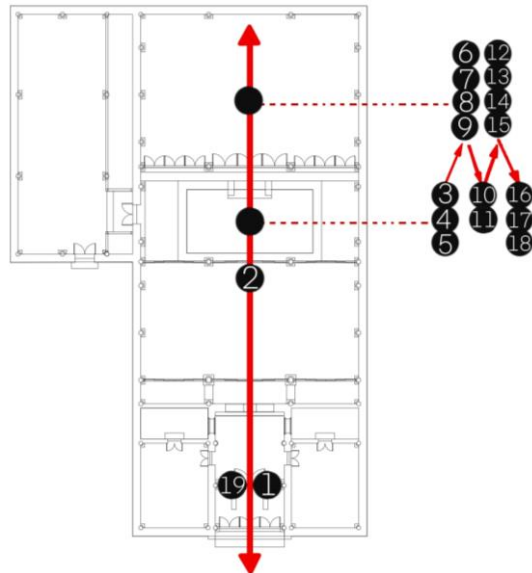


図 3-12 「大祭」における族長の動線(1925 年頃)

族人の動線は図 3-13 の通りである。①銅鑼の音を聞いた族人らは順番に祠堂の外で待機する。②儀門の右寄りから右の足を踏み入れる。③享堂で待つ。④吉時になると、四回拝礼する。⑤右の足から左の足へ地面に跪く。⑥頭を下げて拝礼する。⑦木主に向かって右側の側廊から寝堂に入る。⑧香台の前に三回拝礼する。⑨左側の側廊を通って享堂の元の位置に戻る。⑩一回拝礼する。⑪管弦楽の曲を聞いた後、三起三拝する。⑫祝文を聞き、銅鑼、太鼓の曲を聞いて、祝文が燃える様子を見て、儀式の終了を宣言するのを待つ。⑬儀式の終了が宣言されたら、祠堂の儀門の左寄りから出る。

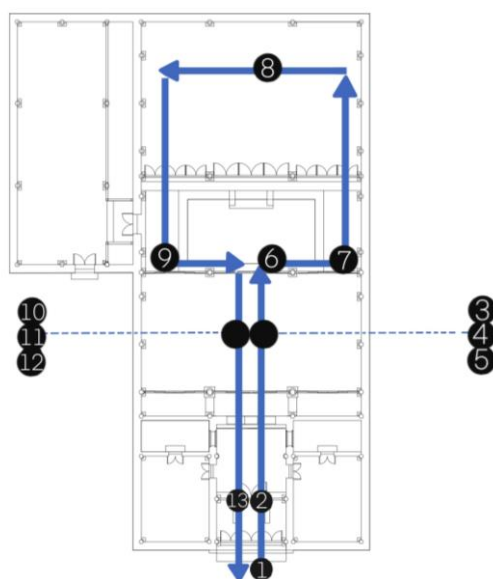


図 3-13 「大祭」における族人の動線(1925 年頃)

房長と執事の主な役割分担は以下の通りである。祭祀の3日前に、房長が各分家会議を開き、祭祀の祭物の手配をする。祭祀の前の日に、司器は祠堂の正門を飾り、祭祀の器具、テーブル、椅子などを配置する。祭祀当日の午前6時頃、司年は潘氏の祠堂の近くで銅鑼を三回鳴らし、族人に正装して祠堂へ向かうよう呼びかける。司年は側門から入り、祠堂の正門を開け、宗族の呼びとが祠堂に入るのを待つ。そして、儀門から出入りすることができる。しかしながら、祠堂内では中央を歩かない方がよい。なぜなら、参道の中央は「正中」と称される祖先の通り道とされるためである。なお、北に向いて、祠堂内へは儀門の右寄りから入堂し、左寄りから退堂するのが通例である。吉時になると、通贊が「序立」[注 21]を唱える。司器は、天井で金盃を持ち、族長を始め、房長、執事、その他全員が手を清める。それから、司器は元の席に戻る。司楽は側廊の両側に座り、細楽(管弦楽の曲)を演奏し、その曲が終わると、粗楽(銅鑼や太鼓の曲)を演奏する。さらに、粗楽が終わると、司器は火鉢を準備し、族長が祝文を燃やすのを待つ。司饌は天井に居る族長に満杯にした酒の器を三回届け、その後、米飯、献立て、汁物を三度捧げる。通贊は祭祀のおわりを告げ、房長は供物をテーブルから取り下げ、廂房に運び、族人に分ける。

### (B) 常祭の例

常祭の事例として、1925年の「清明節」を取り上げる。4月5日には、比較的近年に亡くなった祖先を中心とした祭祀が行われ、彼らに対する深い思いを表す主な祭祀である。

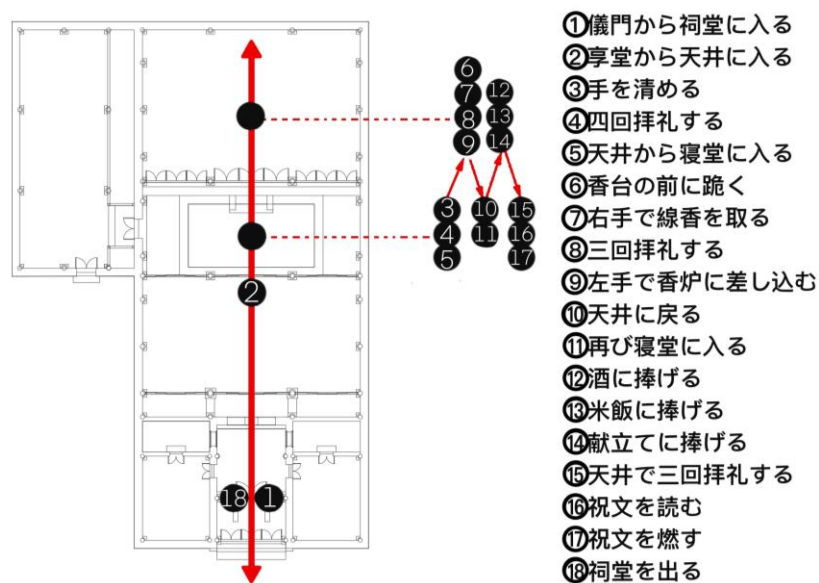


図 3-14 「常祭」における族長の動線(1925年頃)

筆者は、『潘氏宗譜』ならびに聞き取り調査に基づき、余村の潘氏祠堂において、1925年に行われた清明節の動線とプロセス図を整理した(図 3-14、図 3-15)。祭祀が終わると、族人は廂房から祖先に捧げる供物や紙銭[注 22]、祖先の墓地の雑草を取り除くための鎌などの道具を取り出し、墓地に薄い黄色の紙銭を掛けに行った。

### (C) 大祭と常祭の違い

以上からみると、大祭と常祭のプロセスには類似した点もあるが、異なる点も多い。たとえば、(a)祭祀の時間が異なる。大祭は6時から始まり、3日前から準備する必要があるのに対して常祭は7時から始まり、3日前から準備する必要はない。(b)拝礼空

間が異なる。大祭の場合は寢堂に拝礼に行く必要があり、動線は長方形になるが、常祭は享堂で跪くだけで、動線は直線になる。(c)祭祀の供物は異なり、大祭は常祭よりも豪華で、米飯、献立て、汁物を捧げる必要があるが、常祭は米飯と献立てだけで、量は大祭に比べてはるかに少ない。(d)祭祀の音楽が異なる。大祭には音楽の伴奏があるのに対して、常祭には伴奏がない。(e)祭祀の参加者が異なる。大祭の場合は執事者が多く、17名程度だが、常祭は人数が少なく、通贊、司器、司饌のみで約7名程度となる。

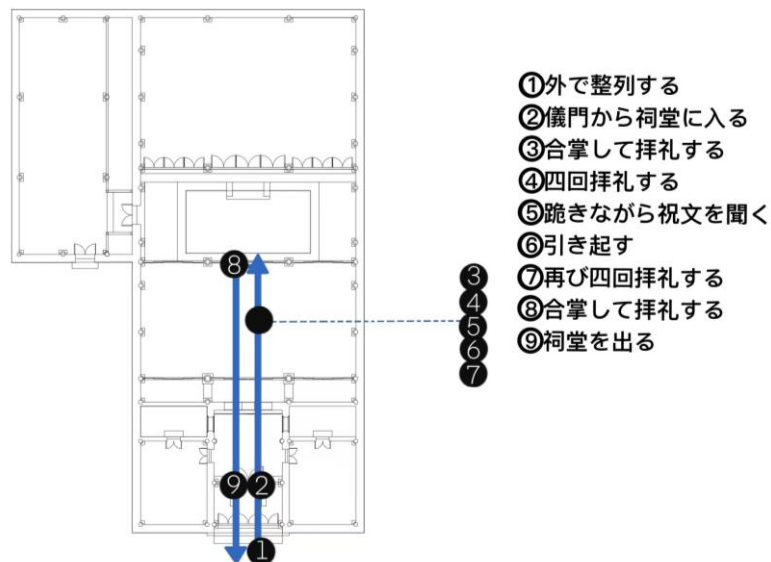


図 3-15 「常祭」における族人の動線(1925 年頃)

## 4. 2. 人生儀礼の「場」としての祠堂

### 4. 2. 1. 出産儀式

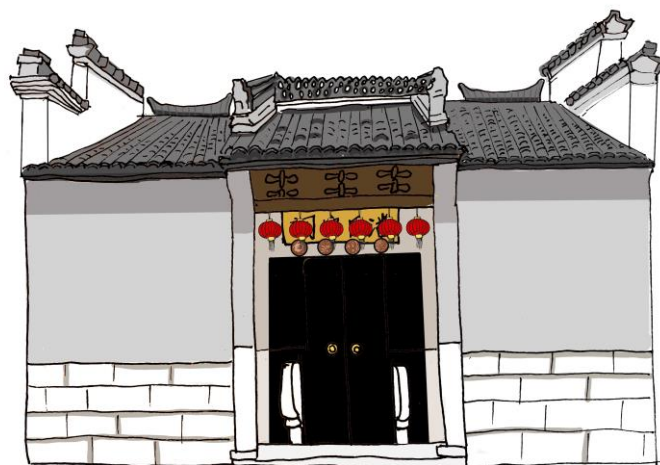


図 3-16 出産儀式時の祠堂正面の儀門の飾り

潘氏宗族の子どもが出産した後は、まず、族長に報告し、族長に名付けてもらうことになる。既存の「行輩歌」[注 23]に基づき、族長は主人と相談しいくつかの名前を暫定し、最後は話し合いで決める。そして、族長は正装に着替え、廂房の側門を通過して寢堂に入る。次に、「亀甲紋」の焼印をつけた餅や卵、赤いナツメなどを供え、まず木主に三回拝礼し、線香を3本焚いてからこう告げる。「今日我族子孫又添新丁/口 取名

誰々 先来向祖先稟告」(訳文：本日我が子孫に新たに丁(男性)/口(女性)が生まれ その名前は誰々となった まず祖先に報告する)。新生児が男である場合は、その後、その名と生年月日が家系図に記録される。また、最後に、族長は同じ道を引き返し、男の新生児と同じ数の大きな花燈[注 24]を祠堂儀門の門額(図 3-16)にかけるように指示した(潘道煥氏)。なぜなら、男の子は中国語で「丁」と呼ばれるが、この発音が「燈」の発音と似ており、潘氏宗族の人びとは、その生誕を花燈で示すことによって共有したのである。

また、潘氏宗族では元宵節[注 25]の際、「点燈」という儀式を行う。「点燈」とは、男子が生まれた宗族は、翌年の正月十三日から正月十五日の元宵節まで、潘氏祠堂に花燈を掛ける儀礼であるが、これによって、新生の男子が一族の成員として認められることとなる。

#### 4. 2. 2. 結婚儀式

新しい花嫁をめとることは、潘氏宗族にとって重要かつ厳粛な儀式である。結婚式の1ヶ月前に、潘氏の主人が婚礼用の「喜糖」[注 26]や「喜字紋」の印をつけた餅、新郎新婦の誕生した月を記した赤い紙を持って族長に報告に行く。

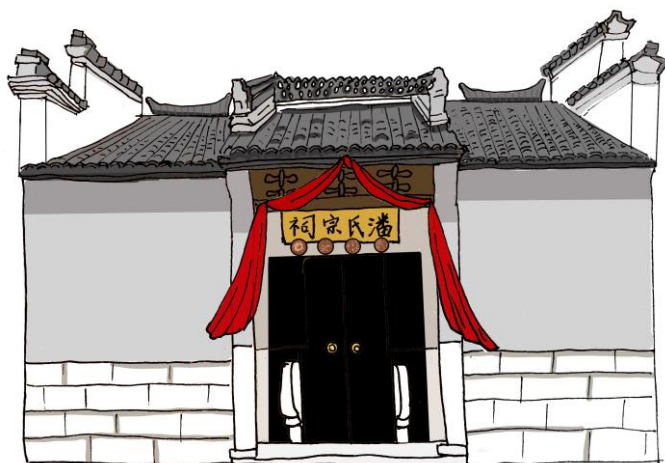


図 3-17 結婚儀式時の祠堂正面の儀門の飾り

結婚式を挙げる3日前、族長は祠堂の清掃を手配しておく。そして、族長は廂房の側門から寢堂に入り、まず婚礼用の餅や喜糖、布などを供え、木主に三回拝礼し、線香を3本焚いてから、こう告げる。「3日後我潘氏子孫誰々和誰々将要結婚 先来向祖先報告」(訳文：3日後に我が一族の子孫 潘誰々は誰々と結婚することになり まず祖先に報告に来た)。結婚式の前日、祠堂儀門の門額に「紅彩」[注 27]が掛けられる(図 3-17)。なぜなら、潘氏宗族にとって赤色には、魔除けと慶事との二重の意味があるためである。早朝吉時、新郎は族長の案内により、祭壇の前で線香を焚き、その後、祠堂から出発し新婦を迎えに行く「迎親」が行われる。媒酌人は先頭で誘導し、その後ろには新郎、親友らが結納品を運んで新婦の家に向かう(潘道煥氏)。新婦の家に着いてまず結納品を渡し、両親に挨拶し、新婦の顔が誰にもみられないよう、頭に「紅蓋頭」[注 28]を被せて「花轎」[注 29]に乗せて祠堂に戻る。新婦は実家を出てから祠堂に入るまで、足が地面につくことは禁忌とされる(潘杏芳氏)。迎親チームが祠堂に戻ったら、新郎新婦は祠堂の正門から赤い布で敷かれた道を通り寢堂までゆっくりと歩く。天井に着いたら立ち止まり、族長から線香を3本受け取り、一礼は天に、二礼は地に、三礼は祖先に捧げる。その後、新郎のみが寢堂に入り、さらに三拝礼し、香炉に線香を

入れて、天井に引き返し、新婦と一緒に再び三拝礼して祠堂を出る。

この儀式の間中、花嫁は「紅蓋頭」を被って、全行程を通して花轎を使用し、彼女が通る道には、全て赤い布を敷かなければならない。なぜなら、結婚儀式には、それまでの人生と別れ、新たな宗族の一員として「清潔な身」を保つという意味があるためである。このことから、祠堂が潘氏宗族において一般民居をはるかに超えた高い位置付けにあったことが示唆される。それは、花嫁がまず祖先からの祝福を受け、祖先に敬意を払い、宗族の歴史と伝統を尊重することを意味している。

#### 4.2.3. 葬儀

死は宗族に悲しみをもたらせる出来事である。潘氏宗族の葬儀は、「通夜」と「葬送」から成り立つ。通夜は三日をかけ、自然死した場合は潘氏祠堂で行われる。自殺、事故など場合は、亡骸を祠堂に入れてはならず、自宅で行うかそのまま送葬する。死亡を確認すると、死者の長男あるいは長孫がすぐ喪服に着替えて、族長に報告し、族長も喪服に着替えて、白い布を持って祠堂へ祖先に報告に行く。線香に火を点けて四方へ順番に拝礼して、「今天誰走了」(訳文:本日誰々が亡くなった)と祖先に報告する(潘元慶氏)。

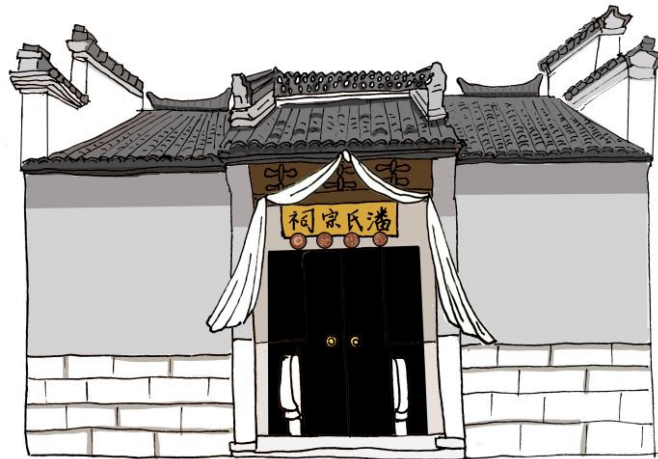


図 3-18 葬儀時の祠堂正面の儀門の飾り

そして、村のなかで、死者の長男あるいは長孫、経験のある人たちに準備を依頼して、祠堂儀門の門額に「白い麻の布」をかけ(図 3-18)、女性たちは臨終の死装束に着せる。準備が終わったら、男性らは死者を民居から儀門を通り寝堂まで運び入れる。死者の遺体は祭壇の前に、頭を北に向けるように置かれる。この時から、葬儀が始まるまで、遺体の前で、来世で使用する薄い黄色の紙銭と「元寶」[注 30]を燃やし続ける。当日の夜に通夜が行われ、死者を弔うため、家族は翌朝まで死者の傍で付き添う。

潘氏の人びとにとっては、「落葉帰根」[注 31]、つまり、死後に祠堂で安息することが宗族の望む終焉であるとされてきた。潘氏の人びとにとって、潘氏祠堂とは、永遠に安息する場所なのである。

### 5. 潘氏祠堂にみる空間演出とその特質

以上を踏まえ、潘氏祠堂にみる空間演出とその特質は下記の通りである。

#### 5.1. 多機能を備えた中心空間

前報[注 32]にしたように、潘氏祠堂は同村のほぼ中央に置かれている。また、本章

で毎朝、清掃がなされたり、毎月、供物が供えられたり、また、多数の禁忌が設定されており、常に同村のなかでも上位の空間として認識され、それを維持するための営みがさまざまになされてきた。日常生活においては、教育、議論、納税、福祉、賞罰を与える場などとして、また、非日常生活においては、祭祀や人生儀礼の場として実に多様に利用されていた。ここでは、祠堂は祖先を祀るのみならず、生活をより豊かなものとするための宗族全体にとって重要なさまざまな活動を行うための場として位置付けられており、それに対応した柔軟な設えがなされていた。

## 5.2. 「三礼の秩序」の空間

祠堂の祭祀においては、「三礼の秩序」の空間が存在していた。祠堂の三つの「進」は、祭祀における「三礼の秩序」の空間配置を示しており、門堂が「備礼空間」、享堂が「観礼空間」、および寝堂が「拝礼空間」となった。それらの三つの空間には、複雑かつ厳密な祭祀の段取りがあり、準備、観賞、拝礼という「三段階」が順に具体化されたものといえる。その三つの進と三つの礼は有形の物理空間と無形の世界空間が連動した構造となっており、秩序ある祭祀システムを形成している。同時に、三進つまり、寝堂が祭祀の主要空間であることを示していた。

## 5.3. 人生儀礼などにおける所作を共有する媒体としての空間

人生儀礼では、族長は儀礼ごとに異なる供物を携えて祖先に報告する。その意味では、供物は人と祖先とのコミュニケーションの媒体である。供物をみると、祖先が宗族で何が起きているかを知ることになる。さらに、祠堂の儀門には、異なる人生儀礼に応じて異なる装飾が施される。儀門は情報伝達の場であるとともに、宗族の重要な時を族人と共有する極めて象徴的な場なのである。

## 5.4. 日常生活と非日常生活における経路の差異

日常生活における経路と非日常生活における経路は完全に異なっていた。日常生活では、族長と族人は廂房の側門から入った。そして、非日常生活、特に祭祀の際、族長と族人は儀門から入らなければならない。大祭の際、族長は直線的な拝礼動線を取り、一方、族人は祭壇の周囲を囲むような拝礼動線となった。族長のみが、祠堂の中心軸を貫通する。これは、族長のみがいわば「神聖な道」を歩くことができることを表している。「神聖な道」は祠堂の中心軸線上にあり、族長の動線は、祠堂の儀式の一貫性を顕在化させるだけでなく、祖先と子孫の精神的なコミュニケーションのための空間経路もつくり上げ、神聖な空間の雰囲気が生み出された。族人と族長の動線が重なり合うことより、祠堂内での動線は「中」の字を描いた。

## 5.5. 人と祖先が共有する空間

潘氏祠堂においては、年6回の祭祀、および出産、結婚儀礼、葬礼といった人生儀礼の主要な行事が行われ、当該地域の時の巡りの維持に重要な役割を果たしてきた。祭祀・人生儀礼においては、各種の所作において担い手が定められており、人びとの社会的役割、序列を明確化することに寄与した。潘氏祠堂は、宗族全員の参与に基づいて一定の約束事の下に空間の活用がなされることで、はじめて、人と祖先が共有する空間と認識され、また、それによって、潘氏の人びとは祖先の加護を受け、安寧で裕福な生活を享受してきたといえよう。

## 6. おわりに

本章は、中国江蘇省南京市余村における潘氏祠堂の日常生活および非日常生活の使い方を再現し記録するとともに、いかに空間演出がなされていたかを明らかにすることを旨としたものである。調査・考察の結果、以下の知見が得られた。

(1) 余村における潘氏祠堂においては、中国のその他の多くの祠堂とは異なり、非日常生活のみならず、日常生活における積極的な利用がなされていた。

(2) 潘氏祠堂は、日常生活においては、宗族の人びとの教育をはじめ、宗族間の重要な取り決めを行う議論の場として、また、納税や福祉、賞罰を付与する場として利用され、宗族の運営に大きく寄与していた。

(3) 潘氏祠堂は、非日常生活においては、祭祀や人生儀礼の場として多様に利用されていた。祭祀においては、「三礼の秩序」に基づいて、門堂、享堂、寝堂がそれぞれ備礼空間、観礼空間、拝礼空間として機能した。また、人生儀式においては、祠堂は供物や装飾などの所作を共有する媒体として機能した。

(4) 日常生活と非日常生活における祠堂への出入りや祠堂内における動線は異なり、また、非日常生活においても祭祀の種類によって動線が使い分けられ、それによって時間・空間の演出が巧みになされていた。

(5) 潘氏祠堂は、人と祖先が共享する空間と認識されており、宗族の社会的役割や序列が明確化され、人びとの祖先の加護への感謝と共同体への帰属意識が強化されていた。

これらの知見は、潘氏祠堂は上位の空間であり、それを民居以外での宗族内での第二の生活の場にし、また宗族の交流の中心地となっていた。祖先に敬意を表することが内発的な宗族の結びつきとなり、これは現世の人びとの人間関係をつくり豊かな生活の創出に繋がっていた。さらに、次世代の豊かな生活の創出につながる。祠堂は地域の文化的アイデンティティの象徴であり、住民の共感を呼び起こす存在でもある。これにより、地域住民が自らの文化を再評価し、再生する動機となろう。これらの空間特質の再発見・再認識からはじめ、まず当該地域の人びとに地域振興の実践可能な方策を導出し、今後の内発的な地域再生の起点として、当該地域の持続可能な発展に活用していきたい。

## 注および参考文献

- 1) 中国が 1978 年に実施した経済改革政策であり、市場経済を導入して経済の自由化を進めるとともに、対外開放を行い外国との経済交流を活発にした。これにより、中国は急速な経済成長を遂げ、国際社会への統合が進んだ。
- 2) 潘崇涇編：潘氏宗譜、出版元不明、1924 年秋、潘崇涇氏が主導して編纂した余村の潘氏宗族の系譜である。筆者は現地調査において全 4 巻を発見し、それらを現代文に翻訳し本研究において参照した。
- 3) 蘇子懿、李敏他：余村誌、南京出版社、2021
- 4) 白松強：中国における農村祭祀の復興の取り組みと変容：河北省武安市固義村の李氏祠堂を事例として、日本農村生活研究会誌、P24-33、2014
- 5) 馮爾康著、小林義廣訳：中国の宗族と祖先祭祀、風響社 2017
- 6) 趙華富：徽州宗族の研究、安徽大学出版社、2016
- 7) 前掲 1) p. 3
- 8) 中国の明清時代の官制における正五品の官職である。
- 9) 明清時代における五品の官職の妻の封号である。
- 10) 息子の直系の家族を指す。たとえば、大房とは長男の直系の家族である。
- 11) 武漢市の漢口区は、中国の重要な商業港であり、特に 1920 年から 1940 年にかけて、商業の繁栄が頂点に達した。
- 12) 『潘氏宗譜』および潘氏子孫への聞き取り調査の結果を基に取りまとめた。
- 13) 前掲 1) p. 5
- 14) 帳簿である。
- 15) 木主：中国の祖先祭祀において祖先の魂が宿るとされ、日本では位牌に相当する祭具である。
- 16) 邪工：祭壇の材料を専門につくる大工の一種である。
- 17) 正龕：祭祀のためにつくられた台座のことで、祖先を祀るために使われる。台座の上に、祖先の木主が安置される。
- 18) 中国古代の宗法制度で、木主の左右の世代次の配列を指す。
- 19) 季孫は周の建国者である周文王の孫である。
- 20) 『潘氏宗譜』と現地調査によってまとめた。
- 21) 世代順の立ち席の順番である。
- 22) 紙銭とは神・祖先・鬼に捧げ燃やすことで祈願を行う器具である。
- 23) 「行輩歌」では、それぞれの文字が一つの世代を表す。潘氏宗族の「行輩歌」は、「大學崇正道 惟徳可光先 紹業遵家訓 修齊樂治平」である。
- 24) 伝統的な中国の灯籠である。
- 25) 中国の伝統的な祭りで、旧暦の正月十五日に行われる。
- 26) 中国の結婚式で贈られる、甘い菓子のことを指す。
- 27) 赤い布である。
- 28) 「囍」(双喜)の字が刺繍された赤い布である。
- 29) 花嫁の乗る輿である。
- 30) 形状は中国古代の貨幣の一種である元宝に似せた紙製の貨幣で、故人への供養や祈願のために使われる。
- 31) 日本語で「葉が散って根に帰る」という意味であり、故郷や本来の場所に戻ることを表す言葉である。
- 32) 前掲 1) p. 3

## 図の出典

- 1) 図 3-4 : 2024 年 2 月 23 日、潘惟岱氏撮影
- 2) 図 3-7 : 2024 年 1 月 15 日、潘惟墀氏撮影
- 3) 上記を除く全ての図については、筆者が撮影・作成



## 第四章：潘氏祠堂の建造過程と儀式にみる 文化的特質

## 1. はじめに

### 1.1. 研究背景と目的

筆者は第二章において、潘氏祠堂の建造当初の内部空間の構成要素、構成する材、装飾文様を再現し記録するとともに、その構造と空間特質を明らかにした[注1]。第三章において、潘氏祠堂の日常/非日常の「使い方」を再現し、いかにして空間演出がなされることで、同祠堂が意味ある空間として人びとに認識されてきたか、また、その空間演出とはいかなるものかを明確化することを目的とした[注2]。この前提に基づき、本章は建造過程と儀式の詳細に焦点を当てる。

潘氏祠堂においては、非日常生活のみならず、日常生活における積極的な利用がなされていた。祠堂は地域の文化的アイデンティティの象徴であり、歴史的伝承を反映する空間と考えられる。そのため、祠堂の外観や内部配置は宗族の使用上の要求に基づいて計画されたが、これが具現化されるのは建造過程を経てからである。したがって、建造過程と儀式には単なる物理的な建造物の構築以上の意味があり、文化的および社会的な背景が反映されていた。

本章の目的は、潘氏祠堂の建造過程と儀式の詳細を記録し、その中に内包された文化的特質を明らかにすることである。これにより、当該地域の資源と技術の利用方法の再認識だけでなく、宗族の分担や地域内関係の形成や地域文化の形成過程に対する理解を深めることができた。

### 1.2. 研究方法

本章における研究方法は以下の通りである。

- (1) 文献調査 『潘氏宗譜』や『余村誌』などの文献に基づき、潘氏祠堂の建造時期における人員の配置や資材・財力の分担状況を明らかにした。
- (2) 現地調査 2018年から余村における数回の実地調査に加え、2024年4月～2024年5月に一ヶ月間の実地調査を行い、潘氏祠堂の建造過程に関する情報を収集した。
- (3) 聞き取り調査 潘道煥氏を中心に、潘氏の古老たちに対して建造過程や儀式に関する聞き取り調査を行った。また、親子代々大工を生業としている孫邦才氏、李義牛氏と余徳永氏へのインタビューを通じて、建造の全工程や使用した工具についても詳しく聞き取り調査を行った。
- (4) 潘氏祠堂の建造過程と儀式にみる特質 上記の(1)～(3)の調査に基づき、潘氏祠堂の建造過程と儀式の詳細を記録し、その中に内包された文化的特質を明らかにした。

### 1.3. 先行研究

中国における祠堂の建造工程に関連する研究としては、以下が挙げられる。

夏淑娟が著した『徽州村族修祠緣由与祠堂建造過程探析』[注3]においては、徽州宗族が祠堂建造に熱心である理由や廊院式および天井式祠堂の建造過程が分析されている。しかし、祠堂建造の全過程を完全には記録されておらず、建造儀式についても言及されていない。林珍妮が著した『潮州祠堂建筑文化的探討』[注4]においては、潮汕祠堂の建造文化の内包や建造工芸の特徴が探究されており、また、潮汕祠堂の建造文化的特色および装飾工芸の芸術的特徴についても分析されている。

既存の研究は主に祠堂の建造様式や歴史的背景に焦点を当てているが、具体的な建造工程や儀式の詳細についてはあまり探究されていない。本章はこの空白を埋めることを目的としており、祠堂建造過程における文化や宗族の価値観を深く掘り下げるものである。対象地域の潘氏祠堂の建造過程を記録し、その文化的特質を考察した研究

や報告は現時点で見受けられない。

## 2. 建造の全工程

潘氏祠堂の建造の全工程は、概ね8段階に分けられる。以下にその各段階を詳述する。

### 2.1. 選地

潘氏が祠堂を建造するにあたり、まずは風水師[注5]に依頼する。このことは『潘氏宗譜』に何度も記されている。風水師の選地は、以下の原則に従っている(図4-1)。



図4-1 潘氏祠堂の風水図：文献調査および現地調査に基づいて作成したもの

まず、潘氏宗族では、覓龍[注6]といった風水の技術が重視されてきた。「覓龍」とは、地形や地勢を観察し、龍脈と呼ばれるエネルギーの流れを探し出すことを指す。風水では、龍脈が気の流れを決定する重要な要素とされており、覓龍は吉相の土地や建物の位置を見極めるために行われる技術である。明初において、余村は龍村と呼ばれていた。この村は東西に青龍山と黄龍山という山々があり、「両側に加護があり」と言われる地形に囲まれている。北部には横山があり、南部には天印山が位置している。現地の人びとは、この地形を「官帽椅」[注7]と呼んでいる。潘氏祠堂はあたかも一群の龍の間に位置しているようである。

次に、観水[注8]の視点からみると、風水における「観水」とは、水の流れや位置を観察し、その配置が環境や建物に与える影響を判断する技術を指す。水は「気」を集める重要な要素とされ、その存在や流れが運勢や富に関わると考えられる。このため、建造物の計画や立地において大きな役割を果たす。このことに基づき、横山を源流とする川が村を蛇行しながら流れており、豊富な水量は生命力の象徴とされた。潘氏祠堂の前には溪流がくねくねと流れ、西の前方には「生鉄塘」(図4-2) [注9]が広がっており、これは宝鉢を集める象徴ともされている。後ろには天曇湖(図4-3)、前には双

龍湖(図 4-4)が位置しており、この地形が余村の風水を形成している。



図 4-2 生鉄塘(鉄塊のある池)



図 4-3 天曇湖



図 4-4 双龍湖

さらに、方位[注 10]の視点からみると、潘氏は、天地の間に陰陽の調和があつてこそ万物の秩序が保たれると考えていた。北は陰、南は陽、西は陰、東は陽といった方位の特徴も、採光と北風を避けるという現実的な需要に合致していた。

かつて、この村では民居の東に祠堂を建造する習慣があつた[注 11]。余氏祠堂も当初は余氏の民家の東側に建造されており、潘氏祠堂もこの伝統を受け継いで同様の位置に建てられていた。

## 2.2. 用材計画

選地を確定するとともに、大木匠の棟梁と族長は用材計画をしなければならない。

潘氏の祖先は、「もし将来祠堂を建造する必要があるなら、木を買わず山を買え」と述べていた[注 12]。この教えに基づき、潘氏宗族は潘氏祠堂の建造に先立つ 50 年前から余村で山を購入し、準備を進めていた。「潘氏墳塋祭田備考記録」[注 13]によると、潘氏宗族は 6 つの山を所有しており、それぞれ「黄冲眼上山」「下至山」「四石仰山」「蘇家山」「西岡仰山」「南辺山」である。これらの山には多くの柏木、沙木、松木などの樹木が植えられた。これらの樹木は無断で伐採することが厳しく禁止されており、薪のための伐採も厳格に管理されていた。薪用の伐採は 5 年ごとに行うというサイクルが定められており、それ以外の期間に勝手に伐採することは許されなかった。さらに、高さが 10 メートル以上、幹の直径が 30 センチメートル以上に達した樹木については、祠堂の建造という特別な目的以外で使用することが禁じられていた。このように厳格な規制を設けることで、祠堂の建造に必要な資材の質と量を長期的に確保していたのである。

このような方法は、潘氏の祖先の長期的な計画と資源管理の思想を示している。木材のみを購入することは当面のニーズを解決できるが、山を購入することで持続的な木材供給が可能となり、さらに山の他の石材資源や水源などを建造プロジェクトやその他の用途に利用することができる。このアプローチは、当面の建造ニーズを満たすだけでなく、自然資源の総合的利用と持続可能な発展の理念を反映しており、将来の可能性を考慮した計画である。

族長は大木匠の棟梁と共に山に登り、実地での調査を行っていた。このことにより、実際の状況を直接確認し、より適切な資源管理が可能となる。族長は細部まですべての要求に沿えるよう、大木匠の棟梁と数十回にわたる議論を行い、また宗族の会議を開いて祠堂の様式や材料について検討した。これにより、この過程には図面は存在せず、柱の太さに基づいて祠堂の高さを決める方式が採用されていた。

その後、大木匠の棟梁は弟子たちと共に再度山に赴き、木は「木材應按其生長方向使用」（訳文：生育の方位のままに使い）と唱えながら、木材の使用場所を慎重に考慮し、それぞれの木に使用目的に応じたマークを付けた。通常、柱用の木には「○」などの丸い印、梁用の木には「△」などの三角形、さらに装飾用の木には「×」などの斜線の印が彫られたり、墨で書き込まれたりした。こうしたマークにより、建造の時の配置ミスを防ぎ、材料の効率的な使用が可能となった。また、木材が育った方位を尊重することで、木材の自然のエネルギーや特性を最大限に活用し、建造物の耐久性や安定性を向上させるとされている。また、木が育った方向を尊重することは、自然の秩序や神聖さを尊重することと見なされる場合もある。

### 2.3. 材料と置場の準備

まず、工匠たちは建造予定地の前の田に大規模な作業場を設置し、木材の保管と加工を行う場所とした。大木匠たちは棟梁が残した印に基づき、冬季(11月から翌年2月)に木材を伐採した。これは、木材の含水量が低くなるこの時期が、後の乾燥処理に適しているためである。伐採の際には、工匠たちが木材の生育方向に特に注意し、繊維の整合性を保つことで、木材の自然特性と構造的な強度を確保した。

伐採が完了した木材は、山中で適切な長さ加工された後、山道を通じて山麓まで運ばれた。運搬作業では、工匠たちは滑車や木製のソリなどの道具を活用し、高効率で木材を山から搬出した。山麓から作業場までの最終運搬には、主にロバ車が使用され、大型の木材も安全に運ぶことが可能となった。このように精密に設計された運搬方法により、人工の負担が大幅に軽減されるとともに、木材の輸送が順調に進められた。運搬された木材は、作業場で乾燥処理を施される。まず、自然乾燥法が用いられ、木材を通風の良い日陰に数ヶ月から1年程度保管することで、急激な乾燥による割れや変形を防いだ。さらに、高品質な木材を迅速に使用する必要がある場合には、低温の窯を利用した人工乾燥法が採用され、乾燥期間が短縮されるとともに、建設スケジュールへの対応が可能となった。

潘氏宗族は、潘氏祠堂の建造において、自家専用の窯場を所有していたため、瓦やレンガなどの建材を現地で調達することができた。他の宗族に比べて建材の供給が非常に便利であり、これが建設作業の効率化に寄与したと言える。さらに、孫邦才氏への聞き取り調査によれば、潘氏祠堂の建造期間中、多くの村民が自主的に協力し、基礎工事に用いた砕石を集めたという。潘氏族長は村民たちの協力に感謝の意を示すため、建造現場の前で米を配布した。これは、中国文化における「礼尚往来」[注 14]の精神を体現するものとされている。

## 2.4. 地盤の施工

施工の初期段階では、大木匠が施工地点を測量し、木杭や測量棒を用いて地盤の位置と深度を決定した。この際、土壌条件に関する地質調査も併せて実施された。

続いて、泥瓦匠が基礎の掘削作業を開始した。作業には、伝統的な農業用具であるシャベル(図 4-5)、クワ(図 4-6)、バケツが用いられ、基礎溝が丁寧に掘削された。掘削の深さは一般的に約 1 m であり、掘り出された土は施工現場の東側に一時的に積み上げられた後、再利用された。

掘削作業が完了すると、基礎溝の底には碎石が敷かれ、その上に 10 センチ厚のもち米漿が注ぎ込まれた。もち米漿は、煮たもち米と消石灰を混ぜたものである。この作業では、碎石ともち米漿を三層に重ね、それぞれの層を木槌や鉄槌で打ち固めることで地盤の強度と安定性が高められた。また、地表面には当該地域の黄土と生石灰を混ぜた材料が使用され、さらに安定性が強化された。

建設作業では四角い木材と柱が使用され、作業中には「提起来、夯！」(訳文：持ち上げろ、叩け！)という掛け声が響き渡った。門堂、享堂、寝堂の床の高さはそれぞれ異なり、黄土を段状に積み上げることで、各堂の間に階段一段分ほどの段差が設けられている。なお、寝堂の床が最も高い位置に配置されている。



図 4-5 土を掘るための鉄製のシャベル



図 4-6 土を耕し掘り返すクワ

## 2.5. 骨組みたて

一般的には、風水師によって選定された吉日に梁架の組み立てが始められる。潘氏祠堂は「三進」と呼ばれる伝統的な建築配置に基づいて設計されており、具体的には「三進」の構造における梁と柱の本数は以下のようにになっている。

「一進」の構造は、月梁 2 本、穿梁 8 本、前檐柱 6 本、中柱 6 本、後檐柱 6 本から成り立っている。

「二進」の構造は、大梁 4 本、穿梁 14 本、前檐柱 4 本、前金柱 4 本、中柱 2 本、後金柱 4 本、後檐柱 6 本を含む。

「三進」の構造も同様に、大梁 4 本、穿梁 14 本、前檐柱 4 本、前金柱 4 本、中柱 2 本、後金柱 4 本、後檐柱 6 本で構成されている。

これらの構造材は、まず「木材の切断」「鉤掛け」「基準線引き」「溝削り」「ホゾづくり」などの工程を経て準備される。木材の加工は慎重に行われなければならない。正確に組み立てるためには事前加工が重要である。

まず、第一段階の材料選択については、おおよそ余村地元産の沙木や柏木などが優先的に選ばれる。また、選材を行う際に、これらを用いて築き上げる潘氏祠堂の棟梁のマークをも参照し、原料木材の断面直径・全長などを測定し、最も合っている原料木材を選定する。この第一段階の選定が完了した後、大木匠たちは木材を木馬[注 15]

に載せ、不要な部分を裁断して次の段階へと移行する。

第二段階の成形加工には、材料の「反転調整」や「墨塗り」、「木材の挽き」、「打ち割り」、「削り削り」などの加工手順がある。材料の反転調整は骨組みつくりの成形において重要な工程であり、大木匠たちは木材をいろいろと反転させながら、木材の反りの方向を慎重に確認する。この反転作業は、木材の性能を最大限に引き出すために欠かせない工程である。また、成形加工には、墨塗りが含まれ、墨線(図 4-7)を正確に引くことが求められる。鋸(図 4-8)や斧(図 4-9)、鉋(図 4-10)を使用して木材を加工する工程も重要である。その中で、最も重要なのがホゾ加工である。ホゾ加工では、部分的な組み立てが必要であり、構造の接合状態を確認することが重要である。鑿、斧、鋸、ハンマーなどはホゾ加工の工程においてさまざまな役割を果たす。



図 4-7 切断位置を示す墨線



図 4-8 木材切断用の鋸



図 4-9 木材を切り出すための斧



図 4-10 仕上げ用の鉋

次に、祠堂の施工現場で梁と平座を鎌継ぎでしっかりと固定する。その後、平座を平座石に合わせ、梁の上にそれぞれ2本のロープを巻きつけて準備をする。作業を手伝う工匠たちは2人1組でロープを持ち、同時に他の作業者は梁と平座の周囲に待機して、協力し合いながら作業を進める。大木匠たちは梁の南側に立ち、「1、2、3～」と号令をかけ、全員で一斉に梁を引き上げる。平座と地面との角度が約60度になった時、2組の叉棒[注16]を用いて梁を支え、叉棒を押し上げながらロープを引いて平座を垂直に立てる。続いて、平座と平座石の位置を再確認し、梁の東西方向の揺れを防ぐために、叉棒が交差する位置に石の重りをかけ、梁を安定させる。この叉棒はそのまま残し、後続の作業が完了するまでの支えとして使用する。梁と平座の取り付けが終了した後、次に柱と棟木を取り付ける工程に進む。まず、大木匠たちは梁の上に替木[注17]と柱を取り付ける。次に、棟木的一端を替木に接続し、もう一端を柱に取

り付け、柱の下部を基石に据える。この方法で、東西両側の柱と棟木を取り付けた後、他の棟木を梁の間に一つずつ取り付ける。

骨組みの取り付けが完了した後、大木匠たちは壁の土台の基準線と梁から吊り下げた重りの位置を基に、骨組みの各部材の適切な位置を検査し、必要に応じて調整する。この作業は「撥正」[注 18]と呼ばれる。

## 2.6. 壁づくり

壁をつくり始める際にも、風水師に縁起のいい日を決めてもらう。潘氏祠堂の壁の下部は長さ 700mm、幅 300mm、厚さ 150mm の「滾磚」という青煉瓦で、壁の上部は、長さ 280mm、幅 50mm、厚さ 20mm の「板磚」という煉瓦を積み上げてつくられている。南京の梅雨時期の防湿対策として、二種類の異なる煉瓦が組み合わせてつくられている。この滾磚は高い耐水性と防水性を兼ね備えている。煉瓦同士の隙間には、余村産の消石灰を水で溶かし、細かく裁断した藁やもち米などを混ぜ合わせた材料が使われた。日本建築の漆喰に相当するこの材料は煉瓦の固定に使用されるだけでなく、苔の発生を抑えや風化を防ぐために壁の表面にも使用された。また、享堂の壁の内部は空洞であり、中に藁や紙などの吸音材を詰めることで静けさを保ち、さらに重要な書類、銃器、金などを非常時のために保管するための隠し場所としても利用された。

ここで特に取り上げたいのは、徽派建築に特徴的な馬頭牆(図 4-11)である。馬頭牆は、風火牆、封火牆または防火牆とも呼ばれ、両側の山牆より高い部分に位置する壁垣を指す。その形が馬の頭に似ているため、「馬頭牆」と名付けられている。この壁は、防火機能を持つだけでなく、美観も備えている。まず、建物の両端または中央に壁の基礎を設置する。馬頭牆の重量を支えるために、この基礎は通常の壁よりも幅広く、その安定性は馬頭牆全体の安定性に直結している。次に、屋根の傾斜に基づいて、馬頭牆部分を段階的に積み重ねていく。壁の上部は斜面の長さに応じていくつかの段階に分かれ、典型的な階段状の輪郭を形成する。壁の頂部は青瓦で覆われている。この設計は建物の防水機能を強化するだけでなく、美観も高めている。



図 4-11 潘氏祠堂の馬頭牆

## 2.7. 屋根葺き

壁の構築が完了すると、「封頂」[注 19]と呼ばれる屋根の施工が行われる。屋根は骨組みの上に保温層と防水層を設け、二重の役割を果たす構造としている。まず、沙木と柏木を使用して屋根の構造を組み立てる。この骨組みには、「大梁」(棟木)、「横梁」(軒桁)、「斜梁」(垂木)が含まれ、これらの木材が屋根全体の骨組みを形成し、屋根の

重量を支える。

次に、木骨組みの上に「望磚」を敷設し、追加の支えと断熱効果を与える。望磚の上には葦を敷く。この葦は屋根の保温性を高めると同時に、湿気が木構造に浸透するのを防ぐ。その後、青瓦を敷く。青瓦は一定の規則に従って敷設し、各瓦の間に適切な重なりが必要である。これにより、雨水が屋根の下に浸透しないようにする。青瓦の敷設時には、通常、瓦釘や瓦鉤を使用して瓦を木骨組みに固定し、安定性と耐久性を強化する。屋根葺きが完了した後は、装飾作業に進む。

## 2.8. 室内工事

室内工事は、空間仕切り壁の構築、方磚の敷設、壁面と天井板の装飾、門窓の設置、祭祀用品の装飾、そして家具の配置など複数の工程から成り立っている。

### 2.8.1. 空間仕切り壁の構築

空間仕切り壁の構築は、主に空間を仕切るためのものであり、構造を支えるための壁ではない。かつては、干し煉瓦で築かれることが一般的であり、雨水に濡れないように屋根を先に完成させてから作業が行われた。空間仕切り壁の施工には専門の工匠は必要なく、宗族自身が手がけることもある。宗族内の大人と子どもが共に、基礎工事の際に出た切土を利用して干し煉瓦を作成した。材料の調達と施工が行われ、乾燥した煉瓦を積み上げることで壁が形成される。

### 2.8.2. 方磚の敷設

方磚の敷設は、室内空間の機能性と美観を高めるために重要である。通常、地面を平坦に整えた後、適切な基礎をつくり、その上に方磚を敷設する。また、潘氏祠堂の門堂と寝堂は 330mm×330mm×60mm の規格の方磚が水平に敷き詰められている。享堂は 400mm×400mm×80mm の方磚である。方磚は、耐久性と清掃のしやすさを考慮して選ばれ、目地の間隔や貼り付けに注意して慎重に施工される。特に、湿気の影響を受けやすい部分では、防湿層を設けることが推奨される。

### 2.8.3. 壁面と天井板の装飾

壁面と天井板の装飾は、祠堂の内部空間に美しさを与えるために行われる。壁面には、伝統的な装飾文様や浮彫りが施され、祠堂の文化的な意味を反映させている。天井板の装飾には、木材や漆喰が用いられ、細部にわたり手づくりの装飾が施される。彫刻技法は、拓本作成、粗彫り、仕上げ彫りの三段階から成る。彫刻職人がこの過程を担当する。まず、文様を選定または創作し、拓本を取る。代表的な文様には蓮華や蝙蝠などがあり、浮彫りや透彫りが主である。彫刻の際には、槌や刀を使用して初期彫刻を行い、文様の大まかな形を形成する。最後、仕上げ刀で角を磨き、文様の線を滑らかにし、精巧で繊細な仕上がりにした。これにより、祠堂全体の雰囲気が一層引き立てられた。

### 2.8.4. 門窓の設置

門窓の設置は、祠堂の出入り口と採光、通風を確保するために行われる。伝統的なデザインの門窓は、木材や石材でつくられ、装飾的な要素が取り入れられた。設置の際は、開閉のスムーズさと耐久性を考慮して、精密な加工と取り付けが行われた。

### 2.8.5. 祭祀用品の装飾

祭祀用品の装飾は、祠堂の主な用途である祭祀に対応するための重要な工程である。祭壇や木主の棚、香炉などの祭祀用品が配置され、これらは儀式を支えるために細心の注意を払って装飾された。これには、金箔や漆塗り、伝統的な装飾品の取り付けが含まれる。潘氏祠堂に置かれる木主の材料は余村の柏木で、高さ約 26cm、幅約 10cm、厚さ約 2 cm の木板に縦書きで氏名と経歴が書かれていた。木主は、人が死去した後に

直系の三代以内の家族が同村の「邪工」[注 20]に制作を依頼し、死者の一周忌に族長が寢堂の正龕[注 21]に特定の順序で特定の場所に置いた。

### 2.8.6. 家具の配置

最後に、室内に家具が配置される。家具は、祠堂の使用目的や内部の空間配置に応じて設置される。具体的には、松木でつくられたテーブルと椅子が享堂に配置され、日常生活で使用されることを目的としていた。また、稲藁で編まれた敷物も設置されており、祭祀や儀式に対応するための実用性と快適さが考慮されていた。このようにして、機能的で美しい空間が完成される。各工程が丁寧に行われることで、祠堂の内部空間が整えられ、宗族の儀式や日常生活に対応できるようになっていた。

## 3. 建造の儀式

### 3.1. 動土儀式

地盤が確定した後、工事の順調と安全を祈願するために、潘氏の族長である潘崇涇が動土儀式を執り行った。潘氏の族長が数回土を掘り、その後、潘氏宗族の人びとで深さ1mほどの古い黄土層まで掘り進む。さらに、地盤を掘り上げ、土を運び出して地盤を平らに整えた。起工式には吉日良辰を選ぶが、潘氏は天が明るくなる時である寅時を選んだ。この時間帯は、伝統的に新しい事を始めるのに適した時間とされている。

祠堂が完工するまでの間、毎月一日と十五日には香を焚き、祠堂建造の安全を祈願する祭祀が定期的に行われた。この祭祀では、大木匠の棟梁や宗族の代表が参加し、祖先や土地神に感謝を捧げる儀式が中心となっていた。特に、祭壇を設けて供物を捧げ、工事の進捗に応じて祝福と祈願を行うことが一般的であった。祭祀が終了した後、土地神の像を潘氏民居の供桌に迎え入れることで、土地神への感謝の意を示した。この像の配置は、土地神が工事の進行を見守り、守護することを願う重要な儀式の一部である。

### 3.2. 上梁儀式

潘氏祠堂の建造における重要な儀式である棟上げ式においては、大梁には大きくて長い、硬くて質の良い木材が選ばれた。寢堂には柏木が使用されている。棟上げ式には、大木匠や小木匠、泥瓦匠などの主要な施工者を招待した。

棟上げ式の始めにあたり、まず大木匠の棟梁が主導し、三本の香を手各工匠や宗族の祖先、土地神などに拝礼を行った。この儀式は、工事の安全と順調な進行を祈願するもので、神聖な始まりを意味する。

次に、大梁に「披紅」の作業を施す。族長は大梁の中央に赤布を結びつけ、赤い絹を巻きつけ、赤い紙を貼りつけ、「八卦図」を貼りつけた。黒い毛筆で「紫氣東来」（訳文：紫の運気が東からきた）、「上梁大吉」（訳文：棟上げを祝う）、「姜太公在此」（訳文：姜太公ここにあり）といった文字を書いた。赤く染めた箸で繫げ、一連の「康熙」「乾隆」の銅銭を垂らした。これは招財進寶、五穀豊穰、四方安全、邪悪を避ける祈りの意味が込められている。

そして、吉時が到来すると、爆竹を鳴らした。大木匠の棟梁は「福」を象徴する斧と、友人から贈られた鯉（「余」に通じるもの）を祠堂の一角に慎重に置いた。この行為は、幸福と吉祥を象徴し、建造の無事と豊かな年を祈願するものである。特に、「福」と「斧」の発音の類似性、「鯉」が余裕や富裕を意味することから、これらの象徴は祠堂建造において重要な文化的・精神的な意味を持つと考えられる。潘氏宗族は三牲（豚、牛、

羊)と五果(リンゴ、ミカン、スイカ、文旦、ブドウ)を用意した。これらの果物は色鮮やかなことから生気に満ちた日々や吉祥を象徴している。さらに、吉時に赤布、五穀(稲、麦、黍、豆、粟)、饅頭、餅、粽、糖菓などを大梁の前の祭壇に置き、魯班を祀り、香を焚いて拝礼した。そして族長が酒杯を持ち上げ、大梁が上がる前に白酒を梁頭、梁腰、梁尾にかけ、祝詞や歌を歌った。「澆梁頭、澆梁頭、財似流水永不断。澆梁腰、澆梁腰、此拋宝地聚財宝。澆梁尾、澆梁尾、子孫做官清如水。」(訳文：梁頭に酒をかけ、梁頭に酒をかけ、財は流水のごとく永遠に絶えない。梁腰に酒をかけ、梁腰に酒をかけ、この場所に宝地が集まる。梁尾に酒をかけ、梁尾に酒をかけ、子孫は役人になっても清い水の如く)。この行為は祭酒と呼ばれ、地久天長を象徴していると言われている。棟上げ式では、大梁の東端が先に上がり、西端より少し高くなる。これは東が「青龍座」であり、西が「白虎座」であるため、青龍が白虎より高いからである。司会者は「上梁文」を朗読し、その後に「上梁歌」を歌う。「大梁好比一条龍、平平穩穩往上行。升至半路停一停、親朋好友来挂紅。」(訳文：大梁は一匹の龍のように、平穩に安定して上昇する。途中で少し停止すれば、親友が赤い布を掛けて来る)。この時、宗族が前に出て大梁に赤い布を掛けた。赤い布を掛けた後、大梁は引き続き上昇し、規定の位置に安置されると、再び爆竹が鳴り響いた。大工は五穀、糖菓、餅、包子、饅頭などを投げた。同時に、次の歌を歌う。「饅頭拋到東、買田買一冲。饅頭拋到南、發財开當舖。饅頭拋到西、代代穿朝衣。饅頭拋到北、全家都享福」(訳文：饅頭を東に投げ、田地を買うなら、一続きの田地を買う。饅頭を南に投げて、お金を儲けて質屋を開く。饅頭を西に投げて、代々朝服を着る。饅頭を北に投げて、家族全員が恵まれる)、「众親接宝快点来、八路神仙都有宝。親友接回家中去、来年一定發大財」(訳文：親戚・親友の皆はすぐに宝物を取りに来てください。八路の神々は皆宝を持っている。親戚や親友が宝を家に持って帰れば、来年は必ず大きな財を成す)。村の人びとはどっと群がって、品物を奪い合う。これを「接宝」[注 22]と呼ぶ。棟上げ式が終わると、時はすでに正午になっている。太陽が大梁に照り付けることを「晒梁」[注 23]と呼ぶ。潘氏は親戚、親友や棟梁たちを招いて酒宴を開き、楽しみを共有した後、帰途につく。

### 3.3. 謝土儀式

祠堂の建造が完成した後、謝土儀式が行われる。この儀式は吉日を選んで実施され、土地神を祀るために工匠たちを招待する。儀式の開始にあたり、まず外に出て土地神に拝礼を行い、その後、謝土の準備として赤布に八卦を描き、そこに五穀や斧、尺などの道具を配置し、梁の中央部分に置いた。この配置は、祠堂の安全と繁栄を祈願するためのものである。

次に、土木石の三師[注 24]の儀式が行われ、建造に貢献した工匠たちに対して感謝の意が示される。この儀式では、工匠たちの努力と技術に対する感謝の気持ちを表すとともに、建造の成功を祝う。

さらに、宗族の中で「好命人」[注 25]が祠堂に招かれ、祈福の儀式が実施された。この儀式においては、宗族の幸福と安全を祈願し、祠堂の建造が宗族にとっても意義のあるものであることを確認する。謝土の儀式が終了した後、建造工事に関わった工匠たちと地域の人びとに「紅包」[注 26]が配られ、儀式の最後には爆竹を鳴らして祝賀した。爆竹を鳴らすことで、儀式の成功と祠堂の繁栄を祝うとともに、地域社会との結びつきを強化する目的も持っている。

## 4. 建造時期と費用

潘氏祠堂は、潘氏十世の子孫である潘崇涇が、父親の潘学璜の遺志を実現するために提案し、1921年から1924年にかけて潘氏の人びとと共に作り上げたものである。『潘氏宗譜』によれば、祠堂の建造時の分担は次の通りである。潘崇涇と潘崇湘が総責任者であり、潘崇淮が財務を管理し、潘正桐、潘正楹、潘正棋、潘正樵、潘道炘、潘道煊の6人が監督を担当した。建造費用は約12000銀元であり、その内訳は三房の崇涇が約5000銀元、三房の正樵が約4800銀元、三房の崇淮が約300銀元、四房の崇湘が約600銀元を出資した。

## 5. 建造過程と儀式にみる文化的特質

本章では、中国江蘇省南京市余村に所在する潘氏祠堂の建造過程および儀式に内包された文化的特質を解明した。その調査および考察を通じて、以下の知見を得た。

### 5.1. 図面のない建造方式と師弟制による技術の継承

前述の通り、潘氏祠堂の建造には主に地元の職人が携わっていた。この建造過程は、伝統的な工芸技術の精緻さを示すだけでなく、地域内での協力と技術の継承を反映している。建設過程には、大工、小工、泥瓦工など、多様な職人が関わっており、その中でも大工は建造物の重要な職であり、建造工程全体の中心的な役割を果たしている。潘氏祠堂の建造は、詳細な図面に依存することなく、経験豊富な大工が現場の実情に応じて、口伝や熟練の技術を駆使して完成させている。この方法は、伝統工芸の柔軟性と職人の高度な技術を象徴している。建造過程においては、潘氏一族が大工と何度も詳細な議論を重ね、大工の技術に対する深い信頼と尊重を示した。木製部品の制作や彫刻などの工程は、主に師弟制を通じて口伝で技術が継承されてきた。この方法により、技術は世代を超えて受け継がれながら、施工過程においても絶えず最適化と改良が行われる。師匠は、技術だけでなく、職人としての心得や材料の選定基準、加工特性、そして作業の細部に至るまでのノウハウを弟子に伝授した。これらの知識と技術は、弟子が現場での実践を通じて身につけ、さらに自らの工夫を加えながら発展させていった。この継承過程は、潘氏祠堂のような複雑かつ精緻な建造物を支えるための柔軟性と創造性に富む伝統工芸の基盤となっている。技術の継承は、口伝による直接の指導と実際の作業を通じて行われ、各世代の工匠たちは前の世代からの知識を基に、新たな技術や方法を加えることで、伝統的な技術を進化させていく。

### 5.2. 地域材料の活用と工夫

建造物の材料は主に現地で調達された。具体的には、余村で採取された柏木や沙木が優先的に使用され、レンガも地元の黄土を焼成してつくられた。また、最も近くにある材料が優先的に使用され、用途に応じて他の材料と混合することで、地域資材の利点が最大限に活用された。

### 5.3. 建造過程における分担と協力

潘氏祠堂の建造は、多方面からの協力によって成し遂げられた。この分担と協力の体系は、祠堂の順調な建造を確保するだけでなく、地域社会の結束力を一層強化した。選地、材料の準備、地盤の施工、骨組みの立て方から装飾に至るまで、各段階において専門的な技術を持つ工匠が主導し、宗族内部でそれぞれの役割が明確に分担された。また、地域の住民も積極的に必要な支援と協力を提供した。

特に石材の収集と運搬の段階では、村全体の住民が自発的に参加し、積極的に助け

合った。さらに、隣人同士の情報共有を通じて技術や資源の効率的な調整が行われた。たとえば、誰がどのような技能を持っているかが理解されており、これが重要な時に十分に活かされた。具体的には、当時の主要な大工は余氏家族によって紹介されており、地域内部の互助精神がよく表れている。

#### 5.4. 自然との調和

選地の際には、環境との調和が非常に重視された。潘氏はまず大工を招き、現地の環境や既存の材料の状況を詳細に確認した上で、祠堂の設計と建造方法を決定した。自然環境との調和を保つために、建造材料の選定には細心の注意が払われ、木材の採集、運搬、乾燥などの各過程が慎重に行われた。特に、木材の乾燥プロセスは、材質の劣化を防ぎ、長期的な耐久性と安定性を確保するために徹底して管理された。

また、木材の使用においては、再生可能な地域資源を活用することで、自然資源の浪費を抑えた。さらに、建造に伴う廃材も可能な限り再利用する工夫が施され、環境負荷を最小限に抑える努力がなされた。こうした方法によって、祠堂は自然環境との一体化が実現し、持続可能かつ地域資源を最大限に活用した建設が行われた。この結果、祠堂は地域の風景と調和した美しい姿を保つことができた。

#### 5.5. 祖先と神との共存を重視した祠堂建造の儀式

祠堂の建造過程において、人びとは祠堂が人と祖先、土地神が共存する特別な場所であることを深く尊重していた。見えない世界と共生し、自らの生活空間を築くために、様々な儀式が極めて重要であると考えられていた。そのため、人びとは祠堂の建設前、棟上げの際、さらには完成時にも必ず儀式を行った。さらに、祠堂の建設が終わってからの3年間、毎月の初一と十五には必ず香を焚き、祖先に祈りを捧げ、安定した環境と平穏な空間を祈願した。このような儀式を通じて、人びとは現在の安寧を求めるだけでなく、未来の生活がより豊かで幸福なものになることを願ったのである。

### 6. おわりに

本章では、潘氏祠堂の建造過程と儀式における文化的および技術的特質を明らかにすることを目的として、その詳細を記録し、分析を行った。潘氏祠堂の建造は、単なる物理的な構築以上の意味を持ち、宗族の文化的背景や地域的關係、技術的な伝承が反映されていることが分かった。建造過程における協力と分担、伝統的な技術の活用、地域的な關係の構築、自然との調和、そして儀式の重視は、潘氏祠堂の文化的特質を高める要素であった。特に、宗族の結束力や地域社会の一体感を高める役割を果たしていたことが明らかになった。

調査・考察の中では、建築における職人技術の伝承方法や地域的關係性が築かれる過程にも注目し、具体的な事例を基にその文化的意義を確認した。本研究を通じて、潘氏祠堂の建造過程が持つ文化的な意義を再認識することができた。これにより、当該地域の文化形成過程に対する理解が深まり、今後の研究においても重要な視点となるだろう。

## 注および参考文献

- 1) 李敏、青木宏展、植田憲：中国江蘇省南京市余村の潘氏祠堂の建造当初の構造とその空間特質、デザイン学研究(2024年10月20日、掲載決定)
- 2) 李敏、青木宏展、植田憲：中国江蘇省南京市余村における潘氏祠堂の「使い方」にみる空間演出、デザイン学研究(2024年10月20日、掲載決定)
- 3) 夏淑娟：徽州村族修祠緣由与祠堂建造過程探析、安徽農業科学、第44卷 第3期 P202-203、2016
- 4) 林珍妮：潮州祠堂建筑文化的探討、參花、第8期 P146-147、2016
- 5) 風水師とは、風水の知識と技術を持ち、建物の位置や設計、環境などを占い、調整する専門家のことを指す。
- 6) 「覓龍」は潘氏宗族が祠堂の選地において最も重視する過程の一つである。潘氏は「覓龍」を通じて、自然環境との調和が取れた吉祥の地を探し出し、祠堂が天地のエネルギーを取り込むことで、宗族文化と精神の象徴となることを目指した。
- 7) 中国の伝統的な椅子で、前が低く、後ろが高い形状をしている。背もたれが高く、肘掛けが付いているのが特徴である。そのデザインは、古代の官職者の帽子に似ていることから名付けられた。
- 8) 潘氏にとって、「観水」は自然の恵みを楽しむ、宗族の繁栄と安定を象徴する祠堂を建造する上で欠かせない要素であった。
- 9) 余村の池塘の名前で、その中心に巨大な鉄が残っていることに由来している。「生鉄」は未加工の鉄を指し、「塘」は池や沼の意味である。
- 10) 風水における「方位」とは、建物や部屋の方位や向きを決定することを指す。風水では、建物の向きが運勢や気の流れに大きな影響を与えるとされており、方角の良し悪しを判断することが重要視される。適切な方位を選ぶことで、住まいや建物に良い影響を与えると考えられている。
- 11) 2024年4月25日に潘道煥氏の聞き取り調査による。
- 12) 2017年9月23日に潘惟墀氏の聞き取り調査による。
- 13) 潘氏宗譜に収録されている。「黄冲眼上山」「下至山」「四石仰山」「蘇家山」「西岡仰山」「南边山」は、かつて潘氏が購入した山々であり、現在一部は名称が変更されている。
- 14) 礼尚往来とは、中国の伝統的な思想や文化に基づく概念で、「礼をもって接すれば、礼が返ってくる」という意味を持つ。これは、人と人との関係において、礼儀や贈り物などを相互にやり取りし、相手に敬意を示すことで、良好な関係を築くことを重視する考え方である。
- 15) 木馬は木工職人が木材を加工する際に使用する道具の一つである。主に木材を固定し、安定させるための作業台や治具の役割を果たす。木馬は堅牢な構造を持ち、切断、彫刻、削りなど、さまざまな木工作業を効率的かつ安全に行うために用いられる。
- 16) 叉桿とは、伝統的な建築で使用される二股に分かれた棒状の道具で、主に建物の梁や柱を支えるために用いられ、交差させて使用することで安定性を確保する。
- 17) 梁と柱を接続するための中間材であり、梁の上に取り付けられ、棟木の取り付けに使う。
- 18) 「撥正」とは、建物や物の位置や方位が不適切な場合に、それを正しい方位や位置に調整することを指す。風水では、適切な方位に調整することで、気の流れを改善し、環境のバランスを整え、運氣や安定性を向上させると考えられている。

- 19) 建造物の施工において、屋根や最上部の構造を完成させる工程を指す。
- 20) 邪工：祭壇の材料を専門につくる職人の一種である。
- 21) 正龕：祭祀のためにつくられた台座のことで、祖先を祀るために使われる。台座の上に、祖先の木主が安置される。
- 22) 宝を受け取ることである。
- 23) 大梁を晒すことである。
- 24) 建造工事に関わった主要な工匠たちである。
- 25) 好命人とは、運勢が良いとされる人のことを指し、主に四代同堂であり、配偶者に先立たれることなく家族が揃っている人を意味する。こうした人物は、健康や家庭運に恵まれ、家族が繁栄していると考えられる。
- 26) 祝儀袋である。祝事や特別な機会に贈られるお金を入れた赤い封筒のことを指す。

### 図の出典

- 1) 図 4-2、 図 4-3、 図 4-4：張明氏撮影
- 2) その他の図：筆者が撮影・作成



## 第五章：潘氏祠規にみる宗族関係とその特質

## 1. はじめに

### 1.1. 研究背景と目的

本章は、中国江蘇省南京市余村に位置する潘氏一族の祖先を祭祀するための建造物である「潘氏祠堂」(図 5-1)を取り上げた調査・研究である。



図 5-1 潘氏祠堂 (2021 年 3 月 6 日撮影)

潘氏祠堂は、中国江蘇省南京市余村における重要な文化遺産として、その建造様式や利用方法に地域性や歴史性が反映されるだけでなく、豊かな文化的内包をも担っている。これまでの章では、主に同祠堂の文化的特質に着目し、建築構造、空間秩序、日常と非日常における使い方を検討してきた。これらの分析から、潘氏祠堂の建造様式や空間配置は偶然ではなく、潘氏宗族の人びとの規則や秩序に大きく依拠していることが明らかになった。ここで言及されている潘氏宗族内部の規則が明文化されたものが、「潘氏祠規」(図 5-2)に他ならない。

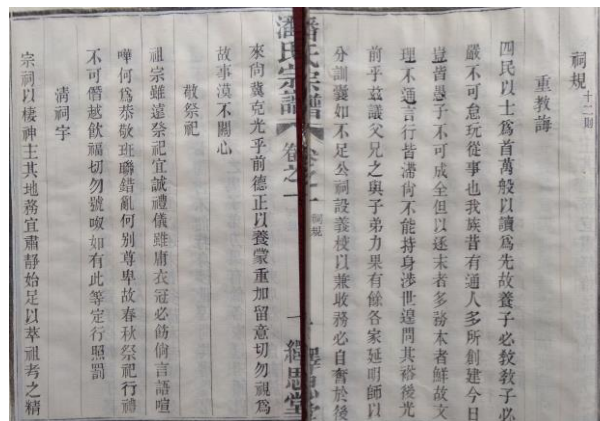


図 5-2 余村の潘氏祠規の一部

本章では、これを踏まえ、研究の視点を潘氏祠堂の側面から潘氏祠規へとさらに展開させる。さらに、祠規を通じて明らかになる潘氏宗族内部の多層的な関係性や秩序構造を重点的に分析する。本章の視点の転換により、潘氏祠堂の文化的特質をより深く理解するとともに、宗族社会における内部運営と伝承の仕組みについて新たな視座を提供することを目指す。

本章では、潘氏祠堂に密接に関連する「潘氏祠規」を宗族秩序の規範として位置付け、

その内容を分析することで、潘氏宗族における多層的な関係性とその特質を明らかにすることを目的とする。また、これらの関係性が潘氏祠堂の建造や利用にどのように反映されているかを考察し、潘氏祠堂の文化的特質を再認識することで、宗族文化の維持と伝承の重要性を示すことを目指す。

## 1.2. 潘氏祠堂その祠規

潘氏祠堂は1921～1924年にかけて建設されたものである。1912年に、南京は中華民国の首都となったが、当時は大きな政治的・社会的混乱が生じ、新興政権や外部勢力の影響を受け、宗族の秩序は大きな変容を余儀なくされた。こうした状況下、宗族秩序を維持するために、それを明文化した祠規を制定する動きがあった。本研究で取り上げる潘氏祠規は、その具体例の一つである。

潘氏祠堂における歴史的な建造物としての価値は、有形の祠堂のみに止まらない。その背後にある無形の宗族関係も含まれていると考えられる。なお、潘氏祠堂の場合、祠規は、かつては、祠堂内の享堂に掲出にされており、潘氏宗族の管理システムを今日に伝える重要な文献である。

## 2. 研究方法

本章における研究方法は下記の通りである。

(1) 文献調査 潘氏宗族と祠規に関する基礎情報を収集するため、潘氏祠規を含む『潘氏宗譜』[注1]や、余村の歴史を記録した『余村誌』[注2]などの主要文献を分析した。これにより、祠規の成立背景、条項内容、および宗族秩序との関連性を把握した。

(2) 現地調査 2017年から2024年にかけて、余村で計10回の現地調査を実施した。2021年には『余村誌』の編纂に参与し、潘氏宗譜の翻訳作業を通じて、文献内容と現地の実情を照らし合わせた。また、潘氏祠堂の計測や写真撮影を行うとともに、潘氏宗族の子孫や余村の村民への聞き取り調査を実施し、祠規の翻訳精度を検証すると同時に、宗族社会の変遷や文化的特質に関する証言を得た。

(3) 宗族関係とその特質の明確化 上記(1)と(2)の調査結果を踏まえ、潘氏祠規の具体的な内容を分析し、宗族の関係とその特質を明らかにした。

## 3. 先行研究

近年、中国政府の「郷村振興」政策により、余村を対象とした地域研究が増加している。しかし、潘氏祠堂および祠規に関する研究は全く行われていない。全国的には祠堂に関する研究が多く見られるものの、祠規に焦点を当てた研究は依然として少ない。

祠規に関する代表的な研究として、陳雪明の『明清時代績溪旺川の曹氏祠規的時代変化』[注3]が挙げられる。この研究は、祠規が宗族秩序や祭祀の変容に果たした役割を分析しているが、対象は徽州地域に限られている。また、趙華富の『徽州宗族的研究』[注4]では、祠堂や祭祀を論じているものの、祠規そのものを通じた宗族関係の特質に関する議論は見られない。

## 4. 潘氏祠規の概要

### 4.1. 潘氏祠規の主要な内容

前の三章では潘氏祠堂と潘氏宗族について詳述した。さて、それでは、具体的に潘氏祠規をみていきたい。潘氏祠規の内容は、表5-1～5-4の通りである。

## 4.2. 潘氏祠規の編纂経緯

潘氏十世の子孫である潘崇涇は、父親の潘学璜の遺志を実現するために、商売をしていた湖北省漢口を去って南京余村に戻り、潘氏祠堂を建てることに力を注いだ。潘崇涇は、潘氏が口から口へと伝えられてきた各種の規約を整理し、1924年に祠規を作成した。このように、潘氏祠規の作成は、潘崇涇氏の手により、三房の潘崇淮氏の管理と四房の潘崇湘氏の指導により進められた。

表 5-1 潘氏祠規(第一則～第三則)

則	原文	訳文
一	<p>＜重教誨＞四民以士為首萬般以讀為先故養子必教教子必嚴不可怠玩從事也我族昔有通人多所創建今日豈皆愚子不可成全但以逐末者多務本者鮮故文理不通言行皆滯尚不能持身涉世違問其裕後光前乎茲議父兄之與子弟力果有餘各家延明師以分訓囊如不足公祠設義校以兼收務必自奮於後來尚冀克光乎前德正以養蒙重加留意切勿視為故事漠不關心</p>	<p>＜教育と教訓を重んじること＞四民(士農工商)は士(士大夫)を最上位とし あらゆる営みには学問が最も大事なことである 故に子どもを育てる人は必ず教育をし 教育する際には厳しくしなければならない 我が族には昔から優れた才能を持った人びとが多くいて 今日の成果をつくり上げた もし子孫たちが皆愚かなものばかりであったら これらの成果を全うできたであろうか 問題は枝葉末節に拘るものが多く 根本に力を尽くすものが少ないことである 結果として文章が意味をなさず 言葉や行動も役に立たず 世に身を立てるには不十分で 後世の子孫を裕福にし 祖先の名を輝かせることができるであろうか そのため父親や兄上などは子弟教育に力を入れ もし余裕のある家庭であれば 名の知れた先生を招き入れ 個別に教育を行う もし家計が苦しいならば 祠堂の学校である塾校に入らせ 無償教育を受けさせる これによって 後輩や子孫たちを奮起させ 祖先の美德を受け継ぎ 心身を鍛える正しい道を歩ませる 子孫たちは常にこれを心に留め 無関心やいい加減さを排除しなければならぬ</p>
二	<p>＜敬祭祀＞祖宗雖遠祭祀宜誠禮儀雖庸衣冠必飭倘言語喧嘩何為恭敬班聯錯亂何別尊卑故春秋祭祀行禮不可僭越飲福切勿號呶如有此等定行照罰</p>	<p>＜祖先を敬い祭祀を行うこと＞祖先は遠い存在であるが祖先の霊を祭る際には我々は誠実な心を持たなければならぬ 威儀を正す正装にし 大声を上げたり騒いだりしては 敬うことにならない 長幼の序が乱れていれば上下尊卑をわきまえないであろう それ故に 春と秋の祭祀では 拝礼は順番を僭越してはならない 神前に供えられた酒を飲む際には 大声で叫んで騒いではいけない もしこのような事があれば 必ず処罰される</p>
三	<p>＜清祠宇＞宗祠以樓神主其地務宜肅靜始足以萃祖考之精神近有不肖子孫幾視為空屋閒房常行堆置什物甚至時屆新正或藉為親朋博戲之所如此肆行無論旁觀不雅抑且自問何安今後如有復蹈前轍者一經察出定行重責不貸</p>	<p>＜祠堂を静肅に保つこと＞祠堂は祖先の霊が宿る空間であり 必ず静肅を保たねばならない このようにして始めて祖先の魂がそこに宿ることができる 最近何人かの不肖の子孫は 祠堂を空き部屋とみなし そこに雑物を堆積していた さらに 正月の際 親戚や友人を呼び寄せて 博打の場にもしていた そのような無謀な行動は 他人より見苦しいのみならず 自分でも安心できるものではなからう 今後 同じ過ちを繰り返す不正が発覚した場合 厳しく罰しなければならぬ 決して容認してはならない</p>

潘氏祠規は 10 部が印刷・製本され、その中の 9 部がすでに消失している。現地調査中に、筆者は潘惟墀氏の手によって保管されていた一部の潘氏祠規を発見した。この祠規には、全部で 12 則が記載されており、合計 1292 字に及ぶ内容が含まれている。

## 5. 潘氏祠規にみる宗族関係

本章では、文献調査と聞き取り調査に基づき、潘氏祠規におけるどのように宗族関係について検討した。潘氏祠規より特に重要な箇所について概観する。

### 5.1. 潘氏祠規にみる宗族における人と人との関係

潘氏祠規第一則「重教誨」(訳文：教育と教訓を重んじること)には、次のように書かれている。「萬般以讀為先故養子必教教子必嚴」(訳文：あらゆる営みには学問が最も大事なことである 故に子どもを育てる人は必ず教育をし 教育する際には厳しくしなければならない)。ここから、人的啓蒙教師は両親であり、親が厳格に教育する理由は、子どもが成長過程で適切な価値観と行動規範を身につけることで、家庭内部の秩序と調和を保つためであることが分かった。

表 5-2 潘氏祠規(第四則～第六則)

則	原文	訳文
四	<p>&lt;敦倫常&gt; 人為仁義禮智而教倫如死處姑出殘得宜          生本性禮棄倫敗族死如至婦同者愛          斯性禮棄倫敗族死如至婦同者愛          世孝智而常倫如死處姑出殘得宜          五悌用不者常有逆而情共甚          倫忠之是宜者忤殘翁責罰舉勿</p>	<p>&lt;倫常に従うこと&gt; 人にはこの世に生まれてきて 五倫(父子の親 君臣の義 夫婦の別 長幼の序 朋友の信)は綱領であり 五常(仁義礼智信)は本性である 孝悌忠信とは取りつくせず 仁義禮智とは使いきれないものである 人は自暴自棄になって このような大事な教訓を粗末に扱い 従わないことなどしてはならない そこで 人倫の道に従う者は鼓舞激励し 従わない者は厳罰に処する 我が族では両親にそむいたり 人倫を乱す者に対しては死刑に処する 残忍な無法者は容赦なく懲らしめる 義父母にそむく嫁は実の両親にそむくのと同罪として 離縁させ 夫にその責任を問う 赤ん坊を盗む者は残忍な無法者とみなし 罰金するとともに罪を公にする(犯罪の)事実を知るものは告発すべし 事情を知りつつ隠すものは同じ処罰を受けることになる 各人は自分の行動を慎み いい加減に扱ってはいけない</p>
五	<p>&lt;擇分長&gt; 夫一人一脈呼          吸自可相通然人各一          背不無異致非就範獨高          束豈盡人而年兼優之我          有擇長才僅德兼非一類          分數房品非一折衷統族          為標準萬事不既承據一          聽主高年但可於經理司          得罪幽任勞幾載欲善其          獲限以任勞幾載欲善其          人必得其人有功則公賞          有過則倍罰無辭</p>	<p>&lt;リーダーを選ぶこと&gt; 夫れ血のつながっている一族として 互いに息が合い呼吸も通じ合っているはずだが 各人の心は異なり違っていて各々が勝手なことをやるようになる よって人から制約や束縛を受けてこそ各自の本分を守ることができる 故に 一族には必ず族長を設け その族長にあたる人物は 必ずしも年長者に限らず 才能徳行を兼備したものを選ばなければならない我が族は 幾つかの房に分けられる大家族であり 品行も同じとは限らないので 賢明な人を選ぶことを基準とする 萬事族内の言い分を聞いて折衷しながら 族内を統一していく 人材を選ぶことは容易なことではなく 若輩が役に立てるならば 年長者のみに拘る必要はない いったん族全員に推挙され 族長となった者は 管理の職責を果たさなければならない しかし 頑固に自分の考えを通すことなく祖先を冒瀆することは避けなければならない 財務管理職については 任期を数年に限るべきである 仕事がうまく行うためには 適切な人材を得ることである その功績があれば 公に賞し 過ちを犯したら容赦なく罰することである</p>
六	<p>&lt;急課租&gt; 國課早完久垂          家訓祠租清付方順宗祠於刑下為          國課早完久垂          課出於田盛受宜          祭之租致上務取          用祭之必致上務取          有拖欠必致上務取          祠罰凡我子孫          所慎勿遲誤以自取</p>	<p>&lt;課税はすぐ払うこと&gt; 国家の課税は必ず速やかに完了させるべきであり 昔からの家訓となっている 同様に 宗祠運営に必要な共用費も族人たちは速やかに納入することが 人情に合致することである 国家の課税は田租の徴収によって実現され 一族の祠堂の祭祀に必要な穀物や供え物は悉くこの共用費に依存している もし国家に滞納があれば 役所から罰を受ける 同様に 族人に共用費の滞納があれば 祠堂から罰を受ける 潘氏の子孫である者は 国家の課税は速やかに完納し 祠堂の祭祀に必要な共用費も速やかに納入しなければならない 族人は慎重に対応し 遅滞することなく 罰を受けないようすべきである</p>

また、祠規第一則では「茲議父兄之與子弟力果有餘各家延明師以分訓囊如不足公祠

設義校以兼收」(訳文：そのため 父親や兄上などは子弟教育に力を入れ もし余裕のある家庭であれば 名の知れた先生を招き入れ 個別に教育を行う もし家計が苦しいならば 祠堂の学校である塾校に入らせ 無償教育を受けさせる)と述べられ、兄長が弟子に教育を施す責任が明確にされている。これは兄弟間の教育関係を定義し、家庭内での長幼の序列と教育責任を反映している。家族内での教育後に、条件のある家庭は外部の教育者からも正式な教育を受けるよう奨励されている。

さらに、祠規第七則「慎聯姻」(訳文：結婚相手およびその家族を慎重に選ぶこと)では、結婚に際しての品行の重要性が強調されている。婚姻の選択において、結納金よりも品行が優先されるべきであり、これは潘氏宗族の物質的価値観を排除する特質を示している。祠規第七則には「至於嫁女擇佳壻母索重聘娶媳求淑女勿計厚奩」(訳文：娘を嫁に出すことは良い夫を選ぶためであり 高額な結納を要求することは許されない 男性が妻を迎える際には淑女を求めるべきで 女性側に豪華な嫁入り道具を要求してはいけない)と記されている。これは、結婚において物質的な条件よりも道徳的な品行を重視することを示しており、これにより長期的な夫婦関係の調和を図るという思

表 5-3 潘氏祠規(第七則～第九則)

則	原文	訳文
七	<p>&lt;慎聯姻&gt; 同姓不婚於今為烈不知則卜買妾且然聯姻豈可冒昧乎若云姓多賜自唐朝已非一本試思本族之原於始祖究系何家我族異姓不許亂宗同姓不許聯姻昔有明訓今各凜遵如故犯不準入祠至於嫁女擇佳壻母索重聘娶媳求淑女勿計厚奩亦宜奉為至論勿視為陳言</p>	<p>&lt;結婚相手およびその家族を慎重に選ぶこと&gt; 同姓不婚(同姓の者との結婚を禁止する)は 今も厳しい決まりである 分からなければ神に占いを求めることさえある 妾を買う時さえも然りであるから 正式な結婚については 軽率に扱うことはできない もし誰かが姓は主に唐代に与えられたもので 同姓の人びとが必ずしも同じ祖先から出たわけではないと主張するならば では潘氏一族においては 最初の祖先はどの家族から来たのか 私たちの一族では 非潘姓の者が家族の系譜を乱すことは許されず 同姓の人びとの通婚は許されていない これは過去からの明確な訓示である 今日でも私たちは厳格にこれに従わなければならない 故意にこれを無視する者は 祠堂に入ることは許されない 娘を嫁に出すことは良い夫を選ぶためであり 高額な結納を要求することは許されない 男性が妻を迎える際には淑女を求めるべきで 女性側に豪華な嫁入り道具を要求してはいけない これらは至言であり 古くさい言葉とみるべきではない</p>
八	<p>&lt;謹術業&gt; 士農工商各執一業克勤克儉皆可成家倘無本分之圖甘為下流之業如男或為僧道或作優隸女或為乳媪或作媒娼故家之謂何而辱身賤行喪心忘恥如是耶或為盜賊奸邪更屬惡道不許入祠</p>	<p>&lt;職業を慎重に選ぶこと&gt; 士農工商 それぞれがそれぞれの職業を持ち 勤勉で儉約することによって家庭を築き 事業を興すことができる しかし 自分の本分を果たさず 下流な職業に従事することは許されない たとえば男性が僧侶や道士になったり 芸人や奴隸になったりすること 女性が乳母や仲人となることは 家族にとって恥辱であり 自己を卑下する行為であり 恥知らずと言わざるを得ない さらに盗賊や邪悪な者となる人びとも存在し これはより悪質な状況である このような人びとは宗祠に入ることは許されない</p>
九	<p>&lt;遠匪邪&gt; 正道當崇人每視為迂論邪人宜絶人多信其狂言不特嫖賭誘人易迷男子抑且僧尼設法兼惑婦人倘若執迷不悟為嫖賭必致傾家蕩產信僧尼難免敗俗傷風吾族男女豈可聽其行之哉如有此等鳴祠重若再不悛送官究治</p>	<p>&lt;邪悪から遠ざかること&gt; 正統派の作風を尊ぶことはしばしば古くさいとみなされる 本来 邪悪な人びとからは距離を置くべきだが しばしば邪悪な者の狂言や乱言を信じてしまう 売春や賭博は非常に誘惑的で男性を迷いに陥れやすいのみならず また僧侶や尼僧も女性を惑わそうとする もしもこのような行為に執着し続け 売春や賭博に溺れると 一家の財産を失うことになる さらに僧侶や尼僧に惑わされると 風紀を乱すことになる 我々潘氏一族の男女は このような行動を容認することはできない もしもこのような状況が発生した場合は 一族全体に通知し 厳しく処罰すべきである それでも悔い改めようとしない場合は 官庁に引き渡して罰せられるべきである</p>

想を反映している。

最後に、第九則「遠匪邪」(訳文：邪悪から遠ざかること)から、友人関係に対する考

表 5-4 潘氏祠規(第十則～第十二則)

則	原文	訳文
十	<p>&lt;息争訟&gt; 天由起也 剛健知莫改家矣一族宜處官構          互勝訟端所一變至閱免小會決自糾正          事貴謀始鮑甚至閱免小會決自糾正          救將管鮑甚至閱免小會決自糾正          為吳越兄弟鄰里鄉黨身之公議呈率          立喪兄於忿以大有宗長能自糾正          我族之如鳴宗長能自糾正          朝中投分如斷者</p>	<p>&lt;紛争を鎮めること&gt;天と水と違い行くは訟なり(「易経 第6章 天水訟」)          「天と水が相いれず(太陽や他の天体は東から西へ動くが 水は西から東へ流れて海に注がれる)」互いに譲らないのが訴訟の原因である 訴訟の原因がこと始めの行き違いにあることに鑑みて 揉めことの始めの段階で適切に対処しないと 大きな事態になる恐れがある 訴訟のせいで 元々 管鮑の交わりから孫臏と龐涓のような怨敵になってしまい 朱陳之好(仲良し同士)から呉と越(春秋時代)のような宿敵になってしまう さらに 訴訟のせいで 骨肉相食み争ったり 家庭崩壊が起こったり 兄弟が不仲になったりして 肉親どうしが傷つけ合うことになる 我々潘氏一族は 地域の人びととは 一生にわたる憂いを避けるために一時の怒りを忍ぶべきである もし族内で 大小さまざま不平不満などがあつた場合は 族長に知らせ 族内の公議で解決すればよい 族内では 決定し難い場合 官庁に報告して裁断してもらう もしも誰かが非常に傲慢で強引であり 軽率に他人と争おうとすれば 全体の族人はその行動を断固として矯正しなければならない</p>
十一	<p>&lt;惠孤貧&gt; 從來鰥寡孤獨 獨田下或出夏石得倘          最宜憫恤 獨田下或出夏石得倘          若干所收偏及守節成丁者給活察其自          恤不能而母若孤 獨田下或出夏石得倘          或喪母若孤 獨田下或出夏石得倘          季給麥孤 獨田下或出夏石得倘          其濫糶混行拳領聽其自然可也</p>	<p>&lt;孤児や困窮している者の面倒をみること&gt;鰥寡孤独の者は同情と思いやりを受けるべきであり 援助を受けるべきである 私たち潘氏一族は祭祀のためのいくらかの土地を所有しており その収入は公共祭祀の費用に使用されるだけでなく 救済と思いやりのための資産としても使われるが 全てのものに救済を及ぼすことはできない ただ 配偶者を亡くし子どもが幼い者や子どもがいないが貞節を守る者 母親が離婚されたか亡くなった孤児でまだ成人していない者には 夏には若干の小麦を提供し 秋には数石の米を提供する 一部の寡婦や孤児で貯えがあつて自分で生活することができる場合は 彼らに救済を提供する必要はない 救済を乱用し 不正に救済物資を受け取る行為が発覚した場合 厳しく罰せられる 困難に直面しているが救済を受けることを望まない者については 彼らの自由意志に任せる</p>
十二	<p>&lt;惜器物&gt; 祠中公各得遲人修有          原係箇族但母守祠收有          妨搬用還母守祠收有          當歸還着守祠收有          卓椅年人檢修有          值者今其修有          者察出重罰</p>	<p>&lt;器物を大切にすること&gt;祠堂内のテーブル 椅子 食器は 本来は全ての族人の共有財産である 自分が使用する必要がある場合 それらを借りて使用することは構わないが これらの物品を大切に使わなければならない 使い終わったら これらの物品を族内に返却しなければならない 遅延や物品の損傷を避けなければならない これらのテーブルと椅子は祠堂の管理者に預けられ 食器は当該年の責任者によって検査される もし損傷や紛失が発生した場合は 修理や補償が必要である 物品の返却が遅れたり 隠匿されたりした場合は 発覚すれば重い罰則が科せられる</p>

え方がみえてきた。潘氏宗族は常に族人に道徳的な高貴さを要求し、邪悪な行為に断固として反対するよう求めている。第九則の「邪人宜絶」(訳文：邪悪な人びとからは距離を置くべきだ)には、潘氏宗族内のメンバーに対する交友関係の制約が反映されており、邪悪な者から距離を置くことの重要性が強調されている。一方、祠規第十則「息争訟」(訳文：紛争を鎮めること)では、「我族於鄰里鄉黨務宜忍一朝之忿以免終身之憂」(訳文：我々潘氏一族は 地域の人びととは 一生にわたる憂いを避けるために一時の

怒りを忍ぶべきである」と記載されており、村人や他の宗族との交際する際には、口舌の争いの畏に陥ってはならず、謙虚で礼儀正しい態度を保つべきとされている。それは、潘氏宗族が友人関係と外部関係を調和し、対応することを反映している。

以上まとめてみると、潘氏祠規は徹頭徹尾人と人の関係を掘り下げており、宗族メンバー間の人間関係を強調するだけでなく、外部との交友関係にも対応することに焦点を当てている。

## 5.2. 潘氏祠規にみる宗族における人と祖先との関係

潘氏宗族の信仰は神霊崇拜ではなく、確固たる祖先崇拜であり、潘氏宗族の精神的支柱となっている。祭祀活動は祖先に対する敬意と懐古を表す重要な手段であり、それゆえ、祭祀は宗族の団結を促進し、祖先を尊重するための中心的な役割を果たしていた。

第二則「敬祭祀」(訳文：祖先を敬い祭祀を行うこと)では、「祖宗雖遠祭祀宜誠」(訳文：祖先は遠い存在であるが祖先の霊を祭る際には我々は誠実な心を持たなければならない)と記載され、祖先を尊重することが大事で、たとえ祖先が亡くなったとしても、依然として誠実で敬意を払う必要があることが強調されている。この規則に基づき、潘氏は春秋の祭祀を重視し、服装の厳粛さや儀式の順序に関する約束を設けていた。祭祀中、宗族の成年男性は正装で参加し、儀式の進行を乱さないよう努めなければならない。「禮儀雖庸衣冠必飭尙言語喧嘩何為恭敬班聯錯亂何別尊卑故春秋祭祀行禮不可僭越飲福切勿號呶」(訳文：威儀を正す正装にし 大声を上げたり騒いだりしては敬うことにならない 長幼の序が乱れていれば上下尊卑をわきまえないであろう それ故に 春と秋の祭祀では 拝礼は順番を僭越してはならない 神前に供えられた酒を飲む際には 大声で叫んで騒いではいけない)と記載される。

また、祠堂は宗族が祭祀を行い、族事を協議し、他の宗族活動を行う場所であり、潘氏宗族の尊祖敬宗という思想の集中的な表現であり、神聖な位置づけにある。祠堂の管理と秩序の維持は、潘氏宗族にとって極めて重要視されており、潘氏祠規にはそれに関する具体的な条項が明確に規定されている。まず、祠堂の大門は通常閉じられており、無断で開けることは禁止されている。祠堂の鍵は専任の「守祠人」が管理し、権限のない者が勝手に入ることを厳禁しており、これによって祠堂の平穏さと威厳が保たれ、祖先の魂が安息できるようにしている。次に、祠堂の内外の環境は清潔で整頓されていなければならない、宗族のイメージを維持するように努めるべきである。潘氏祠規の第三則には、「近有不肖子孫幾視為空屋間房常行堆置什物甚至時屆新正或藉為親朋博戲之所」(訳文：最近 何人かの不肖の子孫は 祠堂を空き部屋とみなし そこに雑物を堆積していた さらに 正月の際 親戚や友人を呼び寄せて 博打の場にもしていた)と指摘されている。宗族の共有空間である祠堂では、乱雑に物を積み重ねることが許されず、賭博や娯楽活動も一切認められていない。祠堂には祖先の位牌が安置されている。寢堂は祖先の魂が宿る場所であり、その管理は厳格である。祭祀活動以外では、窓戸は一律に閉鎖し、誰も自由に入ることは許されない。寢堂の威厳と静けさが保たれる。潘氏祠規の第三則「祠堂を静肅に」には、「宗祠以棲神主其地務宜肅靜」(訳文：祠堂は祖先の霊が宿る空間であり 必ず静肅を保たねばならない)とあって、潘氏宗族は祠堂の管理を通じて、祖先への敬意を示している。これらの規定は祠堂の神聖な地位を維持し、祖先の安寧を確保し、宗族の名声とイメージを守っている。以上まとめてみると、潘氏宗族における人と祖先との関係は、祠規によって具体的かつ厳格に規定されており、祭祀活動や祠堂の管理を通じて、その信仰と調和が実現されてい

た。祖先への敬意を示し、宗族全体の団結と名声を守るための重要な枠組みを提供しており、宗族の精神的支柱として機能していた。祠規を通じて、潘氏宗族は祖先との関係を保ちながら、その思想と伝統を次世代に受け継いでいる。

### 5.3. 潘氏祠規にみる宗族における人と社会との関係

潘氏祠規第六則「急課租」(訳文：課税はすぐ払うこと)には人と社会のあるべき関係がみえる。その中に次のように書かれている。「國課早完」(訳文：国家の課税は必ず速やかに完了させるべきであり)。潘氏宗族は、族人全員への奉仕と、国が定めた税金を期限内に支払うことを要求しているが、それは個々人が経済的な責任を果たすだけでなく、人と社会との関係が大事にされていることも判明できる。祠規は「急」に焦点を当て、安定した社会構造運営には早期に完成することが肝心であることを強調し、それは宗族の課税に対する使命感とそれに伴う宗族の名誉地位の安定性を反映している。国を第一に考えるべきとの社会に対する使命感という考え方は、宗族の国に対する奉仕を反映し、地域の宗族と国家との密接なつながりを強化する。

潘氏祠規第八則「謹術業」(訳文：職業を慎重に選ぶこと)では、「或為盜賊奸邪更屬惡道不許入祠」(訳文：さらには盗賊や邪悪な者となる人びとも存在し これはより悪質な状況である このような人びとは宗祠に入ることは許されない)と記されている。これは、不道徳または違法な職業に従事する者が、社会から非難されるだけでなく、宗族の祠堂からも排除されることを示している。この規定は、社会が個人の行動に対して強い制約をかけると同時に、その行動が社会に与える影響を反映している。

また、第五則「択分長」(訳文：リーダーを選ぶこと)では、「故族必有長非僅年齒獨高之謂必擇其才德兼優之人」(訳文：故に一族には必ず族長を設け その族長にあたる人物は必ずしも年長者に限らず 才能徳行を兼備したものを選ばなければならない)と述べられている。ここでは、宗族内でリーダーが必要であることが強調されており、リーダーの選出は年齢だけでなく、才能と品性の両方を重視するべきであるとされている。潘氏宗族は伝統的な世襲制を破り、徳と才能を兼ね備えた人材の選挙制度を確立している。これは、宗族という社会単位における権力分配が社会規範と倫理道徳を考慮する必要があることを反映している。さらに、第五則には「統一族以聽主張人才不易青年可任何必高年但既承闔族舉請得主理斷不可據一己偏見獲罪幽冥」(訳文：萬事族内の言い分を聞いて折衷しながら 族内を統一していく 人材を選ぶことは容易なことではなく 若輩が役に立てるならば 年長者のみに拘る必要はない いったん族全員に推挙され 族長となった者は 管理の職責をはたさなければならない しかし 頑固に自分の考えを通すことなく 祖先を冒瀆することは避けなければならない)と規定されている。賢明なリーダーを選出することで、宗族の業務が調和して運営されることが求められている。これにより、個人が社会組織内でリーダーシップを通じて社会秩序を維持し、集団の統一を確保する方法が示されている。会計担当者については、「經理司帳之人限以任勞幾載」(訳文：財務管理職については 任期を数年に限るべきである)と規定されている。これは、資金管理を担当する役割の重要性を反映し、宗族の資金を安定的に管理し、新しい活力をもたらし、権力の乱用を避けるために任期制限を設けている。「欲善其事必得其人有功則公賞以勸有過則倍罰無辭」(訳文：仕事が行うためには 適切な人材を得ることである その功績があれば 公に賞し 過ちを犯したら容赦なく罰することである)と規定されている。これは、組織の正常な運営を維持するための報酬と罰則の制度を強調し、潘氏宗族が人材の発掘、適材適所の重要性を重視し、明確な分業と評価制度を確立していることを示している。

最後に、第十一則「恵孤貧」(訳文：孤児や困窮している者の面倒をみること)では、「惟孀婦子幼或無子而能守節及孤兒母出或喪母而未成丁者毎年夏季給麥若干秋季給稻幾石(訳文：ただ 配偶者を亡くし子どもが幼い者や子どもがいないが貞節を守る者 母親が離婚されたか亡くなった孤児でまだ成人していない者には 夏には若干の小麦を提供し 秋には数石の米を提供する)と記載されており、これは孤寡老人や貧困家庭に対する救済措置を示しており、宗族が社会的に弱い立場にある人びとに対する配慮を示していた。このような救済行為は、宗族の社会的責任感を反映すると同時に、社会への支援と貢献を具体的に示していた。これらは、宗族が社会において支援の役割を果たすことを強化し、社会の公平と調和を促進するものであった。

#### 5.4. 祠規にみる宗族における人と器物との関係

祠規第十二則「惜器物」(訳文：器物を大切にすること)では、「事畢即當歸還毋得遲留以致損壞」(訳文：使い終わったら これらの物品を族内に返却しなければならない 遅延や物品の損傷を避けなければならない)と記載され、他人に対する誠実さと信頼性を重視し、借りたものは期限内に返却する。商売を営む潘氏にとっては、特に「信」は肝心であり、誠実に行動することのみ、成功に導くだろう。また、公共の器物も大切に扱うようにと説明されている。「祠中卓椅器皿原係闔族公共之物有事不妨搬用但各宜愛惜事畢即當歸還毋得遲留以致損壞卓椅着守祠人掌管器皿輪值年人檢收有用壞或失落者今其修賠有還遲或隱匿者察出重罰(訳文：祠堂内のテーブル 椅子 食器は 本来は全ての族人の共有財産である 自分が使用する必要がある場合 それらを借りて使用することは構わないが これらの物品を大切に使用しなければならない 使い終わったら これらの物品を族内に返却しなければならない 遅延や物品の損傷を避けなければならない これらのテーブルと椅子は祠堂の管理者に預けられ 食器は当該年の責任者によって検査される もし損傷や紛失が発生した場合は 修理や補償が必要である 物品の返却が遅れたり 隠匿されたりした場合は 発覚すれば重い罰則が科せられる)。このように、祠規は器物の大切さとその取り扱いに関する具体的な指針を提供しており、族人が器物を大切にし、共用資産を守ることが、宗族内での調和を維持するために重要であることを示している。

### 6. 潘氏祠規にみる宗族関係の特質

潘氏宗族の特質を研究することは、なぜ中国の伝統的な宗族が千年以上も栄え続け、現代社会の持続可能な発展に重要な示唆を与えるかを理解するのに役立つ。前述の祠規の分析から、潘氏宗族の以下の特質が明らかになった。

#### 6.1. 自律(自己律制)の特質

潘氏祠規は、家庭および社会における個人の責任と行動規範を強調している。子どもへの厳しい教育や祖先への敬意、祭祀活動に対する厳格な態度に至るまで、潘氏宗族は族人に対して自律を求め、家庭および宗族の秩序と調和を維持している。第一則「重教誨」では、父母が子どもを厳格に教育し、成長過程において正しい道德観念と行動規範を養うようにすることが明確に述べられている。また、祭祀活動においては、族人は身なりを整え、礼儀正しい言動を求められ、高度な自律が求められている。

#### 6.2. 互助(相互扶助)の特質

潘氏祠規の多くの規定には、宗族内部の互助精神が表れている。たとえば、第十一

則「恵孤貧」では、宗族は孤児や寡婦、貧困家庭を援助し、毎年季節ごとに彼らに食料を分配することが明確に示されている。このような互助行為は、宗族が弱者に対して抱く配慮を示すだけでなく、宗族内部の凝集力と団結精神を強化している。また、第一則には、兄が弟に対して教育を施すべきだと規定されており、これは兄弟間での互助関係を反映している。

### 6.3. 共治(共同管理)の特質

潘氏祠規は、宗族の事務処理において共治の理念をも表している。第五則「択分長」では、宗族は徳と才を兼ね備えた人物を族長に選出すべきであり、単に年齢に基づくものではないと強調されている。これにより、伝統的な世襲制度が打破され、徳と才の重要性が強調されている。祠規には、宗族の資金が透明かつ合理的に使用されることを確保するための具体的な会計管理条項も設けられている。また、宗族内には守祠人が配置されており、祠堂の管理を担当し、祠堂の神聖さと秩序を維持している。これは、宗族内部の分業協力と共治精神を反映している。

## 7. おわりに

伝統的な宗族システムは、実際には宗族の血縁に基づく古代の密接な地域共同体の自治体系であったが、現代社会の経済的・制度的変化に伴い、宗族制度は徐々に消失し、それによって伝統的な宗族思想が築いた緊密な共同体関係も解体された。しかし、現代社会では、個々の独立性と自由な選択を基盤とした社会関係やコミュニティ構造が構築される一方で、その受動性や脆弱性、緩やかな結びつきといった課題が顕在化している。

本章では、潘氏祠規を通じて宗族関係とその特質を分析し、それが自律、互助、共治といった特徴を持つことを明らかにした。また、それは、共同体の結びつきの強化に大きな影響を与える。これは現代社会におけるコミュニティ関係と比較して、より自発的で安定的であり、適応性や持続可能性、自治性を有しているという利点がある。このような特質は、新たな緊密で長期的に安定した社会構造を構築する上で非常に参考になる。

### 注および参考文献

- 1) 潘崇涇編：潘氏宗譜、出版元不明、1924 年秋、潘崇涇氏が主導して編纂した余村の潘氏宗族の系譜である。
- 2) 蘇子懿、李敏他：余村誌、南京出版社、2021
- 3) 陳雪明：明清時代績溪旺川の曹氏祠規の時代変化、社会科学文献出版社、pp. 113－127、2021
- 4) 趙華富：徽州宗族的研究、安徽大学出版社、pp. 5050－6464、2016

### 図の主典

- 1) 図 5-1：李偉氏撮影
- 2) 図 5-2、図 5-3：筆者撮影

## 終章

## 1. 各章で得られた知見

### 1.1. 序章で得られた知見

序章では、潘氏祠堂に関連する生活文化が直面している課題について考察した。まず、研究の背景と目的を明らかにし、次にこれまでの先行研究を概観した。さらに、研究対象地域の概要を説明し、研究方法や調査の概要を述べるとともに、論文全体の構成についても示した。

### 1.2. 第2章 潘氏祠堂の建造当初の構造と空間特質

本章においては、中国江蘇省南京市余村における歴史的建造物・潘氏 祠堂を対象として、文献調査、現地調査に基づき、建造当初の内部空間の構成要素、構成する材、装飾文様を再現し記録するとともに、その構造と空間特質を明らかにすることを目的としたものである。

調査・考察の結果、以下の知見が得られた。

- (1) 潘氏祠堂には水平方向ならびに鉛直方向の空間秩序が存在していた。門堂、享堂、寢堂は奥に行くほど高位であり、それに伴い床面や屋根などが高くなっていた。
- (2) 門堂、享堂、寢堂の順に「陰から陽へ、陽から陰へ」と変化する「陰陽交替」の空間配置が存在していた。
- (3) 奥に行くほど材料の使用量が多く質も高くなり、実際の用途に適した材料が用いられていた。
- (4) 日常・非日常の両面において人びとが集まる享堂は、耐荷重性能が高い床材が使われるとともに、吸音性能が高い空洞壁にされるなど用途に則した構造となっていた。
- (5) 奥に行くほど文様が多く、また、空間に応じて異なる意味を持つ文様が配置された。このように、同建造物は道德・倫理観を共有する役割を果たしていた。

### 1.3. 第3章 潘氏祠堂の日常と非日常の「使い方」にみる空間演出

第三章では、潘氏祠堂を対象として、文献調査、現地調査に基づき、建造当初における日常生活および非日常生活の使い方などを再現し記録するとともに、空間演出を明らかにすることを目的としたものである。

調査・考察の結果、以下の知見が得られた。

- (1) 潘氏祠堂は、余村では日常生活にも積極的に利用され、中国の他の多くの祠堂とは異なっていた。
- (2) 日常生活では、教育や議論、納税、福祉、賞罰の場として宗族の運営に貢献していた。
- (3) 非日常生活では、祭祀や人生儀礼の場として多様に利用され、「三礼の秩序」に基づいて配置されていた。
- (4) 祠堂への出入りや動線も日常と非日常で異なり、巧みな時間・空間演出が行われていた。
- (5) 潘氏祠堂は、人と祖先が共有する空間と認識され、人びとの祖先の加護への感謝と共同体への帰属意識が強化されていた。

### 1.4. 第4章 潘氏祠堂の建造過程と儀式にみる文化的特質

第四章では、潘氏祠堂の建造過程およびその際に行われた儀式を調査・記録し、それに内包された文化的特質を明らかにすることを目的としたものである。

調査・考察の結果、以下の知見が得られた。

(1) 潘氏祠堂の建造は、詳細な図面に依存せず、熟練した工匠たちが現場での経験と技術を駆使して行ったものである。技術の伝承は主に師弟制を通じて行われ、単に技術のみならず、工匠としての心得や作業上の心構えも口伝で受け継がれてきた。

(2) 建造材料は主に現地で調達されたものであり、沙木や柏木などの地域資源が使用された。また、地域の材料は用途に応じて工夫したり、他の材料と混合したりすることで、地域資材の利点が最大限に活用された。

(3) 祠堂の建造は、宗族内外の幅広い協力によって実現された。各工程は専門的な技術を持つ工匠によって担当され、また地域住民も建設に積極的に参加した。

(4) 潘氏祠堂の建造においては、自然環境との調和が特に重視された。材料の選定、加工、設計すべてにおいて環境への配慮がなされ、建造物の長期的な耐久性と安定性が確保されていた。

(5) 祠堂の建造に際しては、祖先と土地神の共存を象徴する数々の儀式が行われた。これらの儀式は、祠堂が祖先の加護を受ける神聖な場所であることを強調するとともに、宗族の未来の繁栄を祈願するものであった。

### 1.5. 第5章 潘氏祠規にみる宗族関係とその特質

第五章では、潘氏祠堂と密接に関連する「潘氏祠規」を通じて、宗族文化における規則の内容を分析し、その文化的特質を明らかにすることを目的としたものである。宗族が消滅しつつある中で、その文化的特質を再認識し、宗族文化の維持と伝承の重要性を明らかにした。

調査・考察の結果、以下の知見が得られた。

(1) 潘氏祠規は、家庭および社会における個人の責任と行動規範を強く求めていた。祠規においては、子どもに対する厳しい教育や祖先への敬意が強調されており、これによって宗族内の秩序と調和が保たれていた。また、祭祀においては、族人に対して礼儀正しい行動と身だしなみを重視することで、高度な自律が期待されていた。

(2) 宗族内部での互助精神が色濃く表れていた。たとえば、孤児や貧困家庭への援助が規定されており、これらの互助活動を通じて、宗族内の凝集力と団結精神がさらに強化されていた。また、兄弟間での教育や支援も推奨されており、相互扶助の精神が広く浸透していた。

(3) 宗族の運営においては共治の理念が示されていた。族長の選出に関しては、年齢に基づく世襲ではなく、徳と才を兼ね備えた人物が選ばれるべきことが強調されていた。また、宗族の資金管理には透明性が求められており、宗族内の分業と協力により祠堂の秩序が維持されていた。

### 1.6. 終章で得られた知見

終章では、これまでの章で明らかにしてきた知見を基に、当該地域における自然地理的特徴、資源概況、歴史、人口規模、文化特色や伝統技術などを統合的に考察した。その上で、南京市余村における今後の内発的な地域づくりに向けた具体的な指針を導き出した。

## 2. 潘氏祠堂の文化的特質の考察

文化は、社会を構成する人びとによって習得・共有・伝達される行動様式ないし生活様式の総体である。デザインとは、ただ物の色や形だけではなく、人間生活の『あるべき姿』の探求・提案である。すなわち、人が「もの」を使用するなどの際に生起する

「こと」、そしてその「もの」と「こと」に内包されている「いみ」を追及する作業こそが創造であり、デザインの行為の本質であると考えられる。

祠堂文化の創出において、人びとはどのような祀る空間を設計し、異なる時間においてどのようにその空間を使用するかを決定し、その使い方がどのような意味を持つのかを考えることが重要である。そして、その意味が人びとの生活にどのような影響を与え、さらにその背後にどのような空間観念や生活観念が存在するのかが、潘氏祠堂が持つ文化的特質の核心である。これこそ、祠堂文化の本質である。

本研究では、潘氏祠堂そのものと、その空間が日常生活および非日常生活において地域住民によってどのように活用されているかに焦点を当てた。それぞれの空間演出、建造過程や儀式、さらには潘氏祠堂に込められた約束事などを通じて、潘氏祠堂の文化的特質を明確にしてきた。

## 2.1. 時間と空間の秩序を基盤とする拠点として

潘氏祠堂は、「秩序」という核心的な文化的特質を体現しており、その秩序は空間と時間の二側面において明確に示される。祠堂は単なる建築配置にとどまらず、空間構成と時間のリズムが交差する場として機能し、人々が視覚的・身体的に秩序を体感できる場を形成している。

祠堂の空間構成は、水平方向および垂直方向の序列関係に基づき、明確な秩序が維持されている。門堂・享堂・寝堂は、外部から内部へと進むにつれてその地位が高まり、地面や屋根の高さも段階的に上昇する。また、内部へ進むにつれ、建築材料や装飾の質感が向上し、荘厳で層次的な空間演出がなされている。

さらに、祠堂内部には「陰陽交替」の空間構成が見られる。門堂は「陰」の空間とされ、女性の祖先の木主が安置され、装飾には女性を象徴する意匠が施されている。中央の享堂は「陽」の空間とされ、宗族の成員が日常的に活動する場として機能し、開放的な天井と十分な採光によって、明るい空間が演出されている。最奥の寝堂は再び「陰」の空間とされ、男性の祖先の木主が安置されている。このように、祠堂の空間構成は「陰-陽-陰」の秩序を形成し、宗族内の社会的役割分担を明確にするとともに、日常と非日常の境界を明示している。

祠堂の時間秩序は、年中行事と人生儀礼の二つの側面に体現されている。これらの儀礼活動は、祠堂における時間的なリズムを形成し、宗族の時間意識を強化する役割を果たしている。

祠堂では毎年、春祭と秋祭といった大祭のほか、夏祭や冬祭などの常祭が執り行われる。これらの祭祀は、四季の移り変わりに対応しながら、宗族と自然の関係を調整するとともに、宗族の時間意識の維持・強化に寄与している。

また、祠堂は出生、婚礼、葬礼といった人生儀礼の重要な場としても機能する。これらの儀礼では、執行者の役割や順序が厳格に定められ、宗族の社会的役割分担を明確にすると同時に、宗族内部の秩序を可視化する役割を果たしている。

祠堂における年中行事と人生儀礼は、宗族の時間秩序を構築し、代々継承されるリズムの中で、その秩序を再認識し、維持・発展させる契機となっている。

## 2.2. 共生の理念を体現する拠点として

潘氏祠堂は、単なる宗族の歴史や文化を継承する場にとどまらず、共生の理念を具体的に体現する多機能な空間である。その文化的特質は、宗族内部の結束と地域社会との関係性、さらには人と自然の調和の中に見出される。

日常において、祠堂は教育、議論、納税、福祉、賞罰などの宗族運営の中心として機能し、情報や資源の共有を促進する基盤となっていた。一方で、儀礼の場としての側面も持ち、祭祀や人生儀礼が執り行われる際には、祖先との精神的なつながりを象徴する空間としての役割を果たした。こうした場面の違いにもかかわらず、祠堂は単なる用途の変化にとどまらず、宗族の価値観や結びつきを可視化し、維持・強化する場として機能していた。

また、祠堂の運営には、宗族内部の役割分担と制度が深く関与している。族長は運営の中核を担い、房長や執事族人が具体的な管理業務を担当することで、内部の秩序と調和が維持されていた。さらに、祠規は族人の教育的役割を果たし、宗族内部の結束を強化するとともに、地域社会との協調を促進する機能も有していた。こうした制度のもと、祠堂は宗族内部の結びつきを超え、地域社会との協力や共生を支える場として重要な役割を果たしていた。

人生儀礼の場面においても、共生の理念が体现されている。族長が供物を捧げる儀式は、祖先と族人を結ぶ象徴的な行為であり、感謝と祈願の心を共有する場であった。また、儀門には儀礼ごとに異なる装飾が施され、それ自体が情報伝達の機能を持つとともに、宗族の重要な節目を共有する場となっていた。

これらの儀式や活動を通じて、潘氏祠堂は祖先と後代、宗族内部の成員、そして地域社会との緊密な関係性を構築する拠点として機能してきた。その象徴的な意義は、「天人合一」の宇宙観を反映するとともに、宗族文化の継承と地域社会との共存の可能性を示す重要な事例となっている。さらに、その多機能性により、潘氏祠堂は文化・社会・自然が相互に作用する場として、新たな社会構造の創出に寄与する可能性を持つ。

### 2.3. 地域資源と地方文化を体现する拠点として

潘氏祠堂のもう一つの重要な文化的特質は、地域資源の有効活用にある。この地域性の特質により、祠堂は地方文化と自然環境が高度に融合した象徴となっている。祠堂の建築資材は主に南京市余村の地元資源から調達され、木材、石材、レンガ瓦などの豊富な地域資源が活用されている。さらに、潘氏の祖先は余村の自然環境を深く観察し、先見の明を持って山林を購入し植樹を行い、地域の豊富な石灰資源を利用して石灰窯を開設した。山林と石灰窯の経営権を掌握することで、宗族は木材や石材といった重要な建材の確保をより自主的に行うことができた。これにより、建築コストを削減するとともに、今後の維持管理における安定的な供給も確保された。このような自給自足型の資源体系により、潘氏祠堂は宗族運営において高い独立性と持続可能性を維持している。これらの資源の適切な活用は、建築の安定性と耐久性を強化するだけでなく、祠堂と周囲の自然環境との深い結びつきを象徴するものとなっている。

また、祠堂の装飾模様や設計理念にも地域文化の特色が色濃く反映されている。たとえば、建築彫刻に用いられる吉祥文様、花卉模様、文字装飾などは、余村住民の集団的な記憶や価値観を体现し、祠堂を文化共同体の中心としての役割をさらに強化している。特筆すべきは、これらの装飾要素が単なる芸術的表現にとどまらず、宗族成員の家族としての帰属意識や歴史継承の象徴として機能している点である。その文様や意匠の内容には、潘氏宗族が長い歴史の中で培ってきた価値観が反映されており、地域文化の独自性を際立たせる要素となっている。

機能的な観点から見ても、祠堂は宗族活動の中で地域資源を最大限に活用している。建設の過程では、宗族内部の労働力や技術だけでなく、地域の職人を積極的に起用し、

宗族内の協力体制を促進した。さらに、祠堂建築に必要な木彫、レンガ彫刻、石刻などの工芸技術は地元の熟練した職人によって施されており、この過程そのものが地域の伝統工芸の継承を促進する役割を果たした。日常的な利用においても、祠堂の多機能性は地域の自然環境や社会資源と結びつき、宗族教育、文化活動、地域社会の運営などにおいて重要な役割を果たしている。

総じて、潘氏祠堂は地域の物質的・文化的資源を最大限に活用することで、地域文化の独自性を示すとともに、文化継承と自然資源の持続可能な利用のバランスを実現している。この特質は祠堂の文化的基盤を強化するだけでなく、現代社会における伝統文化の保護と再活用に関する重要な示唆を提供するものである。さらに、地域資源と文化的アイデンティティに基づく運営モデルは、農村社会の持続可能な発展における実践的な事例となり、宗族文化が現代社会の中でも適応し、革新的に発展し得る可能性を示している。

### 3. 潘氏祠堂の文化的特質の再認識に基づく内発的地域づくりの指針の導出

2017年、中国では「郷村振興(地域活性化)」を重要な発展戦略として提唱し、都市部と農村部の融合発展、農産物の生産性向上、そして人と自然の調和を図るなどの措置を通じて、地域の全方位的な振興を目指している。その中で、祠堂は祖先崇拜と宗族文化を象徴する場として、地域文化の核心的価値を体現している。祠堂は単に宗族の結束を象徴するだけでなく、文化伝承の重要な媒体でもある。

現代のグローバル化の文脈においても、祠堂の文化的機能は地域住民の帰属意識やアイデンティティの強化に貢献している。さらに、祠堂の活用は、文化継承の手段としてだけでなく、地域資源を活かした持続可能な発展にも寄与する可能性を持つ。例えば、祠堂を地域の学びの場として開放し、文化教育や歴史研究の拠点とすることで、地域住民の意識向上を促すことができるだろう。このように、祠堂を再認識し活用することで、伝統的な生活様式の継承だけでなく、地域文化の振興にも寄与し、内発的な発展を実現するための重要な推進力となり得る。

今後の研究は、地域住民との相互作用を通じて、祠堂の文化的特質をより客観的に理解させる方法に焦点を当て、地域住民自身が主体的に関与できる祠堂の新たな役割を模索することが求められる。また、祠堂を現代社会において革新的に活用し、地域づくりに新たな動力を与える可能性を探ることを目指す。

今後の地域振興の指針は、以下に分けて進める。

- (1) 地域住民を主体とし、地域資源と文化の共有、活用と伝承を主導する。
- (2) 伝統的な秩序を復活させ、現代の日常生活と非日常生活に根付かせる。
- (3) 「人と人」「人と空間」「人と自然」「人と祖先」の四位一体の共生の理念を通じて地域の調和を実現する。

### 4. 潘氏祠堂の文化的特質の再認識に基づく内発的な提案

潘氏祠堂は、地域社会における重要な文化的拠点として、祖先崇拜や宗族の結束を象徴してきた歴史的な場である。その建築は地域の自然環境や風土と密接に結びつき、長い年月を通じて地域住民の精神的支柱となってきた。しかし、近年の急速な社会変化やグローバル化の影響により、祠堂の文化的役割が徐々に薄れ、地域の若い世代の間で祠堂の意義が見過ごされつつある。このような背景を踏まえ、潘氏祠堂の文化価値を再認識し、その価値を現代社会に活かしていくことが、地域の内発的な発展を促すために不可欠である。

#### 4.1. 現在までに実施した提案

7年間にわたる現地調査において、潘氏祠堂の文化的特質を学術的に探究するだけでなく、地域文化の継承に関わる活動にも積極的に関与し、潘氏祠堂の活性化と利用促進に貢献してきた。

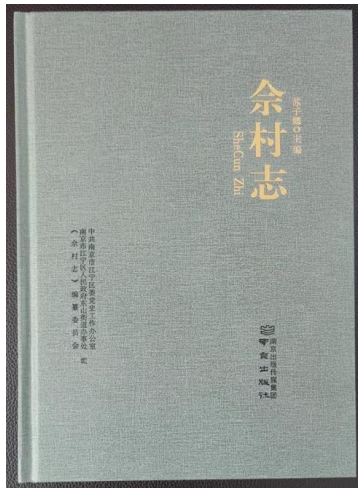


図 6-1 余村誌の編纂活動



図 6-2 村規民約議事会



図 6-3 祠堂内の宝探しイベント



図 6-4 重陽節の敬老イベント



図 6-5 小学生に潘氏祠堂の文様を説明



図 6-6 民宿の設立

まず、2021年に編集チームの一員として『余村誌』(図6-1)の編纂および出版に携わった。この書籍は余村の歴史と文化を詳細に記録し、村の集団的記憶を保存する重要な文献である。筆者は編集チームの中でも積極的に潘氏祠堂に関する物語や歴史的

資料の収集に注力した。この過程では、地元住民への聞き取り調査や歴史的文献の精査を通じて、祠堂の文化的特質を再発見することに大きく貢献した。また、収集した情報を基に執筆や編集の実務を担当し、潘氏祠堂が余村全体の文化的象徴としていかに重要であるかを際立たせる役割を果たした。

次に、潘氏祠堂の日常開放スペースを活用し、余村の村規民約について村民とともに議論を行い、定期的に議事会を開催している(図 6-2)。筆者は、この活動の企画運営に関与し、村民が積極的に参加できる環境を整える役割を果たした。これにより、村民同士が地域の課題について自由に意見を共有し、解決策を模索する場が提供され、地域コミュニティの結束力が強化された。

また、子どもたちを対象にした「祠堂内の宝探し」イベント(図 6-3)も実施し、祠堂への興味と探究心を育む機会を提供した。筆者はこのイベントの企画と運営に携わり、祠堂の歴史や文化を楽しみながら学べる内容を工夫した。この取り組みにより、次世代の子どもたちが祠堂に親しみをもち、地域文化への理解と関心を深めるきっかけを作ることができた。

さらに、村民と協力して「九九重陽節」(注 1)の敬老イベント(図 6-4)を開催し、潘氏宗族の礼文化における「孝老敬親」の精神を再現した。筆者はこの活動の企画および実施に積極的に関わり、村民との連携を深めながら準備を進めた。このイベントでは、村全体の老若が潘氏祠堂の前に集まり、地域の重要な文化的伝統を共に継承する機会を得るとともに、世代間の交流と絆を強化する場ともなった。

同時に、小学生を対象にした「潘氏祠堂の文様」をテーマとした説明会(図 6-5)も開催し、祠堂に込められた文化的な背景や深い意味を分かりやすく伝えた。この活動を通じて、子どもたちは文様に秘められた歴史や価値観に触れ、潘氏祠堂が地域文化の象徴であることを再認識する機会を得た。特に、吉祥文様や植物模様込められた願いについて学ぶことで、祠堂が単なる建物ではなく、人びとの思いや生活が反映された特別な空間であることを実感した。

最後に、余村の李家社では、地域初の民宿を創設し(図 6-6)、老人の休憩所としての機能を提供すると同時に、訪問者には潘氏祠堂や余村の古文化に関する無料ガイドサービスを行った。民宿は開業以来、全国各地から訪れる約 1000 人の観光客を受け入れており、余村の歴史と文化を外部に伝える重要な窓口としての役割を果たしている。また、地域住民が余剰スペースを有効活用するための支援を行い、村内の資源再利用を推進し、コミュニティの活性化にも寄与している。

#### 4.2. 現在までに実施した提案の検討

これらの活動を通じて、潘氏の方々や地域住民にインタビューを行ったところ、多くの方が「意義がある」と評価してくださった一方で、「活動の目的がよく分からない」「観光客による交通渋滞やゴミの問題が気になる」といった課題を指摘される声もあった。このようなフィードバックを受け、私自身も一度立ち止まり、自分の提案について改めて再考する必要があると感じた。

活動の中で、地域の文化や価値を守りながら地域住民や観光客とのバランスを取ることの難しさを実感した。また、地域に貢献したいという気持ちが強すぎて、結果を急ぎすぎている部分もあったかもしれないと反省した。この経験を通じて、活動の目的や方向性を地域の方々と共有し、持続可能な地域づくりに向けたより良い方法を模索する重要性を改めて認識した。

今後は、地域住民とのさらなる対話を重ね、具体的な課題解決に向けた提案を行う

とともに、活動の透明性と住民の共感を高める努力をしていきたいと考えている。

### 4.3. これからの提案

本研究では、潘氏祠堂を中心とした地域振興のための具体的な取り組みとして、以下の提案を計画している。

提案一：

「祠堂清掃の日～祖先との対話と心の浄化～」

#### (1) 活動の目的

祠堂清掃活動を復活させ、地域住民が主体となり、地域文化の継承を主導する。

固定の時間・場所において、伝統的な清掃の順序に従い、秩序の重要性を再認識する。

「人と人」「人と空間」「人と自然」「人と祖先」の“四位一体”の共生関係を通じ、住民間の交流、心の浄化、地域文化への帰属意識を深める。

#### (2) 活動の時間と場所

時間：毎月の一と十五日の朝(昔の潘氏と同じ時間)。一日は新しい月の始まりを、十五日は満月を象徴し、それぞれ浄化と祈願の意味が込められている。

場所：潘氏祠堂。祠堂は祖先との対話の場として、住民の祖先への敬意を育む場所とする。

#### (3) 活動の流れと秩序

集合と祝詞：参加者は祠堂の門前に集まり、地域担当者は祝詞を捧げ、清掃活動の意義と秩序の重要性について話す。

清掃の順序：伝統的な動線に基づき、門堂から入り、享堂、寢堂の順に清掃を行う。これは「外から内への浄化」を象徴する。

献香と祈願：清掃が完了した後、寢堂内で参加者全員が献香と祈願を行い、香を焚きながら祖先に感謝の心を伝える。

#### (4) 実施体制

プロジェクトリーダー：祠堂の管理者と地域代表者

協力メンバー：知識を持つ地域住民文化専門家、筆者

技術サポート：ドキュメンタリー制作チーム、展示会運営スタッフ

住民参加チーム：地域の若者、長老

#### (5) 期待される効果

地域住民の共同参加を促進し、集団の結束力と文化への帰属意識を高める。

伝統秩序の復活：実際の行動を通して伝統の価値を体験し、秩序意識を次世代へと伝承する。

心の浄化：祖先との対話の場を通じて内面を見つめ、心身の調和を促し、地域の共生感覚を強化する。

提案二：

「祠堂の物語を語る夜～歴史と記憶を共有する～」

#### (1) 活動の目的

祠堂にまつわる歴史や物語を共有し、地域住民が文化的なアイデンティティを再認識する機会を提供する。

高齢者から若者へと物語を語り継ぐことで、世代間の交流を促進し、地域文化の継承を図る。

祠堂の文化的特質を広く発信する。

#### (2)活動の時間と場所

時間：毎月第1土曜日の夜を中心に開催。

場所：潘氏祠堂の享堂内に特設の座談スペースを設置。

#### (3)活動の流れ

集合と導入：地域住民が祠堂に集まり、司会者が物語の背景と意義について簡単に説明する。

物語の語り部：地元の高齢者や専門家が祠堂にまつわる歴史的な逸話や伝説を語る。

質疑応答と交流：参加者が物語に関する質問をし、自由に意見を交換する。

締めくくり：祠堂の前で記念写真を撮影し、参加者同士の絆を深める。

#### (4)実施体制

プロジェクトリーダー：祠堂の管理者と文化遺産保護の専門家

協力メンバー：祠堂にまつわる歴史的逸話や伝説を語る地域の高齢者、筆者

技術サポート：地域文化のアーカイブとしてまとめる編集チーム

住民参加チーム：地域の若者

#### (5)期待される効果

地域住民間の世代間交流を促進し、集団の連帯感を強化する。

祠堂の文化的・歴史的価値を広く発信し、地域住民の関心を引きつける。

地域文化に対する誇りと帰属意識を醸成する。

### 提案三：

「祠堂アートワークショップ～文様と創造性を学ぶ～」

#### (1)活動の目的

潘氏祠堂に見られる文様を題材にしたワークショップを通じ、地域住民や子どもたちが伝統文化への理解を深める。

創造的な活動を通じて、祠堂文化を身近なものとして再発見する。

文様をモチーフにしたアート作品を制作し、祠堂や地域の象徴として展示する。

#### (2)活動の時間と場所

時間：毎月第3日曜日の午前中。

場所：祠堂の享堂または余村の公共施設。

#### (3)活動の流れ

文様の説明：祠堂に使われている代表的な文様(文字文様、植物模様など)を簡単に紹介。

デザイン体験：参加者が文様をもとにしたオリジナルのアート作品を制作(絵画、版画、彫刻など)。

展示と共有：完成した作品を祠堂内または村のギャラリーに展示し、地域住民に公開。

#### (4)実施体制

プロジェクトリーダー：祠堂の管理者とアート教育者

協力メンバー：伝統建築技術の職人、アーティスト、筆者

技術サポート：デザインサポートチーム、展示サポートチーム

住民参加チーム：地域の若者、高齢者

#### (5)期待される効果

子どもたちや若者の文化的興味を喚起し、地域文化を次世代に継承する。

住民間の交流を促進し、創造的な活動を通じて地域文化の活性化を図る。  
文様をテーマにしたアート作品が地域の新たな象徴となる可能性を生む。

#### 提案四：

「享堂再開～地域住民の議論と学びの場として～」

##### (1) 活動の目的

潘氏祠堂の享堂の再活用を通じ、地域住民の生活の一部として復活させる。  
また、高齢者が地域文化の担い手として再び活躍できる場を創出する。  
地域住民を主体とした文化的交流・学習を推進し、住民間の絆を深める。  
高齢者の知恵や技能を次世代へ継承し、地域文化の発展を支える。

##### (2) 活動の時間と場所

時間： 毎月の第一週と第三週の土曜日午前

第一週：住民議論会（地域課題の共有や文化活動計画）

第三週：技能・知識の共有（地元の高齢者による農業や手工芸の技能講座を実施）

場所：潘氏祠堂の享堂

##### (3) 活動の流れと秩序

集合と開会の挨拶をする。

参加者は享堂に集まり、地域代表者が活動の目的や意義を説明する。

第一週：住民議論会

地域課題の共有、文化活動の企画、祠堂の活用案について意見交換を行う。

高齢者の経験を活かし、地域の発展について多世代で考える。

第三週：技能・知識の共有

高齢者が講師となり、農業技術、手工芸、伝統的な生活知識などを伝える。

参加者は実践を通じて学び、地域文化の継承を促進する。

活動の最後に、参加者同士で学びや感想を共有し、次回の活動につなげる。

##### (4) 実施体制

プロジェクトリーダー：祠堂の管理者と地域代表者

協力メンバー：高齢者、地域住民、文化専門家、筆者

技術サポート：記録・広報担当、地域文化振興団体

住民参加チーム：若者、子ども

##### (5) 期待される効果

高齢者の社会参加を促進：祠堂という舞台を通じて活躍し、自信を取り戻し、地域内での役割を再認識する。

世代間交流の促進：高齢者の経験と若者の活力が融合し、地域内での世代間の絆が強化される。

地域文化の継承と発展：高齢者の知識・技能を次世代へ継承し、地域文化の継続的な発展を支える。

祠堂の活用促進：享堂を「学びの場」として活用することで、祠堂の社会的役割を再構築し、地域住民がより身近に感じられる場とする。

#### 提案五：

「伝統行事と結婚式の記録と再演出～潘氏祠堂を中心とした地域文化の継承～」

##### (1) 活動の目的

地元の高齢者や知識を持つ住民の協力を得て、伝統行事を再構築する。

祠堂を拠点に行事の再演出を実施し、地域住民や外部訪問者が参加できる機会を提供する。

#### (2) 活動の時間と場所

時間：

年中行事：地域住民が享堂に集まり、討論を通じて行事の日程と内容を決定する。

人生儀礼：結婚式や成人式などの特別な儀礼は随時開催する。

場所：潘氏祠堂

#### (3) 活動の流れと秩序

集合と議論

住民が享堂に集まり、地域の代表者が行事の趣旨と目的を説明する。

参加者が意見を交換し、具体的な行事の内容や日程を決定する。

伝統行事の再演

決定した行事に基づき、伝統的な儀式の再現を行う。

高齢者が主導し、若者や子どもたちが参加することで、世代間の交流を促進する。

記録と発信

行事の様子を写真や映像で記録し、地域のアーカイブとして保存する。

SNS や展示会を通じて外部への文化発信を行う。

#### (4) 実施体制

プロジェクトリーダー：祠堂の管理者と地域代表者

協力メンバー：高齢者、地域住民、文化専門家、筆者

技術サポート：記録・広報担当、映像制作チーム

住民参加チーム：若者、子ども

#### (5) 期待される効果

伝統行事の復活：地域に根付いた行事を再現し、住民間で文化の意義を共有する。

世代間交流の活性化：高齢者の経験と知識を次世代へ継承し、地域の一体感を高める。

祠堂の新たな活用：祠堂を単なる建築物としてではなく、非日常的な交流空間として機能させる。

文化の記録と発信：記録と公開を通じて、外部訪問者へ地域文化を発信し、地域の認知度を向上させる。

### 5. 潘氏祠堂の文化的特質の再認識に基づく内発的地域発展の展望

内発的地域発展とは、地域が持つ独自の資源や文化的要素を最大限に活用し、外部の影響に左右されずに自らの力で持続的な発展を遂げることを指す。潘氏祠堂は、地域の歴史的・文化的資源として、地域振興の中核となり得る可能性を秘めている。その歴史的背景や文化的特質を再評価し、未来に向けた地域の発展の指針として活用することが重要である。潘氏祠堂を軸にした具体的な地域発展の展望を以下の3つの側面から考察する。

#### (1) 潘氏祠堂の内部空間配置とその秩序の再現

潘氏祠堂は、宗族の象徴としての機能を有するだけでなく、その内部空間の構成や動線設計も極めて精巧である。本研究では、潘氏祠堂の空間配置とその秩序を明確にした上で、復元作業を進める。具体的には、文献調査、現地測量、聞き取り調査を通じて、祠堂内部の空間構造や各エリアの機能を詳細に分析し、歴史的視点からその変遷を考察する。また、祭祀儀礼、人生儀礼、日常利用における空間演出の特徴を体系

的に整理し、当時の祠堂の機能や使用方法の再構築を試みる。本研究を通じて、潘氏祠堂の文化的意義をより深く理解するとともに、地域社会が伝統空間の秩序と文化的価値を再認識する契機となることを目指す。

### (2) 潘氏祠堂の多面的活用可能性と地域発展への応用

潘氏祠堂は、宗族の祭祀や重要な集会が行われる場としての役割を果たしてきたが、現代においてはその活用方法が限られている。本研究では、潘氏祠堂の持つ多面的な価値を再評価し、地域発展への応用可能性を探る。特に、文化遺産としての保存だけでなく、地域住民が積極的に活用できる場としての可能性に注目し、教育、観光、コミュニティ活動といった異なる視点からその活用方法を検討する。また、他地域の成功事例との比較分析を行い、持続可能な活用モデルの提案を試みる。最終的に、潘氏祠堂を通じた地域の文化的アイデンティティの強化と、地域活性化の具体的な方策を示すことを目指す。

### (3) 潘氏民居を研究し、より豊かな潘氏宗族の生活文化を構築

潘氏祠堂とともに、潘氏民居もまた宗族の歴史や生活文化を理解する上で重要な要素である。本研究では、潘氏民居の建築様式や空間構成、住民の生活習慣を分析し、潘氏宗族の生活文化の特徴を明らかにする。特に、徽派建築の伝統を受け継ぐ民居のデザインや機能性に注目し、日常生活の中でどのように宗族の価値観や儀礼が反映されているかを考察する。また、現存する潘氏民居の保全状況や課題を整理し、文化的景観としての維持・発展の可能性についても検討する。さらに、住民への聞き取りを通じて、現代における潘氏民居の役割とその変容を探り、地域の文化的持続可能性を高めるための方法を模索する。

このように、潘氏祠堂は単なる歴史的建築物ではなく、地域の未来を描くための「生きた遺産」である。文化的特質を再認識し、地域発展にどう活用するかが、現代における重要な課題である。本研究を通じて得られた知見を基に、潘氏祠堂の研究方法を他の祠堂にも応用し、地域間の異同を明らかにすることで、広範な地域発展の可能性を探る道を拓きたい。

### **注および参考文献**

- 1) 重陽節は中国の伝統的な節句の一つで、旧暦の9月9日に祝われる。不老長寿や健康を願う日として知られ、陽の数「九」が重なることから「重陽」と呼ばれる。また、中国では老人を敬う日として「敬老節」とも呼ばれる。

### **図の主典**

- 1) 図 6-1、図 6-2、図 6-5：筆者撮影
- 2) 図 6-3、図 6-4：李偉氏撮影

## 謝 辞

本論文の執筆にあたり、研究室の教授である植田憲先生、ならびに助教の青木宏展先生に、心より深く感謝申し上げます。お二人には常に惜しみなく貴重なお時間を割いてご指導いただき、心から感謝の念に堪えません。

私が植田研究室とのご縁をいただいたのは、2016年に千葉大学で開催された藍染体験会がきっかけでした。そこで初めてデザイン文化計画研究室の研究分野に触れ、2017年4月より研究生として植田研究室に所属し、日本での研究生生活をスタートさせました。振り返れば、7年という時間があっという間に過ぎ去り、その間、長いようで短くも感じられる日々を送ってきました。

修士課程では、植田先生のご指導のもと、九州や東京、千葉での現地調査に参加し、藍染や陶芸、田植え、餅つき、ドローンを使った空撮など、さまざまな体験を通じて「野に出て生活を学ぶ」という理念を実践する機会をいただきました。この豊かな修士課程の経験を与えてくださった植田先生には、改めて感謝申し上げます。

博士課程に進むと、植田先生の研究に対する一層厳格で真摯な姿勢を強く感じるようになりました。一方で、植田先生の包容力には心から感動しています。先生はまるで父親のように、静かに私たちの成長を見守り、あえて多くを語らず、自由に試行錯誤する機会を与えてくださいました。失敗に落ち込んだときには、「人生は体験そのものだ」と優しく励ましていただき、その言葉に支えられて、私は自分の興味に素直に向き合い、新たな挑戦に踏み出すことができました。

助教の青木宏展先生には、心より深く感謝申し上げます。修士課程の頃から、青木先生はまるで兄のような存在であり、植田先生の指導で理解が難しいことがあった際には、いつも気軽に相談に乗っていただきました。夜遅くにもかかわらず、青木先生は迅速かつ的確なアドバイスをくださり、そのおかげで問題をスムーズに解決することができました。

さらに、修士課程より松尾恒一先生の授業を履修し、先生のご指導のもと、多角的な視点から自らの研究を見つめ直す機会をいただきました。松尾先生は常に新たな視点を提示してくださり、そのおかげで研究に対する視野が広がり、より深い考察が可能となりました。心より感謝申し上げます。

次に、修士課程の段階からご指導いただいております寺内文雄先生、佐藤公信先生、溝上陽子先生に、深く感謝申し上げます。皆様のご指導は、本論文の視点を一層深める貴重なきっかけとなりました。博士論文の審査においても、貴重なお時間をいただき、ご意見を賜りましたことに心より感謝しております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

加えて、岡本国際奨学交流財団様には、多大なるご支援を賜り、心より感謝申し上げます。日本に来たばかりの頃は生活への不安が大きかった私に対し、財団の皆様は温かくサポートしてくださり、新たな友人や広い世界に出会う機会をくださいました。OSFの皆様からは、励ましのお言葉や研究へのご支援を常にいただき、深く感謝しております。また、日本語を教えていただき、ワインのマナーを学ぶ機会をいただきました。さらに、広島への旅行にもお誘いいただき、貴重な経験をさせていただきました。改めて、心より御礼申し上げます。

日本科学協会からご提供いただいた笹川科学研究助成金にも深く感謝申し上げます。皆様のご支援により、私の研究が価値あるものであると確信し、さらに専念して取り組むことができました。また、送っていただいた書籍も新たな知識を得る大きな助け

となり、本当に感謝しております。心より御礼申し上げます。

研究室の皆様にも、ゼミや調査活動を通じて私の研究に対する貴重なご意見をいただき、学術的な成長だけでなく、個人的にも多大な支援をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

本論文の日本語執筆にあたり、在日外国人支援ボランティアの皆様にも、心より感謝申し上げます。日本語の文法について丁寧に校正していただき、論文中の表現についても貴重なご指導を賜りました。また、毎週事前に ZOOM のリンクをお送りいただき、私の質問にも優しくお答えくださいました。さらに、日本の古建築に関する知識を共有してくださったことで、学びを一層深めることができました。在日外国人支援ボランティアの皆様の温かいご支援のおかげで、私は自信を持って論文を完成させることができました。改めて、心より御礼申し上げます。

本研究に関する調査にご協力いただいた南京市余村の皆様には、心より感謝申し上げます。特に、手術直後で声を発することができない状況にもかかわらず、紙に丁寧に書いてご対応くださったある方には、深く感謝しております。また、私が日本にいる間も変わらず研究の進捗を気にかけてくださり、その温かいお心遣いに改めて心より御礼申し上げます。さらに、現地調査に同行し、親切に対応してくださった皆様、調査やインタビューにご協力くださった皆様にも、この場を借りて御礼申し上げます。

最後に、長年にわたり私を支えてくれた家族に、心から感謝します。特に、私の研究生生活を陰で支え、温かく励まし続けてくれた家族には、言葉では言い尽くせないほどの感謝の気持ちでいっぱいです。家族の支えがあったからこそ、私は安心して博士課程を修了することができました。

博士後期課程に進むことを決意したきっかけは、「異なる景色が見える」という一言でした。今、卒業を目前に控え、その景色が本当に変わったと実感しています。この数年間の研究を通じて、私の見方や考え方は大きく成長しました。この論文に至るまでのすべての経験と、多くの方々からのご支援に、心より感謝申し上げます。皆様のご恩に報いるためにも、これからも一層努力してまいります。心からの感謝を込めて、本当にありがとうございました。

2025 年 2 月 20 日  
デザイン文化計画研究室  
李敏